

---

# 超古代の星

サマエル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超古代の星

### 【Zコード】

N3428Y

### 【作者名】

サマエル

### 【あらすじ】

フォレ스트に掲載していた桜舞う星「続編。

今度は花の都巴里を舞台に、超古代の光『ウルトラマンティガ』の登場です。

## 超古代の星・前夜（前書き）

思えばモノローグに挑戦したのはこれっきりだつたよつた……

## 超古代の星・前夜

<大正元年・フランス、巴里 某所>  
その日は黒雲が空を覆い、滝のような雨が激しい勢いもそのままに  
降り注いでいた。

その雨の中を、一人の男がひた走っていた。  
両手に何らかの荷物を抱えている事から、何か大事な物を運んでいるらしい。

やがてその人物は一軒の小さな教会を見つけると、急いでいるのか  
少々乱暴に扉を叩いた。

「…………ハイ、いかがなさいましたか？」

ややあって、教会の神父が出て來た。

すると、男性は周囲に人の気配がない事を確認し、神父に言った。  
「すまない、実は人に命を狙われている。危険が去るまで私の息子  
を保護していただけないか？」

「な、何ですって！？それは大変です、ハイ。」

神父がそう答えると、男性は両手に抱えていたものを、神父に手渡  
した。

それは、毛布に包まれた生後間もない赤ん坊だつた。

「生きて危険をやり過ごせたら、必ず息子を迎えて来る。では私は  
これで…………。」

男性はそう言って、雨の中に消えて行つた。

「…………人が人のたつた一つの命を奪う…………何と罪深い事でしょ  
う、ハイ。」

大正元年、フランスは巴里某所で、一人の男性が惨死している姿が発見された。

物心ついた時、僕は一人だと気づいた。

親なんていない。

いつも一人ぼっち。

周りには集まつて遊んでる子供達…………。

みんな、僕と違つて青い目をしている。

。。

……

みんな普通だ。  
違う。

青い目をしてこるのは普通なんだ。

じゃあ僕は？

普通じゃないの？

この黄色い肌も

この黒い髪も

おかしいの……？

だから……

僕は一人なの？

一緒に遊べる友達も、

一緒に暮らす親も、

僕にはないの？

レノ神父に聞いても、神父は答えてくれなかつた。

レノ神父も、僕の事嫌い？

ある日、金髪のスースの男が言つた。

「神父殿、」こちらの教会に猿が紛れ込んでゐるよつですよ。」

そしたら、レノ神父はいつもより強い口調で言つた。

「彼は立派な人間です。髪や肌の色の違ひなど、関係ありません。」

……………

猿つて、僕の事だったんだ。

僕は普通じゃない。

だって、猿にしか見られないんだから。

怒ればいいのか、泣けばいいのか……？

僕にはわからなかつた。

ただ、

僕を産んだ親が、憎くて仕方なかつた。

こんなガラクタ一つ残して死んだ親が。

ああ、主よ……。

願わくば、

この憐れなる猿に、安らかな未来があらん事を……。

気がつけば、僕はいつの間にか、神父のまね事をしていた。

でも、そんなある日……

僕は突然声をかけられた。

「あの〜、こんな所で何してるんですか?」

初めてだった。

神父の他に、僕に話し掛けてきたのは。

「…………。」

驚いた。

驚いてしばらくその人を見ていた。

女の人だった。

僕よりちょっと年上で、赤い修道服を着ていた。

「…………君は…………驚かないの？』

尋ねてみた。

この黒い髪も、この黄色い肌も、不思議じゃないのだらうか。

すると、

「どうしてですか？」

当たり前のようそつと尋ねた。

「だつて、僕は髪の色も肌の色もみんなと違う。みんな、気味悪がつて近付かなかつた。君は、気味悪がらないの？」

「何言つてるんですか！黒い髪つて初めて見ますけど、カツコイイですよ！」

「…………え？」

カツコイイ？

みんな嫌がつたこの黒い髪が？

自分を褒めてもらつた事なんて、今までなかつた。

「私、エリカ＝フォンティースつていいます。貴方は？」

初めてだつた。

僕に自分から名前を教えてくれた人は……。

「僕…………、ダイゴ＝モロボシつていいます。」

「へえ～。ダイゴさんですか。強そりで素敵なものですねー！」

「あ、ありがとう……。」

思わずお礼を言つた。

嬉しかつた。

僕に話し掛けてくれた事、

僕を褒めてくれた事、

僕に名前を教えてくれた事、

そして……、

僕に笑いかけてくれた事。

エリカさん。

彼女は、僕に笑顔をくれた。

嬉しかつた。

幸せだつた。

いつの間にか、エリカさんは僕にとって、神父以上に大切な人になつた。

エリカさんがいるだけで、僕の心は明るいものになった。

これからもそうなると、僕は信じて疑わなかつた。

そう……

あの男がくるまでは。

光を継ぐ者（前書き）

あの独特な掛け声を描き切れたか、少し不安だつたり……（汗）

## 光を継ぐ者

いつもの澄み切った青空が、巴里の上に浮かんでいた。

「…………遅いなあ。」

周りで同年輩の子供達が遊んでいる中、ダイゴ＝モロボシの姿は修道院の中にあった。

とは言つても、今までのように暗い顔ではない。

誰かに会つ事を楽しみにしている時の、そんな顔だ。

「おやダイゴさん、まだ」「ひらひらおられたのですか？」

「あ、レノ神父様。」

レノが修道院に戻つて来たのは、その時だった。  
しかしダイゴが待つていた人とは違い、ダイゴは少しがつかりした表情になつた。

「天氣の良い日は、外へ出た方が良いですよ？」

「うん…………。人を待つてるから…………。」

レノ神父の勧めを、ダイゴは遠慮がちに断つた。

誰かと待ち合わせをしている時は、片方が相手に見つけられてもうまく待つているのが鉄則である。

両方が動き回つていると、中々見つけられないからだ。

「そうですか…………。あの、ダイゴさん？」

「何？」

「もしかしてその待っている人と違うのは……、ヒリカさんではないですか？」

「うん。 ううだけど、どうかしたの？」

「いえ……、聞いてみただけです、ハイ。」

一瞬心配そうな表情を見せるレノに尋ねるダイゴだが、何か言えない理由があるのか、レノははぐらかすように言つと、修道院の奥に行ってしまった。

すると、外の方から何かが派手にぶつかる音と同時に、悲鳴が聞こえてきた。

「ひつた～い～！」

「あ……、やっと来た。」

待ち焦がれた声に笑顔を浮かべ、ダイゴは外に飛び出した。  
そこには、赤い修道服を着た一人のシスターが、道の往来でひっくり返っていた。

「大丈夫？ エリカさん。」

そう言って手を差し延べる。  
すると、エリカはダイゴの存在に気付いた。

「あ、ダイゴさん……。」

差し出された手を掴んで立ち上がると、エリカは服についた汚れを  
はたき落とした。

「エへへ、恥ずかしい所見られちゃいましたね。」

そう言って、エリカは照れた表情でおどけて見せた。  
このエリカという人物、超がつく程の天然かつそそつかしさで、普段からやたらと道端の看板にぶつかるわ、何もない所で転ぶわ、騒がしいシスターだった。

しかし、ダイゴにして見ればそんな所もエリカの愛嬌で、その様子  
についつい微笑んでしまうのだ。

「あ～、ダイゴさん何笑ってるんですか～！？」

その微笑みを笑われたと思ったのか、エリカがむくれた。  
その表情も可愛いと思いながら、ダイゴは弁解した。

「違うよ。ただ、可愛いなって……。」

「え……？ もう、ダイゴさんったら……。」

面と向かって可愛いと言われた事が嬉しかったのか、エリカは恥ず

かしそうな表情で両手の人差し指を合わせた。

「…………あ、そうだ！ エリカ大事な事を忘れてました。」

「大事な事？」

おつむ返しにダイゴが尋ねると、エリカは無駄に力強く頷いた。

「そうです！ スッゴく大事な事なんです！」

「…………で？」

「はいー。」

「その大事な事って何な訳ですか？」

思い出した事が大事という事ばかり強調して、いつまで経っても本題に入らないエリカに、ダイゴが尋ねた。  
すると、エリカは勿体振るように話し始めた。

「実はさつき、凄い人に会つたんです！」

「うん。で、どこが凄い人なの？」

「まあまあ焦らないで。夜になつたら分かりますよ。」

「夜に…………？」

ますます分からぬダイゴは首を捻る。

すると、それに気付いているのかいないのか、エリカはうつとりし

た様子で言った。

「ああ～、エリカもう感激です～。正に夢みたいな出会いでした！」

「え……？」

その言葉に、ダイゴは一瞬不機嫌な顔を見せた。  
何者か知らないが、エリカの表情はやたらと嬉しそうだ。  
よく見ると、頬も僅かに紅潮している。  
少なくとも、自分には見せた事のない表情だ。

「エリカさん。それって一体誰がなの？」

怪訝な表情で尋ねるダイゴ。  
するとエリカは、勿体振るように言った。

「今夜、レビューを見に来て下さい。そうすれば分かります。」

そう言って、エリカは何かに気付いたように立ち上がった。

「あ、困っている人発見！それじゃダイゴさん、また後で！」

言ひつや、エリカはバタバタと走つて行つてしまつた。

「…………。」

その背中を無言で見つめるダイゴ。

結局わかつたのは、エリカが何か凄い人に会つて、少なからず好意を抱いているという事だ。

「誰なんだ……、一体……？」

顔も名前も知らないが、その凄い人というのに対して、ダイゴはいい感情を持てなかつた。

「……ハックション！！」

同時刻、日本大使館にて帝国海軍少尉、大神一郎は盛大なくしゃみをかました。

「ハハハ、大神君風邪かい？それとも、誰か君の噂をしているのかな？」

その様子に、思わず机に座つた男が笑つた。

鼻の下に立派に整えた髭を蓄え、真っ黒な髪を綺麗に分けている。彼は迫水典通。

フランス在住の日本大使で、かつては政治の世界にその名ありと謳われた、『鉄壁の迫水』その人である。

そして、今くしゃみをした人物こそ帝国海軍中尉にして、帝国華撃団隊長、大神一郎中尉である。

彼は一度に渡る帝都防衛を果たした功績を買われ、特別留学生とし

て、このフランスにやつて来たのだ。

最も、他に本当の目的があるのだが、彼がそれを知るのは次の日の事である。

「…………お、もひこんな時間か。大神君、今日はこの位にしよう。」

「はい、分かりました！」

そう言つて、書類を片付け始める一人。すると、ふと迫水が口を開いた。

「そうだ、大神君。君に紹介したい所があるんだ。少し、時間をもらえるかい？」

「はい。どちらに行かれるんですか？」

「フフ、それは行つてのお楽しみや。」

パリには、昼と夜で二つの顔がある。

昼は太陽の明かりのもと、美しい建造物の数々が姿を見せ、夜になればカジノやショーや、昼とは別の魅力が現れる。

昼夜を問わず華やかな街。  
それがパリなのである。

そのパリの真ん中に位置する所に、『テアトル・シャノワール』は  
あつた。

### シャノワール。

日本語にすると、黒猫という意味である。  
それを示すように、入口のネオンには洒落たスーツとハットを身に  
纏つた黒猫が描かれている。

シャノワールは、客に料理を振る舞いながらダンサー達のレビュー  
を見てもううといふ、ダンスレビューの正統派を貫いたスタンスで、  
パリでも屈指の人気を誇る店なのだ。

「…………」とか。

そのパリ屈指の名店の前に、ダイゴの姿があつた。

「ようダイゴ。またエリカさんのレビュー見に来たのか？」

「あ、ドミニクさん。」

ダイゴの姿に気付いた一人の青年が、声をかけて來た。  
金髪と蝶ネクタイが特徴的な、とても若い青年だ。  
すると、ダイゴも顔見知りらしく、笑顔で答えた。

「うん。エリカさんに来るよう言われたんだ。」

「へえー、お前専用のダンスでもやるのかね？」

「ううん。何でも凄い人に会わせるつて。」

「うつむきつむき、アーティックは考へ込むよつて顎に手をやつた。

「凄い人…………？もしかして、さつきの日本人じゃないか？」

「どうこのつ事？」

ダイゴが尋ねると、青年はキヨロキヨロと辺りを見渡して耳打ちした。

「実はさつきな、迫水大使が見慣れない日本人連れて来てたんだよ。ほら、エリカさんつて日本人に凄い興味あつたろ？」

そう言われ、ダイゴはエリカと出会つて間もない頃を思い出した。確かにエリカは、どういう訳か日本に興味を持つていて、ダイゴも一度何故丁髷をしていないのかと問い合わせられた事もある。

「なるほど…………、流石アーティックさん。何でも知つてるんだね。」

「くつ、まあな。このアーティックにかかるば、軽く解決さ。」

ダイゴに褒められたアーティックが気をよくする。すると、店の入口から鋭い声が飛んで来た。

「アーティック！仕事サボるんじゃない！」

「わひつー。」

「あ、シーゃん。」

見ると、メイドっぽい服を着た女性がアーティックを睨みつけていた。

彼女はシーと言つて、レビューの同念と売店の売り子を兼任している。

因みにドミニクの仕事は入口での客案内である。仕事の内容上シーの方が上の立場であり、ドミニクもシーに頭が上がらなかつた。

「あらあ、ダイゴ君じゃない。またエリカさんのレビュー見に来たのぉ？」

ダイゴの姿を見るや、シーが笑顔に早変わりした。この一人を始め、何度もシャノワールに入りしているダイゴは、みんなの顔なじみになつていた。

ダイゴもまた、ドミニクやシー達を兄や姉のように慕つていた。

「ううん。エリカさんから凄い日本人に会わせてあげるって言われたんだ。」

「そりだ！ なあシー、お前、迫水大使の連れに接待したり？ 何か知らねえか？」

ドミニクが思い付いたように尋ねた。  
確かにシーの仕事は司会と売り子。

もしかしたら、その人物と話をしたかもしれない。

ドミニクの予想は、ズバリ的中した。

「ああ、大神さんの事？ かつこよかつたわよー！ 正にサムライつて感じでえー！」

「…………何か、話したの？」

恐る恐る尋ねるダイゴ。

すると、シーやつとつした表情で答えた。

「ええ。売店にも顔出してくれたわよ？エリカさんのプロマイド買つてくれたしい～！」

「…………プロマイド…………？」

その言葉に、ダイゴの表情が俄かに曇った。

確かにシャノワールで売られているプロマイドは一枚50フランと高額で、ダイゴも中々金がなくて買えない程だった。

それを買うという事は、その大神という人物もエリカの事を少なからず気に入っているという事だ。

「…………」

ダイゴは、まるで自分とエリカの間に距離が生まれたような気がした。

エリカが自分を捨てて、その大神とかいう日本人のもとに行くんじやないか。

そんな不安にかられた。

「…………那人、今何処にいるか分からぬ？」

「え？ んつと～、確か楽屋に行つたと思つナビ…………。」

シーの口から楽屋といつ言葉が出るや、ダイゴは店内に突っ込んだ。

「あー、ダイゴ君！？ 関係者以外立入禁止よー！」

「…………どうしちまつたんだ？ ダイゴの奴…………。」

入口に残されたシードミークの一人は、呆然とダイゴの背中を見ていた。

ダイゴはシャノワールの中をなりふり構わず走り回った。

その大神とかいう日本人を見つけるために。

見つけてどうするのかは全く考えていないが、とにかくダイゴはじつとしていた。

そうしないと、エリカがいなくなるような気がしてならないのだ。そんな事を考えながら走っていたからか、ダイゴは目の前に立つ人影に気付かなかつた。

「わあっ！？」

止まりきれずに人影と派手にぶつかるダイゴ。途端に周囲の目がダイゴを向く。

「あいたたた……、君、大丈夫かい？」

頭を押さえて起き上がるダイゴに、声がかけられた。

「うん、僕は大丈夫…………。」

そう答えて口を開くと、ダイゴは思わず固まった。  
何故なら、そこにはいたのは…………。

「あ、あの…………？」

「…………。」

大神は焦っていた。

目の前には自分と同じ黒髪の少年が、頭を押されてこちらを見んでいる。

何か自分に敵意を示すような、そんな表情だ。

「だ、大丈夫かい？」

「…………。」

もう一度尋ねてみるも、帰ってきたのはやはり沈黙。  
どうしたものかと悩んでいる大神のもとに救いの手が差し延べられ

たのは、その時だつた。

「あ、大神さん見つけた！」

「エリカくんか……。」

見ると、レビューを終わらせて修道服に着替えたエリカの姿があつた。

「どうしたんだい？ やけに慌てているみたいだけど……。」

エリカと知り合つたのは今日が初めてだが、初対面の時はまだ落ち着きがあった。

何を騒々しく騒いでいるのか尋ねると、エリカはロビーを指差して言つた。

「ロビーで迫水大使が待つてましたよ？ 怒つてたから呼びに来たんです！」

「ハツーしまつた！ もうこんな時間じゃないか！」

大神は青い顔をして、一目散にロビーへ走つて行つた。

迫水から30分にロビーに来るようになっていた事を思い出したのである。

「…………エリカさん。」

「へ？…………あ、ダイゴさん！ いつからそこ？」

「さつきからいたよ…………。」

今更気付いたエリカにため息をつき、ダイゴはエリカに問いただした。

「エリカさん、 昼間言つてた凄い人つて……。」

「はい！大神さんがどうかしましたか？」

「いや、別に……。」

真顔で答えるエリカにそっぽぐらかし、ダイゴは背中を向けた。心が洗われるはずのエリカの笑顔を見ると、何故か無性に悲しくなつたのだ。

おそらくは、あの大神という男のせいで。

「やつだ！ダイゴさん！大神さんの事どう思いました？」

「…………ピックリしたよ。」

「やつぱり一ダイゴさんもやつ言つてくれるとと思つてましたよ。」

良い意味に受け取つたのか、笑顔を浮かべるエリカだが、ダイゴはそんな意味で答えた訳ではなかつた。

「（大神…………。何なんだあの人は！？）」

いきなり現れたかと思えば、瞬く間に周囲に溶け込んでいるあの青年に、ダイゴは驚きと共に言い知れぬ怒りを覚えた。

「（冗談じゃない…………！エリカさんを、あんないきなり現れた奴

に奪われるなんて……！」

14年間生きて来て、エリカは唯一心を許した存在なのだ。シャノワールの人達も好きだが、エリカとは違う。その大切な人が、いきなり現れた日本人に奪われるなど、到底納得できるものではなかつた。

「ウ～ツサッサッサ！」

静かな沈黙に包まれた夜の巴里を、一つの影が歩いていた。ウサギを連想させる独特な笑い声に混じり、刃物が擦り合つ音が聞こえる。

「感じる！ 感じるピヨン！ あの力が、この近くにあるピヨン！」

それは、人の姿をしたウサギの怪物だった。シルクハットとサングラスで着飾る様子は巴里らしくお洒落だが、その顔から滲み出る残虐性は隠しきれない。

「何としても見つけ出すピヨン！ オイラ達に刃向かつたあの男のよ

うに、このシゾー様がズタズタに切り裂くピヨン……」

シゾーと名乗った怪物は、そう言って両手の巨大なハサミを動かした。

「切るピヨン、そいつもラビッと切るピヨン…グチャグチャに切り刻んでやるんだピヨーン…！」

翌日、大神の姿はシャノワールからさほど遠くないカフェにあった。昨夜、アパートメントに送ってくれた迫水から昼頃大使館に来るよう言われたため、腹ごしらえをする事にしたのだ。

「……にするか……。すみません、注文をお願いします。」

よさ氣な席に座り、ギャルソンに声をかける大神。

しかし、ギャルソンは遠目でこちらを見るばかりで反応しない。

「困ったな……、無視してるのかな……。」

ありえない話ではなかつた。

日本人は、肌や髪の色が西洋人と全く違う。

その事から、得体の知れない人種と敬遠されるのは、この戦前の時代では仕方ない事だつた。

とはいえ、これでは腹ごしらえも何もあつたものではない。どうしたものかと考えていた大神の耳に、聞き覚えのある声が聞こえて来たのは、その時だつた。

「あいたつ！！」

何かがぶつかるような音と共にその声を聞いた大神が後ろを振り向くと、そこには見覚えのあるシスターがフラフラと歩く姿が見えた。

「エリカくん…………。そうだ、彼女に頼めば…………。」

東洋人という事で来ないなら、フランス人のエリカに頼めばいい。大神はそう考え、エリカの名前を呼んだ。

「お～い、エリカくん！」

「はい。…………あれ？誰か呼んだと思つたけど…………。」

呼ばれて返事はしたものの、それが分からず辺りをキョロキョロと見渡すエリカ。

大神は何とか気付いてもらおうと、両手を大きく広げて目立つようにアピールする。

すると、ようやくエリカが大神に気付いた。

「あ、大神さん！こんな所で会つなんて、これはもう運命ですね！」

「運命と呼ぶべきか偶然と呼ぶべきかはさておき、Hリカはトコトコと大神の所へやつて来た。

「何もないテーブルで何してるんです？もしかして日本の儀式ですか？」

「いや…………注文を取りに来てくれなくて…………。」

何故そんな発想に繋がるのかと不思議に思いながら大神が答える。すると、それを指し示すように腹の虫が鳴いた。

「じゃあ、私も何か食べます！すみませんー！」

そう言って手を振ると、ギャルソンはさっきまでの対応が嘘のようにやって來た。

「私はパン・オ・ショコラとホットチョコレート！大神さんは？」

「じゃあ、あの人と同じものを。」

期待通りに注文を取る機会をくれたエリカに感謝しつつ、大神は奥のテーブルに座った老紳士を指差して言った。  
大神は巴里に來るのは初めてだ。

日本とは少なからず食事の習慣も違うだらうし、実際メニューを見ても大神には初めて見る名前ばかりでちんぷんかんぷんだった。こういう場合は、無理に考えずに周囲の人々が食べる物と同じ物を頼むのが正解だ。特に現地の人なら、その間に最も適した注文をするため、俗に言うゲテモノを避ける事にも繋がる。  
無論エリカと同じものを頼んでもいいのだが、パンも飲み物も甘いのは遠慮したい。

「クロワッサンにコーヒーですね。すぐにお持ちいたします。」

そう言って、ギャルソンは足早に店内に戻る。

「ふう、エリカくんのおかげで、やっと朝食にありつけるよ。」

「巴里の人って気難しいですから、外国人には敬遠するかもしないですね。」

安堵のため息をつく大神に、エリカが答えた。  
ヨーロッパ、特にフランスとなると、革命で民主主義を勝ち取った名残から自分達を誇らしく考える所がある。

何処の馬の骨とも知れない東洋人に気安く接する事は、誇りあるフランス人のする事ではないと考えたのかもしれない。  
最も、本当は初めて見る外国人に敬遠する食わず嫌いなだけであるが。

「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ。」

程なくして、ギャルソンが注文の品を持ってきた。

「それじゃあ大神さん。早速いただきましょう!」

余程腹が減っていたのか、エリカは素早くカツプを手に取った。

「うん、美味しい!…………でも、ちょっと苦いかな…………?」

一口味わって首を傾げるエリカ。  
苦いのも当たり前だ。

何故ならそれは……。

「エリカくん……、それホットチョコレートじゃなくて俺のコー  
ヒー……。」

「えつ……！？あ、あの……私、頼んで来ます！」

やってしまったという顔で立ち上がるエリカ。  
しかしその時、エリカは後ろを歩くギャルソンにぶつかってしまった。

「あらうーー？」

その拍子でバランスを崩し、エリカは前のテーブルに倒れ込む。  
すると、その時に掴んだパラソルがへし折れて奥のそれを薙ぎ倒し、  
テーブルは全て将棋倒しになってしまった。

「エリカくん！」

その余りに悲惨な状況に、大神は思わずエリカに駆け寄る。  
その時、別の鋭い声が飛んだ。

「…………いつにも増して騒がしい事だな、エリカ。」

「あ、グリシーヌさん。」

その声の主に顔を向け、エリカが言った。

長く美しい金髪を右肩に流し、深海を思わせる青い服と瞳が特徴的な、エリカと同年輩の少女がそこにいた。

「…………エリカ、この男は？」

グリシーヌと呼ばれた少女は、目線だけを大神に向けて尋ねた。

「大神一郎さんです。日本からいらしたそうです。」

「日本人…………、ふん、またか…………。」

以前にも日本人に会つたような口ぶりで、グリシーヌは露骨に嫌悪な表情を見せた。

「まあいい、エリカの知り合いなら名乗つておいてやろう。私はグリシーヌ・ブルーメール。ノルマンディの血を引く、誇り高い貴族だ。」

「あ、自分は大神一郎…………。日本大使館でお世話になっています。」

その容姿からは想像できない威圧感に圧倒されながらも、大神は自己紹介をする。

「高が東洋の分際で、巴里觀光か？」

「いえ…………留学生として…………。」

随分上からの物言いに圧倒されつつ返事をする大神。すると、エリカがフォローするように口を挟んだ。

「ほら、グリシーヌさん。例の一件をまだ気にしてるんですか？だから日本やダイゴさんの事…………。」

「エリカ！余計な事は一切しゃべるな。…………大神一郎とやら、巴里の街を見る事は構わんが、見苦しい真似はするな。」

他言無用の事なのか、グリシーヌはエリカに釘を刺し、大神にそう吐き捨ててカフェを後にした。

「…………あ、あの人は？」

「グリシーヌさんですか？私の先輩みたいな人で、ちょっと怖い所が…………。」

エリカがそう言いかけた時だった。

その怖い先輩がいつのまにか戻っていたのである。

「…………エリカ、呼んだか？」

「な、なんでもありません！」

「そりゃ…………。」

そう言って、グリシーヌは今度こそその場を後にした。

「朝ごはん、もう一度頼みましょうか。すみません！」

何とかその場を取り繕うエリカ。

しかし忘れてはいけない。

外のテーブルを全て薙ぎ倒している事を。

当然迷惑千万のギャルソンの怒りは頂点な訳で……。

「あの……、もしかして怒ります?」

「…………。」

更に逆なでするような一言に、ギャルソンの拳がワナワナと震えた。つまり、怒っているという事だ。

「あ～ん、『めんなさあ～い!!』

「H、エリカくん!？」

一日散に走り出すエリカを、大神は慌てて追い掛けた。夢を見た。久しぶりに、あの日の夢だった。

降りしきる雨の中、教会に預けられたあの日。

戻つて来ると約束しておきながら、戻つて来なかつた父親。

「また…………あの夢か。」

それだけではなかつた。

見た事もない太古の遺跡に自分はいて、目の前に立つ巨大な石像が語りかけて来たのだ。

光を継げと。

「どういう事なんだ…………?」

ポケットにしまつている彫刻を取り出して見る。

鋸びた青銅で出来た、今にも壊れそうな彫刻。

しかし、ダイゴにしてみれば両親との繋がりを示す、たつた一つの遺品だつた。

エリカと出会つまで、ダイゴはこんな夢ばかり見ていた。

それをまた見るよつになつた事は、ダイゴにエリカがいなくなる事を暗示するよつに思えた。

「エリカさん……。」

ダイゴは窓の外に降る雨を見て、今日も会つ約束をした人の名前を呟いた。

一方そのエリカは、テルトル広場にて大神と雨宿りをしていた。カフェを飛び出して広場まで来た所を雨に降られ、こつして建物の上で雨上がりを待つてゐるのだ。

「雨……早く止まないかな……。」

ふと、エリカが呟いた。

「どうしたんだい、エリカくん。急にしんみりして……。」

さつきまでの快活さが嘘のよつに寂しそうな表情のエリカを気遣い、大神が優しく声をかける。

すると、エリカはポツリポツリと話し始めた。

「雨を見ると……、私が修道院に入れられた時を思い出して……。  
…。」

悲しい思い出なのか、エリカは辛い表情で一旦止めた。

「昔から、私の周りでは色々な奇跡が起ったんです。」

「奇跡？」

「人の病気が治つたり……。荒れ地に涌き水が出たり……。」

その言葉に、大神は昨日初めてエリカに会った時の事を思い出した。暴走した自動車に乗っていたケガ人を一瞬で治癒させた力。大神の予想が正しければ、それは靈力によるものだった。

「始めはみんな、喜んでくれたんですね。でも、その内にみんな私を気味悪がって……。」

「それで……、修道院に入れられたんだね？」

大神が言うと、エリカは微かに頷いた。

「…………大神さんも、私の事、変だと思いませんよね…………？」

「いや、素晴らしいと思つよ。」

「え?…………素晴らしい…………?」

即答した大神に、エリカは目を丸くした。

「やつや。気にする事はないよ。」

「大神さん……、ありがとうございます……。」

大神の言葉に、エリカは思わず目頭が熱くなつた。  
今までこの事を話して、距離を置かなかつた者はいない。  
しかし、この大神は違つた。

誰もが驚く事を、まるで以前も見た事があるかのように、理解を示してくれたのだ。

「エリカくん、聞いてくれ。実は、俺のいた日本にも、君のよつて不思議な力を持つ女の子達がいた。」

不思議な力を持つ女の子達。

大神は名前こそ口に出さなかつたが、それは間違いなく帝国華撃団花組だつた。

「…………私も、その人達みたいになれますか…………？」

「なれるさ。きっとなれるよ。」

まるでそれを保障するように言つ大神。

その様子に、エリカはよつやく笑顔を取り戻した。

「ありがとうございます！これで私も……ちゃんと戦えると思いります。」

「戦う…………？一体何と？」

「えー？あ、いや…………な、何でもありません！」

やはり口外出来ない事なのか、エリカは慌ててはぐらかした。すると、それと時を同じくして雨音が止んだ。

「わづかい？…………あ、雨も止んだみたいだよ？」

「本当だ…………。へへ、私、雨上がりの匂いつて大好きなんです。」

見ると、雨を降らせていた雲の隙間から、眩しい日差しが差し込んで来た。

まるで、Hリカの心に陽がさしたよつこ。

その時、教会の鐘の音が響いた。

「あつ！私教会に、ダイゴさんを待たせてたんですね！大神さん！先に失礼しますね！――」

そう言つと、エリカは勢い良く広場を飛び出した。

しつかり看板にぶつかって、

「いったいい！」

「Hリカくん…………。ぶつかる位なら走らなければいいのに…………。

「

最もな事をぼやきつつ、大神も仕事のために大使館へ歩き出した。

「な、何と一ダイゴさん、それは本当なんですか、ハイ。」

ダイゴから夢の話を聞いたレノ神父は、驚きの表情を浮かべた。いつもとやや様子の違うレノ神父に驚きつつも、ダイゴは頷いた。

「うん。昨日も見たんだ。神父様、何か知ってるの？」

ダイゴが尋ねると、レノ神父は神妙な面持ちで話し始めた。

「実は、ダイゴさんのお父上より、伝言を授かりましたです、ハイ。」

「伝言？」

「ハイ。貴方がそのような夢を見るようになつたら、伝えるようになります。」

そういつて、レノ神父はダイゴの父が残したという伝言を伝え始めた。

「もしも夢で巨人の導きがあれば、その導きに従つよつこと……。」

「

「巨人の導き？それって夢に出て来た、あの……。」

「正しくそれです、ハイ。」

重々しく頷き、レノ神父は続けた。

「そして、導きに従つた後、巴里に災いを齎す者を討つ光が現れる  
と……。」

「光……？」

やや抽象的な表現に首を傾げるダイゴ。  
すると、レノ神父は一枚の紙切れを取り出した。

「これは……？」

「その時が来たら貴方に渡すように言われていた地図です。カタコンベは分かりますか？」

「うん。知ってるけど……。」

カタコンベは、古代の巴里の建造物を残した地下の都市で、言わば  
もう一つの巴里だ。  
確かにそこなら、まだまだ未発見の隠し部屋等が沢山あってもおか  
しくない。

「そこに……、父さんが残した何かがあるんだね？」

「ハイ。何かは分かりませんが、間違이ありません、ハイ。」

「それじゃあ、エリカさんは会えないな…………。」

ダイゴが残念そうに呟いたその時、教会の扉が突然開かれ、話題の人物が顔を出した。

「ダイゴさん、お待たせしましたー！」

「あ、エリカさん…………。」

エリカの姿に少しだけ笑顔になるダイゴ。すると、エリカは開口一番ダイゴに謝罪した。

「『めんなさい、ダイゴさん。待たせちゃって…………。』

「ううん、いいよ。それに…………。」

気遣かつてくれたエリカに感謝しつつ、ダイゴは申し訳なさそうに答えた。

「『めんね、エリカさん。今日、ちょっと用事が出来たから…………。』

「

「用事？…………もしかして、このそり美味しいプリンでも食べに行くんですかー？」

「いや…………、ちょっと探し物を…………。」

何故プリンに話が飛ぶのか不思議に思いつつ、ダイゴは探し物と答えた。

父は今までレノ神父にも口止めしていたのだ。

カタコンベに何があるのかは分からぬが、余り人に知られるべきものではない事は確かだ。

それに、カタコンベの秘密が父の死に関係している事も十分考えられる。

もしそうなら、何かしらの危険を伴う事になるだろ？

そんな危険な調査に、エリカを巻き込みたくはなかつた。

「それじゃあ神父様、行つて来ます。」

そう言って出発しようとするダイゴ。

しかし、ここに待つたの声がかかつた。

エリカである。

「ちょっと待つて下さい！探し物ならエリカも手伝います！」

「えっ！？いや、でも……。」

「遠慮しないで！困つてる人を救うのが、シスターの勤めです！」

「いや、まあ、そうなんだけど……。」

突然の申し出に驚くダイゴ。

確かにエリカと一人になれるのは願つてもないが、流石に危険が伴うとなると話は別だ。

すると、ここでエリカがトドメの一言を口にした。

「…………ダイゴさん、エリカがいちや迷惑ですか？」

「ええっ！？いや、そんな事は全然…………！」

悲しそうなエリカの表情に、慌てて弁解するダイゴ。すると、その言葉でエリカは元の笑顔に戻った。

「やつぱりー、ダイゴさんならやつぱりしてくれる」と信じてましたよー。」

「…………ハハハ…………。」

すっかり乗り気なエリカの後ろで、ダイゴの渴いた笑いが漏れた。

「ダイゴさん…………、お氣をつけて…………。」

その後ろ姿に、レノ神父は声をかけて見送る事しか出来なかつた。

ダイゴとエリカは地図を頼りに、カタコンベの奥に入り込んだ。

「なんだか暗くて、気味悪いですね。」

ダイゴの後ろで、エリカが怖ず怖ずと呟いた。カタコンベはパリの観光名所の一つだ。

道に迷わないように、順路に沿つて明かりはついているが、地図が

示す道のりはその順路から大きく外れている。

当然そんな道に明かりなどなく、二人は暗闇に包まれた道を、懷中電灯の明かりと地図だけを頼りに進んでいた。

「カタコンベの中にこんな通路があつたなんて……、エリカ全然知りませんでした。」

初めて通る隠し通路を進む中、背中のエリカが呟いた。

「僕も初めてだよ。まさか父さんがこんなものを……。」

厳密には、おそらく父より以前の代から守られていたのであるが、この通路からは、想像もつかない長い年月を感じた。

「…………ダイゴさん、あれ！？」

ふと、後ろのエリカが上方を指差した。

「…………あれは……！」

その方向に光を向け、ダイゴは驚いた。

そこにいたのは、エッフェル塔と見間違わんばかりに巨大な、一体の巨人の石像だった。

日本でいう仏のような風貌は、正しく光を連想させる。

「…………これが、父さんの残した…………。」

石像の神々しさに目を奪われるダイゴとエリカ。

その時、真上の地上から突然の悲鳴が聞こえて来た。

「キヤ————シ——！」

「悲鳴！？ 一体何処から……？」

「上ですーー待つて下さーー今行きますからねーー！」

人助けしたいというシスターの血が騒ぐのか、エリカは一目散に走り出した。

「ああっ、ちょっとー！ エリカさんーー！」

たちまち姿の見えなくなつたエリカを慌てて追い掛けようとするダイゴ。

その時、真後ろで何かが光つた。

「ーー？」

その光に振り返ったダイゴは、思わず絶句した。

光を放っていたのは、あの石像だったのだ。

まるで長い眠りから目覚めたような輝きを放つ石像に魅入られ、指一本動かせないダイゴ。

そのダイゴの耳に、何者かの声が聞こえて来た。

「…………来たか…………光を継ぐ者…………。」

「え…………？」

それは、田の前の石像だった。

どういう訳か知らないが、石像は意思を持ち、ダイゴに語りかけているのだ。

「貴方は…………一体…………？」

「古代に封じられし…………災いを討つ者…………。」

その言葉に、ダイゴはレノ神父の言葉を思い出してハッとした。

(そして、導きに従つた後、巴里に災いを齎す者を討つ光が現れる  
と…………。)

「(まさか…………、わしあの悲鳴はその災い…………ー?)」

レノ神父の言葉が真実だとしたら、このパリに災いが起きようとしている事になる。

「田覚めの時は来た…………。光を継ぐ者よ、今こそ封じられし力を

田覚められた時だ。」

石像がそう言つた時、まばゆい閃光が走つた。  
その眩しさに思わず田を閉じるダイゴ。  
そして数秒経つて田を開くと、ダイゴはまたしても驚いた。

「…………石像が…………！」

何と、田の前にあつた石像が忽然と姿を消していたのだ。  
ついわざわざまで田の前にあつたのに。

「…………災い…………光…………。」

ダイゴは無意識の内に、石像の言葉とレノ神父の言葉を繰り返した。  
災いを討つ光。そして石像は、自分が光を継ぐ者と言つた。  
とこう事は…………、

「…………まさか…………、僕がその光を継ぐつて言つのか…………。」

とこう事は、自分が光となつてパリを災いから守るとこう事になる。  
守れるのか？自分にパリが。

そう自問した時、ダイゴの脳裏にエリカが浮かんだ。

「エリカさん…………、そうだ！エリカさんが！――」

先程の悲鳴がもし災いであるなら、エリカも巻き込まれた可能性が高い。

エリカの無事を祈りながら、ダイゴは走り出した。

「ここ」で、時間は災いが起きる少し前に遡る事になる。

「「ここ」が舞踏会の会場か。流石に立派だな……。」

青空の下、豪華な屋敷の庭に広がる会場の隅に、大神の姿があつた。この日、大神は急な用事の入つた迫水に変わってライラック伯爵夫人の主催する舞踏会に大使代理として参加したのだ。一応の正装はしているが、それでも目の前にいる貴族達の華やかさに比べれば月とスッポンである。

その時、気まずさを感じる大神の肩に手が置かれた。

「…………見ない顔だね。警察だが、少しいいかな？」

「いいつ！？じ、自分は迫水大使の代理として…………。」

振り返つて見ると、やや太つた警官が、怪しげにこちらを見ていた。大神は慌てて弁解しようとするが、それより先に別の声がした。

「仕事熱心だねえ警部。その人はあたしの客だよ？」

その聞き覚えのある声にまさかと思い、大神は振り返つた。すると、そこにはこのパーティーの主催者が、一人の秘書を連れていた。

「ようこそ、ムッシュ大神。あたしのパーティーに来てくれると嬉しいねえ。」

「グ、グラント・マー?じゃあライラック伯爵夫人とは……。」

大神はあからさまに驚いた。

目の前にいるライラック伯爵夫人は、昨夜シャノワールで会ったオナーのグラント・マその人だつたからだ。

「そりゃムッシュ。女はいくつもの顔を持つてるんだからね。」

大神の驚く表情に満足しながら、グラント・マは隣に立つ警官に手を向けた。

「紹介するよムッシュ。このパーティーの警備の指揮を取っているエビヤン警部や。」

「夫人の客人でしたか……、これは失敬。巴里市警のジム・エビヤンです。」

「はじめまして、エビヤン警部。日本大使館の大神一郎です。」

誤解してしまった事を詫びながら、挨拶として握手を求めるエビヤン。

大神もそれに気づき、お辞儀ではなく握手を返す。

「さあ、パーティーを楽しんでおくれ。メル、シー、ムッシュをもてなして。」

グラン・マがそう言つと、後ろに控えていた二人の秘書が前に進み出た。

「ウイ、マダム。ムッシュ大神、ビリヤーから。」

「冷たいものを用意しますから。」

「ワインでよろしいですか？ミネラルウォーターもござりますが……。」

「あ、すみません。ワインをいただきます。」

青く短い髪のメルに尋ねられた大神は、一瞬考えた後前者を答えた。理由は簡単。目の前にはワインしかないからである。ミネラルウォーターもあるのだろうが、取りに行かせるのは少々忍びない。

そんな事を考えていた大神の目に、見覚えのある人物の姿が写った。

「あれは……、グリシーヌか？」

長い金髪と青い服。間違いない。

すると、ワインを差し出したメルが驚きの表情を見せた。

「グリシーヌ様とお会いになられていたのですか？」

「グリシーヌ様は、ノルマンディ公の血を引く、ブルーメール家の御息女なんですよ。」

シーも同じように、驚いた表情を見せる。

グリシーヌはこのパリで名門中の名門。

悪い意味ではないが、大神が知り合う機会があつたとは考えにくい。それに大神も、会つたとは言え良い印象を持たれたようではなかつた。

「でも、何だかこっちを睨んでいるよつだけど…………。」

大神がシーにそう言つた時、後ろから声が聞こえた。

「それは、君が珍しいからですよ。黄色い東洋の猿がねえ。」

それは、一人の貴族だつた。

名前はダニエルというのだろうか。

右手の指輪の外側にそう名前が彫つてある。

「まあ、ここはミー達のような上流階級が集まる社交場ですから。君のような不釣り合いな動物には来て欲しくないと、まあそういう事ですよ。」

「何…………！」

「ほう？何か言いたい事でも？」

ぬけぬけと挑発するダニエル。

しかし、大神は睨むだけで怒鳴つたり殴つたりはしなかつた。

そんな事をすれば、自分を代理に任命した迫水や、パーティーを主催したグラン・マに迷惑がかかるからだ。

ダニエルも、それで大神は手が出せないと想い、すき放題言つているのだ。

「ムッシュ……サムライ…………。」

じつと耐え忍ぶ大神を助けられず、シーは残念そうな顔で大神を見つめる。

一方のダニエルは、更に大神を煽つて來た。

「おや、どうしました？黄色い猿が、怒つて赤くなりましたね。」

「……。」

怒りを堪えてダニエルを睨む大神。

すると、グリシーヌが騒ぎを聞いて歩み寄つて來た。

「ほら見たまえ。グリシーヌ様も君が目障りなようだ。」

自分の代わりに大神を追い出してくれるに違いない。  
そう考えていたダニエルだが、グリシーヌの怒りの矛先は大神ではなかつた。

「目障りなのは貴公の方だ。今すぐ失せろ。」

「へつ？」

「失せろ！一度と顔を見せるな！！」

「ひえ～！！」

グリシーヌに威嚇されたダニエルは、情けない悲鳴を上げてパーティー会場から逃げ去った。

他者を愚弄するダニエルの言動が、グリシーヌの気に障つたのだ。

「貴公も貴公だ。愚弄されて何故戦わん！」

続いてグリシーヌは、大神を指差して問いただした。ダニエルの言葉は人種差別もいい所である。怒らないはずがない。にも関わらず言い返す事もしない大神の態度も、グリシーヌは気に入らなかつた。

「それとも、何か理由があるのか？」

「…………別に。相手にする程の奴じゃない。」

本当はグラン・マと迫水に迷惑をかけたくないのが理由だが、おそらくグリシーヌは納得しないと考へ、大神は敢えて嘘ぶいた。すると、グリシーヌは納得しながらも、大神に忠告した。

「…………確かに、奴はつまらん小物だな。だが、人は誇りによつて生きるものだ。貴公がそれでは、来たる戦いに勝利等有り得ん！」

「戦い…………? 何の事だ?」

エリカに続いてグリシーヌも口にした言葉の意味が分からず、大神が尋ねる。

しかしその直後、大神はその戦いの意味を身を以つて知る事になる。

「キヤー——ツ！」

突然の爆発が、パーティー会場を襲つた。  
優雅な笑い声が、たちまち悲鳴に変わる。

「爆発！？何が起こったんだ！？」

見ると、無数の野ウサギが現れ、会場を荒らしていた。  
その中心に、大神は奇怪な影を見た。

「な、何だあれは！ウサギか？」

顔はウサギだが身体は人間なみに大きく、巨大なハサミをシャキシャキと鳴らしている。

平たく言えば、ウサギ人間といった所だろうか。

「こ」の近くに間違いないピヨン！さあ、ケガしたくなかったら、このシゾー様に光の証を渡すピヨン！」

人々が逃げ惑う中、シゾーと名乗るウサギはハサミを鳴らした。  
そこに、立ちはだかる人物がいた。

グリシーヌだ。

「待て、 そこのウサギ！」

「お前に用はないピヨン。 オイラが探ししているのは光の証を持つ者  
だピヨン！」

「下らぬざれ言を……、 成敗してくれる……！」

「言つや、 グリシーヌは何処からともなく巨大な戦斧を取り出し、 シ  
ゾーに斬り掛かった。

「えへい、 邪魔をするなピヨン！ こうなつたらお前から先に刻んで  
やるピヨン！」

シゾーも負けじとハサミを繰り出す。  
激しくぶつかり合つ二つの刃。

すると、 程なくしてグリシーヌの動きが鈍り始めた。  
やはり相手は人間でないために、 生身では限界があるのだ。

「いやつ…………、 やるではないか！ こうなつたら差し違えても……  
…。」

「無理をするなグリシーヌ！ 相手をよく見ろ！ 生身で勝ち田はない

！」

そう言う大神だが、 グリシーヌは尚もシゾーに攻撃を仕掛けた。

その時、横から無数の弾丸がシゾー田掛けて撃ち込まれた。

「ヤレのウサギさん！好き勝手にはさせないわよ……！」

それは、何とエリカだった。

悲鳴を頼りにカタコンベの地下通路を抜けたエリカは、たまたまパーティー会場の近くの地上に出て来たのである。

「エリカ…………、この男がそうだ。」

「えっ！？それじゃあ日本から来る人って、大神さんだつたんですか！？」

「私もさつさグラン・マから聞いたばかりだが、間違いない。」

「それじゃあ、一日本部に戻つて…………。」

「なんだ？どういう事なんだ？」

勝手に話がまとまつつある中、一人状況を飲み込めない大神が尋ねる。

戦いだのなんだの、訳が分からない。

すると、そこへエビヤン警部が部下の警官隊を連れてやって來た。

「あのウサギを狙え！撃てえ！…」

エビヤン警部の号令で、警官隊は一斉にシゾーに発砲する。

「くわ、こんな時に光武があれば…………！」

悔しげに大神が呟いた時、エリカが答えた。

「あります！光武なら……靈子甲冑ならあります！！」

「何つ！？靈子甲冑があるだと……！」

「ついて来い、大神一郎！！」

そう言つて走り出す一人を、大神は慌てて追いかけた。

「エリカさん…………」、これは…………！？」

ダイゴがカタコンベから地上に出て来たのは、丁度大神達が見えなくなつた辺りだった。

「ウサツ！見つけたピヨン！？」

すると、ダイゴに何かを感じたシゾーがダイゴの前に立ちはだかった。

「お前！光の証を渡すピヨン！」

「わあつ！？な、何でウサギが！」

「ウサギって言つなピヨン！さあ、刻まれたくなかったら、大人しく光の証を渡すピヨン！」

「光の証？何の事だよ！？」

初めて耳にするものを渡せと言われても渡しようがない。すると、シゾーはハサミを構えた。

「仕方ないピヨン！ならば殺して奪つまでだピヨン！」

「わ、…………うわああああつ！！」

ハサミで威嚇されたダイゴは、一団散に逃げ出した。

「逃がさないピヨン！光の証を渡すピヨン！」

靈子甲冑があると聞いて大神が案内された所。  
それは、何と昨日迫水に招待されたシャノワールだった。

「シャノワール…………？」んな所に靈子甲冑があるのか？」

「いいから早く……」

訝しむ大神だが、エリカに急かされて中に入る。

「さあ、私の後について来て下さい！」

「遅い！もう、全員集合しているぞ！」

「大神さん、きちんと着替えられましたか？」

「あ、ああ。でも、その格好は一体…………？」

いつもと違い、色違ひの戦闘服を身に纏つた一人に驚きを隠せない大神。

あのシャノワールの地下に、こんな設備があつたなど、思いも寄らない事だった。

そこへ、更に驚くべき人物が現れた。

「…………全てを明らかにする時が、来たようだな。」

「迫水大使！」

「大神君…………いや、大神中尉。君は留学のためだけに巴里に来

たのではない。新たに結成された、『巴里華撃団花組』の隊長として、この巴里に配属されたんだ。』

「巴里華撃団…………。」

想像もしなかつた事実に、驚きを隠せない大神。

当たり前だ。

何せ大神は今まで、巴里には留学と聞かされていていたからだ。

「そして、巴里華撃団の総司令が…………。」

そう言って、迫水は後ろに座る人物に目をやつた。  
そこには、大神のよく知る人物が座っていた。

「ようこそ、ムツシユ大神。巴里華撃団は、貴方を歓迎するわ。」

「ライラック伯爵夫人！－まさか、貴女が…………！」

そのまさかだった。

ライラック伯爵夫人はシャノワールのオーナーグラン・マにして、  
巴里華撃団花組の総司令だったのである。

「そうや。そして、隊員はこの二名。エリカ・フォンティーヌと、  
グリシーヌ・ブルーメールだよ。」

「隠してた訳じゃないんです。大神さんが隊長とは思わなくて……  
…。」

「…………よろしく頼む。」

改めて大神に挨拶を述べる一人。  
すると、グラント・マが口を開いた。

「さてムツシユ。色々聞きたい事があるんじゃないかい？」

「いえー今は一刻も早く出撃準備を！」

大神は迷わず即答した。

今は緊急事態である。

気になる事はあるが、説明は敵を倒してからで十分だつた。

「よし、じゃあムツシユの見たいものを見せてあげるよ。」

そう言つて、グラント・マは徐に立ち上がつた。

「ウダウダしている奴あ、セーヌ河に叩き込むぞー。わざわざいつや  
がれー！」

地下の格納庫。

そこには、帝劇を想起させるような空間が広がつていた。  
その空間内で、作業着を着た人達が慌ただしく動いている。

おそらくは、光武の整備に追われているのだろう。

「威勢がいいね、ジャン班長。いつ見ても惚れ惚れするよ。」

「オーナー、出撃準備中は立入禁止ですよ。」

ジャンと呼ばれた男が、やれやれといつ口調でため息をついた。  
どうやら彼が、巴里華撃団の整備担当らしい。

「つれないねえ。ムツ・シユ大神、靈子甲冑の面倒を見てくれるジャン整備班長だよ。」

「アンタが隊長さんか！ 整備班長のジャン・レオだ。」

「は、はい。ジャン班長、よろしくお願ひします！」

熱い握手を交わす二人。

すると、ジャンは大神を格納庫の奥に案内した。

「ほら、こいつが隊長さんの乗る『光武F』だ。」

「凄い…………これが俺の光武なのか！」

かつて帝国華撃団時代に扱っていたそれと遜色ない完成度に、感嘆の声を上げる大神。

白に青いラインが入ったシリウネス鋼を用いた強固な装甲と、二刀の大太刀。

シャノワール整備班と神崎重工の科学の結晶が、そこにはあった。

「それだけじゃねえ。俺の可愛いもう一人の子供を見せてやるよ。」

そう言つて、ジャンは大神を更に奥へ連れてきた。

「これは……、地下列車ですか！？」

そこには、帝劇の轟雷号とタメを張るスケールの、巨大列車があつた。

「ああ、エクレールって言うんだ。こいつで隊長さん達を、巴里の何処でも届けてやるよ。」

ジャンが胸を張つて自慢したその時、メルから通信が入つた。

「オーナー！ 敵怪人に動きがありました！ 作戦司令室にお戻り下さい！」

「まあ、仕事の時間だ。ムッシュ、準備はいいね？」

「…………敵は警官隊を制圧。シャンゼリゼ通りを凱旋門方面に進撃中ですう！」

「まあムッシュ、この状況、どう判断する？」  
シーカーの報告に領き、グラン・マが問い合わせた。  
すると、大神は数秒考えたのち答えた。

「まずは敵の蒸気獣を全滅させましょ。その後、怪人を撃破しま

す。  
「

「いい答えた。ムツシユ、後は任せたよ！」

期待通りの答えに安心して、グラン・マは大神に全ての権限を委ねた。

「よし、エリカくん、グリシース、準備はいいか?」

「はい！ いつでも大丈夫です！ バシッと行きましょう！」

「このグリシーヌ、覚悟は常に出来てゐる！心配は無用だ。」

一人の返事に頷き、大神は出撃命令を出した。

「日華擊團・花組、出擊せよ。」

「くっ、退却だ！！」

銃撃が全く通用しない相手に、ビヤン警部は遂に退却命令を出した。

たちまちに逃げ出す警官隊の車を、巨大な鉄の固まりが押し潰す。シゾーの操る蒸気獣、『ポーン』である。

ざつと数えて十体弱のポーンが、凱旋門前を練り歩いていた。

「ウーッサッサッサ！いいザマだピヨン！」

退却する警官隊を、ポーンの奥にいるシゾーが笑った。

「さあ、隠れてないで出て来るピヨン！…」

邪魔物を蹴散らし、ダイゴの姿を探すシゾー。

その時、上方から声が響いた。

「セレニまでです…！」

「何つ…………！？」

突然の声に驚くシゾー。

すると、ローンの前に赤、白、青の三つの光武Fが姿を現した。

「巴里華撃団、参上！…」

それは、巴里に現れた魔を討つ、人類の希望だった。

「貴様、一体何者だ！何故ウサギが人を襲う！？」

「ウサギさん、貴方は本当は悪いウサギなんじゃないはずです！」

「ウサギウサギ言ひなピヨン……シゾーといつ名前があるピヨン……やはりウサギと呼ばれるのは嫌なのか、シゾーは地団駄を踏む。すると、今度はグリシーヌが追い撃ちをかけた。

「ウサギに名前など要らぬ。貴様の悪事もそこまでだ！」

「まだ言ひなピヨンか！ ポーンども、奴らを潰すピヨン……」

そう叫んで、シゾーは姿を消した。

それに伴い、命令を受けたポーン達が一斉に二人に迫る。

「田標、敵蒸氣獸の撃破！ みんな、行くぞ！ ……」

「」「解……」

二人の確かな返事に頷き、大神は一刀を構えて飛び出した。

初めての戦いにも関わらず、巴里華撃団はしたる苦戦もなくボーンを全滅させた。

初陣で士気が高まっていた事もあつたが、大神の指揮の上手さも大きかった。

巴里華撃団はそれぞれ使用する武器が異なる。

大神は二刀、エリカはマシンガン、グリシーヌは巨大な斧といった具合だ。

大神はエリカを中心置いて敵を掃射させ、グリシーヌと二人で左右か、ローンに攻撃を仕掛けたのだ。

この作戦が功を成し、ローンは瞬く間に沈黙した。

これに一人苛立つているのが、外ならぬシゾーだった。

「お、おのれ巴里華撃団……、許してやらな『ピヨン』！」

「なんですか、このウサギさんは、見かけばかりで全然弱いじゃないですか。」

すると、そこに一人の男が顔を出した。

先程パーティーで大神を馬鹿にした貴族、ダニエルである。

「うひうひ、そこのウサギさん。おいたは駄目ですよ、おいたは。このダニエル様がお仕置きを……。」

「うひなつたら……、出て来るピヨン-蒸氣獸『ブレリュード』！」

シゾーがそう叫んだ時だった。

凱旋門を飛び越えて、巨大なウサギの姿をした蒸氣獸が現れたのである。

「うわあっ！な、何だ！話が違つじやないか！」

先程の強気な態度から一転し、ダニエルは尻餅をついた。

「ぱ、巴里華撃団とやら...ミーを仕りせてやる...早く助ける...！」

ダニエルがそう言つより早く、大神の光武Fが飛び出した。それと同時にフレリコードの両腕からガトリング砲が連射される。

「くつ.....。」

「な、何をするんだ！服に砂煙をかけるとは.....！」

「ミーは危険です！早く安全な所へ！」

「ミーに命令するな！」の役立たずの身の程知らずめ！..！」

助けた礼一つなく侮蔑の言葉を吐き捨て、ダニエルは逃げ出した。そして、ようやくシゾーの攻撃が一段落し、大神は二刀を構え直した。

「よし、みんな行くぞ！」

「待て。どうこうつもりだ！」

フレリコードに攻撃しようとした大神に、グリシーヌの声が飛んだ。

「貴公は日本人だ。巴里に来て間もないのに、何故巴里の人間を？  
ましてや、先程の者の愚弄に何故怒らぬ？」  
グリシーヌは、斧を突き付けて問い詰めた。

「貴公には日本人としての.....、男としての誇りといつものがな  
いのか！？」

すると、大神はハツキリと告げた。

「日本だろうが巴里だろうが、そんなものは関係ない！」

「何…………！？」

「全ての人々の幸せを守るために戦う。それが俺の誇りだ！」

この世界における全ての人々が笑っている事。

それが大神の願いであり、それを守る事が、大神の誇りだった。

帝劇時代に共に戦った、あの光の勇士のように…………。

「大神さん…………！！」

「ほう…………！」

大神の言葉に、エリカは感銘を受け、グリシーヌも意外な顔をする。  
そして、大神は二刀を駆した。

「目標、巨大蒸気獣の撃破！みんな、行くぞ！」

「「了解！！」

ウサギ姿の蒸気獣ブレリコードは、三対一の状況にも関わらず、花組を苦戦させた。

凱旋門に現れた時の、ウサギ特有のジャンプ力を使い、包囲されても簡単に脱出してしまったからだ。

「くわっ…ひよこまかと素早い……！」

白麪の斧による一撃が中々加えられず、グリシーヌが悔しげにぼやく。

一方の大神は、冷静にブレリコードの動きを読み取っていた。

「…………、よし…ヒリカくん！ 奴の両足を狙撃してくれ…！」

「了解！」

大神に言われ、ヒリカのマシンガンが火を噴いた。

「し、しまつたピヨン…！」

シゾーが気づいた時には遅かった。

既にエリカのマシンガンで無数の弾丸を一度に浴びたブレリコードの両足は、小さい爆発とともに黒い煙を上げ始めたのだ。

「これでジャンプは使えないぞ…シゾー、覚悟しろ…」

二刀を構えて叫ぶ大神。

しかし、シゾーの隠し玉はブレリコードだけではなかつた。

「これで勝つたと思うなピヨン…来るピヨン…超古代怪獣メルバ！」

！」

シゾーがそう叫んだ時だった。

遙か上空で咆哮が聞こえたかと思つと、一体の竜にも似た怪獣が現れたのだ。

全身に無数の穴を持ち、大きな翼を広げて凱旋門に降り立つメルバ。そのスケールに、花組は戦慄した。

「ば、馬鹿な……。こんな化け物を使役しているところのか……。」

流石のグリシーヌも、驚きを隠せない。

メルバは凱旋門よりは小さいとはいえ、光武Fの5倍の高さがある。とてもではないが、初戦で相手に出来るレベルではない。

一方、劣勢だったシゾーは状況が好転したと笑った。

「ウーッサツサツサ！巴里華撃団！覚悟するピヨン！メルバ、あいつらを踏み潰すピヨン！」

「ガアアアアッ！！」

メルバは甲高い咆哮を上げると、目から赤い光線を放つた。

しかし……、

「…………あれ…………？」

いつまで経つても攻撃が来ない事を不思議に思つて見てみると、メルバは何やらやってしまったという顔で固まっている。見ると、プレリュードが全身から煙を上げていた。

どういづ訳か、メルバは間違えてプレリコードを狙撃してしまったのである。

「あ…………まさか自分の怪獣にトドメを刺されるとは…………。」

息も絶え絶えに、シゾーは無念の叫びを上げた。

「納得出来ないピヨーンーー!」

その言葉とともに、プレリコードは大爆発した。  
しかし、大神達は喜ぶ訳にはいかなかつた。  
何故なら、目の前には超古代怪獣メルバが立ちはだかっているからだ。

「ガアアアアツーー!」

メルバの咆哮が凱旋門を中心鳴り響いた。

「あれが……災いなのか……？」

凱旋門の影に隠れて一部始終を見守っていたダイゴは、驚きと恐怖の入り混じった表情でメルバを見ていた。  
目の前の三体の光武Fは懸命に立ち向かっているが、あの大きさでの攻撃は雀の涙でしかない。

「…………巴里華撃団…………。」

それでも必死に立ち向かう花組を見て、ダイゴは巨人の言葉を思い出した。

（光を継ぐ者よ、今こそ封じられし力を目覚めさせる時だ。）

「…………僕も…………。」

巴里華撃団はあんなに頑張っている。  
自分にも……、光を継いだ自分にも何かやれる事があるはずだ。  
そう思つた時だつた。

ダイゴの服のポケットが、急に光を放つたのだ。

「え…………？」

それは、両親の形見の彫刻、『スパークレンズ』を入れたポケットだつた。

試しにスパークレンズを取り出したダイゴは、驚きで目を見張つた。  
何故なら古びた青銅のスパークレンズが、光り輝く金と銀の彫刻に変わつていたからである。

まるで、光に目覚めたかのように。

「…………光…………。」

静かにそう呟いた時、メルバの咆哮が耳に届いた。

「……」

それと同時に田の前で上がる火柱。  
もはや、怖がっている場合ではなかつた。

「父さん…………母さん…………、エリカさん…………。」

スパークレンズを握り締め、大切な人の名前を呼ぶ。  
すると、仄かにスパークレンズの光が強まつた。

「僕に…………、勇気を授けてくれ！……！」

そう叫び、ダイゴはスパークレンズを高々と空に掲げた。  
すると、スパークレンズの先端が翼のように二つに割れ、中のクリ  
タルがまばゆい光を放つた。

光は柱となつてダイゴを包み、その体を光へと変えた。  
災いを討つ、希望の光へと…………。

それは突然現れた。

凱旋門に出現した光の柱。

その輝きに、その場にいた誰もが一瞬目を奪われる。

そして光の柱が消え、その中から現れた存在に、誰もが驚愕した。

「…………光の…………巨人…………？」

凝視したまま、大神が呟いた。

赤と紫と銀の体色。胸に輝く青いカラータイマー。

そこにいたのは、間違いなく光の巨人。

ウルトラマンだった。

「チャツ！」

ウルトラマンはメルバを見ると、徐に構えを取つた。

すると、メルバもウルトラマンに狙いを定め、襲い掛かって來た。

「ジユツ！！」

「ガアアアアツ！」

互いにぶつかり合い、激しい衝撃が生まれる。

そのまま押し合っていた状況が数秒続いたのち、ウルトラマンは一瞬の隙を突いてメルバを投げ飛ばした。

「チャツ！！」

けたたましい轟音と共に地面に激突するメルバ。そこに、ウルトラマンが馬乗りになつて追撃した。

「ハツ！ハツ！デュアツ！」

仰向けに倒れたメルバに、激しいパンチのラッシュを見舞う。しかし、敵もさるもので、メルバはその状態からウルトラマンに目<sup>日</sup>の光線を撃つた。

「ジユワツ！？」

不意を突かれた攻撃を至近距離で喰らい、ウルトラマンは後ろに倒れる。その隙に、メルバは立ち上がって翼を広げた。

「ハツ！」

ウルトラマンはすかさず起き上がり飛び掛かるが、メルバはその寸前に空高く舞い上がった。

「ガアアアアツ！」

そして、物凄いスピードで空を疾駆し、ウルトラマンに体当たりしたのだ。

「ジユワツ！？」

その衝撃で倒れるウルトラマン。しかし、メルバは間髪入れずに再び目の光線を発射して來た。

「ジユワツ！？」

倒れるウルトラマンに、再び体当たりが見舞われる。

その時、ウルトラマンの胸のカラー・タイマーが、赤く点滅を始めた。

「……まずい！早く勝負を決めないと……！」

思わず大神が叫ぶ。

しかしメルバは、逃がさないとばかりに光線を発射した。

「チャツ！」

それを前転で避けると、ウルトラマンは立ち上がり、両腕を額のクリスターの前で交差させた。

「ンウウウ…………、ハツ！－！」

そして勢い良く両腕を降ろした瞬間、ウルトラマンの体色が紫と銀に変化した。

空中戦を得意とする、スピードのスカイタイプである。

「ガアアアアツ！」

トドメとばかりに光線を撃つメルバ。

しかし、ウルトラマンは驚くべき速さで飛び上がり、蹴りの体勢でメルバに突っ込んだ。

スカイキック…………、目にも止まらぬ速さで敵に空中からキックを見舞う、スカイタイプの技の一つだ。

「ガアツ！？」

思わぬ反撃に遭つたメルバは、そのまま地面に落ちる。すると、ウルトラマンは空中で両腕を左右に水平に広げ、頭上で合わせた。

「ハアアア…………！」

ランバルト光弾…………、

頭上で合わせた手にエネルギーを集中させ、光の矢にして敵に撃ち込むスカイタイプの必殺技だ。

「ジユツ……！」

頭上で合わせた両手を左腰に下げ、右手を突き出す。すると、エネルギーを具現化した光の矢が放たれ、メルバの胸に深々と突き刺さつた。

「ガアアアアア…………！」

断末魔の悲鳴を上げたのち、メルバはゆっくりと仰向けに倒れ、大爆発した。

「チャツ……！」

それを確認して、ウルトラマンは空高く飛び立つた。

「…………終わりましたね…………。」

ウルトラマンが去ったのち、エリカが呟いた。

「ああ、エリカくんもグリシーヌも、初戦ながらよく頑張った。」

シゾーの撃破には至らなかつたものの、ポーンを倒す過程は十分なものがあった。

その事から、大神は一人に労いの言葉をかけた。

「はい！ありがとうございます、大神さん！」

「…………まあ、最後はあの巨人に奪われてしまつたがな。」

「ウルトラマンの事かい？」

「えつ？ 大神さん、さつきの巨人を知つてるんですか？」

驚いた様子で尋ねるエリカ。  
すると、大神は笑つて答えた。

「ああ。本人じゃないけどね。」

そう言つて、大神は話を変えた。

「…………ところで、日本の帝国華撃団には、戦いに勝利した後で必ず行う約束事があるんだ。今から手本を見せるから、二人とも俺に

続いてやつてみてくれ。」

「は、はい！」

何を思ったのか、緊張して応えるエリカ。

しかし、これから一人は信じられないものを叩撃する事になる。

「それでは……、勝利のポーズ、決めつ……」

「……何だそれは……。」

「大神さん……、どうしちゃったんですか……？」

呆れた表情のグリシーヌと、驚いて固まっているエリカ。

それを見て、大神は思わず慌てた。

「お、おい！一人ともやれよー！ー！」

その日の夜、花組は初陣の勝利を祝つてエッフェル塔前にきていた。  
何でも、花火を見るのだそうだ。

「ところで大神さん。あのウルトラマンって……、一体どんな人

なんですか？」「

ふと、大神の隣に立つエリカが尋ねた。

「そうだな……、俺達がピンチになると、何処からともなく現れて助けてくれる正義の味方……、かな？」

帝国華撃団時代に助けてくれた勇士を思い出し、大神が応える。すると、不意にグリシーヌが横槍を入れて来た。

「どうだかな。所詮は得体の知れぬ奴。そんな者に巴里の平和を委ねる訳にはいかん。」

それだけ言つて、グリシーヌはその場を立ち去る。その後ろ姿を見ながら、エリカは呟いた。

「…………私には、得体の知れない人には見えなかつたけどな…………。」

「どういう事なんだい？」

大神が尋ねると、エリカは考え込むように答えた。

「初めて見たはずなんですけど……、何でだろう。初めて会つた気がしないんです。まるでずっと前から知つていたような…………、そんな気がするんです…………。」

エリカのこの感覚は正しい。

何故なら、ウルトラマンの正体はダイゴなのだから。

最も、この時点で二人がその事実を察する余地はないが。

そのダイゴの声が聞こえて来たのは、その時だつた。

「エリカさん……！」

「え？…………ああっ……ダイゴさんの事すっかり忘れてました……！」

「ダイゴ…………？もしかして、彼が…………？」

手を振りながらこちらに走つて来るダイゴを指差し、大神がエリカに尋ねた。

シャノワールでぶつかつた時はすぐ迫水に会いに行つたので、知り合いつチャンスがなかつたのだ。

「あら、大神さんダイゴさんの事知らなかつたんですか？」

意外そうな顔で驚き、エリカはダイゴを前に連れてきた。

「それじゃ、彼がダイゴさんです。覚えてあげて下さいね。」

「ああ。ダイゴ、よろしく。」

「…………うん。よろしく…………。」

渋々ながらも、ダイゴは差し出された大神の手を握つた。

「いめんなさい、ダイゴさん…………。ほつたらかしにして…………。」

「もういいんだよ、エリカさん…………。無事で良かったよ…………。」

「うふふ…………、ありがとう。」

とびきりの笑顔を見せるエリカに、ダイゴも大神も、心が洗われる  
気がした。

「…………光の巨人か…………。」

作戦司令室にてグラント・マは一人、巴里華撃団初陣の映像を見て  
いた。

「始まつたんだね…………、巴里の災いが…………。」

そう呟き、机の上に広がる本に目を落とした。

「伝説の巨人…………ティガの復活…………だね。」

グラント・マの口から出たティガという言葉。

それは、机の上の本の見出しに書かれた言葉と同じであった。

## 光を継ぐ者（後書き）

### 『次回予告』

皆さ～ん、 いんにちは～！

マジカルエンジエル・コクリコのマジックショーケン引ひき戻もどし～！

ボク、 頑張るから、 皆さん笑顔になつてね！

次回、 サクラ大戦3！

### 『笑顔の仮面』

愛の御旗のもとに……

ボク…… 幸せだよ……

## 笑顔の仮面（前書き）

あの累根つきミニアゲームの難易度は異常。

「何か、つまんない…………。」

勘弁してよ、『クリル…………。』

## 笑顔の仮面

「…………全員揃ってるね。」

作戦司令室にて、グラン・マは周りを見渡して言った。

「今日集まつてもらつたのは他でもない。ムッシュの身分は、正式に巴里華撃団花組の隊長となつた。それに伴い、ムッシュには新しい任務に就いてもらつ。」

「新しい任務？ 一体どんな…………？」

任務と聞いて表情を固くする大神。すると、グラン・マはニヤリと笑つて何かを取り出した。

「ほら、こいつだよ。」

「…………いいつー!?」

それを見た瞬間、大神の表情は凍り付いた。

何故ならそれは、大神が帝国華撃団時代に着用していたモギリ服だつたからだ。

と、いう事は…………、

「もしかして、またモギリをやるんですか…………？」

まさかと思つて尋ねる大神。

すると、グラン・マはしたり顔で言つた。

「当たり前じゃないか。ついでに店内のボーイも兼任してもいいつからね。」

「はい……。」

まさか巴里に来てまでモギリをさせられるとは思わず、ため息をつく大神。

すると、グラント・マがシーアに声をかけた。

「シー、あれをムッシュに渡しておくれ。」

「ウイ、オーナー。はい、携帯キネマトロンです。」

そう言つて、シーは大神にハンドサイズの機械を手渡した。キネマトロンは、帝国華撃団のメンバーである李紅蘭が発明したもので、離れた所から通信が出来る画期的なメカだ。しかし、トランク程の大きさのために持ち歩きにくいのが難点であった。

それを克服したのが携帯キネマトロンで、通信は片方しか出来ないものの、ポケットに入れて持ち運びが出来るので、格段に通信がやりやすくなつたのだ。

「さてムッシュ。他にも色々聞きたい事があるだろ?」

「はい。巴里華撃団とは……?」

前回は緊急事態であつたために省略したが、大神は当然とも言える疑問を口にした。

「それじゃあ、巴里華撃団設立の経緯から話さうか。」

そう言つて、グラント・マは一冊の古びた本を取り出した。

「こいつは古い時代から伝えられて来た巴里の予言書だよ。この中に、ある言い伝えが残されている。」

「言い伝え？」

訝しむ大神に、グラント・マは重々しく頷いた、話し始めた。

巴里に災いを齎す闇が蘇りし時、希望の光は目覚める。

その書き出しで始まる段落には、今回の事件と酷似する内容が記されていた。

巴里を襲う魔の存在。

それに立ち向かい、巴里を守る希望の光。

遥か昔、自分達を守つたその光を、人々は讃え、こう呼んだ。

ティガと……

「…………しかし、必ず世人が復活するとも限らない。それで、帝国華撃団をモデルとして靈的組織、巴里華撃団設立に至つたのさ。」

曖昧な希望にすがるより、自分達が希望となる。

言わば、巴里華撃団はティガと対を成す希望の存在だった。

「で、シャノワールなんだけどね。流石のムッシュも驚いたやつへ。」

「はい。まさかシャノワールが総司令部だったとは……。」

実際は帝国華撃団も本部を劇場に構えていたので同じようなものだが。

「では、ウルトラマンティガというのは……。」

大神は、いよいよ核心とも言える問題を口にした。

「それは、前回の戦いのレポートにそくして話すよ。メル、レポートを読み上げておくれ。」

「ウイ、オーナー。シャンゼリゼ通りに出現したウサギの怪人、及び怪獣は妖力が確認され、巴里の破壊と混乱を企てたようである。怪人は花組に、怪獣は巨人に倒されたために正体は未だ不明である。ただ一つ言える事は、伝説の災いと光が蘇った事である。」

早い話が、ティガが復活した以外は何も分からぬという事だ。

「本には災いとしか書いてない。有力な情報はないね。」

「だが、何者かが巴里を狙っている事は確かだ。それを止められるのも私達だけという事もな。」

あくまでティガをあてにしないつもりなのか、グリシースはそう言い放つた。

「それだけ分かれば上等さ。さあ、夜の支度をするよ。」

そうグラン・マが締めくくり、その場は解散となつた。

「…………ティガ？」

「そうです！そのティガが、巴里を守ってくれたんです！」

おつむ返しに聞くダイゴに、エリカは興奮氣味に語った。  
会議が終わった後、エリカは教会でダイゴにティガの活躍を語つて  
いたのだ。

実際の所本人は目の前にいるのだが、それをエリカが知るはずもない。

ダイゴもまた、それを話すそぶりを見せらず、寧ろエリカの話に驚いて見せた。

「で、そのティガが怪獣をやっつけた訳？」

「そうです！ハツとかチャツとか言つて…………！」

ハイテンションでティガの真似をするエリカ。  
すると、エリカが突き出した右手が、ダイゴの後ろの棚にぶつかった。  
その拍子に棚の上にあつた花瓶が落下し、真つ二つに割れてしまつた。

「あ…………！」

「H、エリカさん……。」

冷や汗をかくエリカと、呆れた表情を浮かべるダイゴ。すると、そこへレノ神父が駆け付けた。

「どうされました？何か割れる音が……。」

直後、ダイゴが無言で指差した方を見てレノ神父は固まつた。  
何故なら……、

「H、H、これは！設立時から共にあつた大切な花瓶が……！」

その花瓶の無惨な姿に、レノ神父は膝をつき、天を仰いで嘆いた。

「主よ……、どうかこの罪をお許し下さい……。」

「あ、あの……、「めんなさい！私、同じもの買つて来ます！」

流石にいたたまれなくなり、エリカはダッシュで教会から飛び出した。

教会に残されたダイゴは、レノ神父に声をかけた。

「神父様……、エリカさんも反省しているし、許してあげてくれない？」

「……はい。エリカさんもわざとではないでしょうし、形あるものは、いつかは壊れます、ハイ。」

ハンカチで涙を拭くレノ神父。

すると、ダイゴは本題に入った。

「そうだ、神父様。この前の事なんだけど……。」

「ハイ。希望の光が、復活しました。ダイゴさん、見つけたんですね。」

「うん。ヒリカさんはティガって呼んでた。あれが、巨人の名前なのかな?」

ダイゴが尋ねると、レノ神父は考え込むそぶりを見せた。

「おそらくその通りです、ハイ。かつて東の地にも、同様の巨人がいたと聞きます。」

「…………ウルトラマン…………ティガ…………。」

その名を呴き、ダイゴはポケットから光の証、スパークレンズを取り出した。

前まで錆びた青銅だった彫刻は、見違える程の輝きを放っている。光を継ぐ者。

自分がまさか、そんな運命にあつたとは、ダイゴも思わなかつた。しかし、現にティガは自分を後継者に選んだ。  
果たしてそれが偶然なのか、それとも必然なのかは分からぬが、今のダイゴに出来る事は、その力を受け入れる事だけだつた。

「えつと……、確かこの辺りだよね……。」

花瓶を買いに行つたエリカを探しに、ダイゴは市場に足を運んだ。巴里での生活用品は、大概この市場に揃つている。

おそれらくエリカもここにいると、ダイゴは踏んでいた。

「あ、そこの人ちょっとといい？」

「ん？ 僕の事？」

声がした方を見ると、小さい女の子がダイゴを下から覗き込んでいた。

フランス人ではないのだろうか、肌がやや黒っぽい。

帽子を被った活発そうな少女だった。

「はいコレ。よかつたら来てね。」

そう言って、少年は一枚のチラシをダイゴに手渡した。

「シルク・ド・コーゴ？」

一番上の見出しには、白い文字でそう書かれていた。

シルク・ド・コーゴと言えば、ヨーロッパでも指折りのサークัส集団である。

確かに最近、この巴里に来たばかりだった。

「それにしても、君は……？」

ふと、ダイゴは少女を見た。  
チラシを配っている事から、サークルの関係者である事は間違いないだろ？  
しかし、見る限り少女は10歳前後。

まさかこの歳で働いているというのか…………？  
そう考えるダイゴに、少女は胸を張つて答えた。

「ボクは『クリ』。サークルの団員だよ？」

正にダイゴの予想そのまんまでった。

『クリ』と名乗った少女は、シルク・ド・ヨーロの団員だったのだ。

「へえ……、本当!?」

「何だよ～、疑つてるの？」

膨れて見せる『クリ』だが、確かに10歳くらいでサークルが出来るというのは、俄かに信じにくい話だ。

その時、市場の奥が急に騒がしくなった。

見ると、市場の真ん中で馬が暴れているではないか。

「よし、見てて！ボクがサークル団員だって事、証明してあげる

！」

「えつー…ちょっと…………！」

ダイゴを余所に、『クリ』は市場のテントに飛び移った。

その身のこなし、信じられない軽妙だ。

「す……凄い……。」

その様子に、ダイゴは驚いて見ている事しか出来なかつた。

「君……凄いね……。」

呆気にとられた様子で、大神が馬に乗る「クリ」と声をかけた。いきなり屋根を跳んで現れたかと思うと、暴れる馬の背中に乗り、軽く落ち着かせてしまつたのだ。

「どう? ボクが団員だつて事、納得してくれた?」

得意げに胸を張る「クリ」。

すると、そこにダイゴが駆け付けた。

「なるほど……、納得だよ。」

「ダイゴー・ビリして君が?」

「……それはこいつの口説だよ。何でアンタがエリカさんと一緒にいるのさ。」

大神の姿を見るや、ダイゴはあからさまに不機嫌な表情を見せた。

「（俺……、何かしたのか？）」

言われのない視線に困惑する大神。

すると、エリカが助け舟を出してくれた。

「実は、花瓶を買おうと市場に来たら大神さんに会ったんです。」

その後、エリカは割つてしまつた花瓶と同じものを買つべく市場に来ていたのだが、たまたま野菜を注文しに来た大神といい、二人で花瓶を探していた。

その前で馬が暴れだし、結果としてコクリコに助けてもらつたのだ。

「オジサンも中々やるねー。カッコ悪かつたけど。」

「オジサン？ 酷いな…………、これでもまだ23なんだぞ？」

初めてオジサン呼ばわりされ、大神はショックを見せた。

まだ大神は23なのだ。

まだまだオジサンではなくお兄さんである。

すると、「コクリコも失礼だと思ったのか、すぐに謝つた。

「あ、ごめんなさい。ボクの名前はコクリコ。オジサン…………じゃなかつた、お兄さんは？」

「俺は大神一郎。シャノワールでモギリをしてるんだ。」

きちんと訂正する所が可愛らしく思い、大神は微笑みながら名乗る。すると、エリカとダイゴも続いた。

「私はエリカ・フォンティーヌ。修道院のシスターなの。」

「そう言えば、僕もまだだつたよね？僕はダイゴ＝モロボシ。教会に住んでるんだ。」

とは言つても、ダイゴは仕事を持つていない訳ではない。

教会の一員として、色々ボランティア活動等にも参加しているのだ。

「へえ～、イチローにエリカにダイゴか。イチローもダイゴも変な名前だね。何処の国の人？」

「日本人だよ。君もフランス人じやないね。」

「コクリ」の疑問に答えつつ、大神が指摘した。  
すると、コクリは笑顔で答えた。

「当たり。ボク、ベトナム人なんだ。」

ベトナムはインドシナ半島にある国だ。

確かに少し前にフランス領になつてゐるはずだった。

ホーチミンが革命を起こす事になるのだが、それはこの物語の終わつたずっと後の事である。

「さつきは見事だつたね。あの暴れ馬を止めるなんて……。」

「エヘッ、ありがとう。ボクね、動物が好きで、みんな話が出来ると思ってるんだ。」

ダイゴに褒められ、コクリは照れた様子で言った。

すると、エリカがふと何かに思い出したように手を叩いた。

「あ、動物で思い出しましたけど、私花瓶が買いたいんでした。」

「…………何処が繋がつてゐるの。」

動物からどう連想すれば花瓶に辿り着けるのか。

ダイゴが呆れた口調で言つて、「ククリ」が胸を叩いた。

「買い物？だつたらボクが案内するよ。市場には詳しいんだ。」

「本当！？実は花瓶を探してゐる。これくらいの。」

そう言つて、エリカは手で花瓶の外観を描いた。

花瓶の割には若干大きすぎないかと思うダイゴだが、敢えて黙つておぐ。

「わかつた。花瓶はこいつだよ。」

そう言つて、「ククリ」は市場の奥を指差した。  
田をこらして見ると、確かに瀬戸物や骨董品が見える。  
おそらく「ククリ」は何度も市場に出入りしているのだろう。  
どの場所にどんな品物が置かれているか一瞬で判断出来るのが、何  
よりの証拠だ。

「やつぱり男の子ね。大神さんより頼りになりますね。」

感心したようにエリカが言つ。

すると、「ククリ」は不意に振り返つた。

「ボク、男の子じゃないよ。ほひ。」

そう言って、コクリコは帽子を取った。  
すると、左右の可愛い栗色のお下げ髪が現れた。

「女の子だったのか……。」

「普通気付かない？」

エリカと同じようにコクリコを男の子と思っていたのか意外そうな顔をする大神を、ダイゴがなじる。

「アハハハハ！いいよ、たまに間違えられるから。」

その場を取り繕つよう、コクリコが笑つた。

「そ、早く行こう。お店が閉まっちゃうよ！」

「ゴクリコ、ありがと。おかげでいい花瓶が安く買えましたね。」

割つてしまつたものより数段価値の高い花瓶を抱え、エリカがコクリコに礼を述べた。

ゴクリコは店を教えてくれただけでなく、その店の主人と値段交渉をして、1000フランだつた花瓶を200フランまで下げてもらつたのだ。

その業は、ネゴシエーターにも匹敵する。

「何だかゴクリコに助けられてばかりだな。俺も何か手伝おうか？」

「本当ーじゃあ手伝つて。イチローだけでいいからさ。」

大神の申し出に、「クリコは田一杯の笑顔を見せた。

「それじゃ、僕達は花瓶を届けて来ます。」

「またね、『クリコ』。」

そう言つて、エリカとダイゴは一足先に市場を後にすると、クリコは早速市場を練り歩き始めた。

「こんにちは！ 今日も野菜クズもらつていくな。」

そう言つて何処から取り出したのか、クリコはバケツを手に片つ端から店の野菜クズをもらつていった。

剥いたジャガ芋の皮。ニンジンの先っぽ。ひん曲がったキュウリ。市場を一周する頃には、バケツいっぱいに野菜クズが溜まっていた。

「じゃあイチロー、これ運んでね。」

「こんなに沢山……、どうするんだ？」

野菜クズなど集めて、一体何に使うといふのか。大神が尋ねると、クリコは笑つて答えた。

「みんなの『ハンなんだ。さあ、イチロー頑張つて！』

そう言つて大神を励ますクリコ。すると、そこに声がかかった。

「おや、『クリコ』じゃないか。またお仕事かい？」

「あ、おひげのおじさん…」

それは、実に優しい表情をした老紳士だつた。立派な白い口髭を蓄え、元気な印象がある。「クリ」は知り合いなのか、老紳士に手を振つた。

「今日はどうしたの?」

「いや、リングでも買おうと思つてね。」

そう言つと、老紳士は一つの袋を取り出した。

「ところでクリ、お腹空いてないかい?パンを買ったんでね。君も如何です?」

「あ、ありがとうございます。」

初対面の老紳士にパンを差し出され、大神は戸惑いつつも受け取つた。

すると、老紳士は大神の表情を読み取つて自己紹介をしてくれた。

「私はロランス・ロランと申しまして、宝石商をしております。」

「俺は大神一郎です。テアトル・シャノワールのモギリをしています。」

そう答えて、大神はようやくいつちょ前に握手をした。すると、不意にロランスが大神の目を見て言つた。

「まづ、いい目をしていますね。」

「え？」

「人の目は宝石と同じ。その輝きで、善し悪しが分かるものなんですよ。」

それは、長年宝石と向き合つて来たロランスだからこそ分かる事だつた。

美しい宝石には誰もが惹かれる。

それと同じように、綺麗な目をしている者には、自然と輝くのだろう。

「大神君。君の目には美しい光があります。大切なものを守れる強い光が……。」

「はあ…………、ありがとうございます。」

宝石の知識は持たない大神は満足な返事を返せず、一応の礼を述べるに留まった。

「ねえねえ、何の話をしているの？早くパン食べようよ。」

話の内容が良く分からず、コクリコクリが急かす。すると、ロランスは笑つて答えた。

「せうだね。では、いただくとしようか。」

「…………」ジジがシルク・ド・ヨーロか…………。」

大神とコクリコの二人と分かれた後、ダイゴは「コクリコからもひつ  
たチラシを頼りにサークัสのテントの前まで来た。  
「クリコの凄さは市場で十分理解した。

今度はそれを、サークัสで見たくなつたのだ。  
しかし、残念ながらサークัสはまだ始まつていないらしく、ガラン  
としている。

「…………仕方ない、コクリコに挨拶でもしようつか。」

そう呟き、ダイゴはサークัสの裏手に足を運んだ。  
すると、そこにはオリの中の動物達に餌をあげる大神とコクリコの  
姿があつた。

「…………やあ、ダイゴじゃないか。」

ダイゴの存在に気付き、大神が声をかける。  
すると、ダイゴは恥ずかしげに視線をずらしながら歩み寄つた。

「いや、チラシをもらつたからサークัสでも…………つて。」

「本当ーありがとうダイゴー！ボク嬉しいよ。」

よつぽビダイゴの言葉が嬉しかったのだらう。

「クリ」はびきりの笑顔を見せた。

「ところで、お一人はここで何を?」

「クリ」と一緒に、動物達の「ハン」を市場で集めて来たんだ。」

そう言って、大神は手に持つたバケツを見せた。

市場で集めていた野菜クズは、動物達の「ハン」だったのである。

「イチロー、ダイゴ、ほら見て。この間火の輪ぐぐりを失敗して……。」

そう言って、クリコが一頭の虎を指差した。

見ると、右の前足に真新しい包帯が巻かれている。

「熱かったよね……、痛かったよね……。ごめんね、ボクがいたのに……。」

「クリコ……。」

まるで自分の痛みのように、虎を優しく撫でるクリコ。

その様子に、大神もダイゴもいたたまれない気持ちになる。  
しかし、そこに別の男が現れた。

「クリ、クリコ。練習だといつのに何をサボっている?」

振り返ると、値段の高そうな葉巻を口にくわえた小太りの男が、クリコを睨みつけていた。

その帽子には、高そうなダイヤモンドが光っている。

彼はドーコールと言って、このシルク・ド・コーコの団長だった。

「は、はい。動物達の「ハン」を貰いに行つてました。」

慌てて頭を下げる「クリ」。

すると、ドニクールは隅に置かれた野菜クズのバケツを見た。

「さうか、たっぷり貰えたようだな。」

満足げに笑うドニクール。

しかし彼は次の瞬間、とんでもない事を口にした。

「よし、明日から動物の餌代は半分に切り詰める。」

「そ、そんな！「リだよ、みんなが可哀相だよー！」

ただでさえ野菜クズを貰わなければ動物達の空腹を凌いでやれない。にも関わらず、これ以上餌を減らされでは手に負えなかつた。だがしかし、ドニクールは「クリ」の抗議を鼻で笑い、あろう事か怪我した虎を蹴りつけた。

「なら、怪我した虎を売る。毛皮にすれば儲かるだろ？。」

「や、止めてよーー！」

「クリ」は虎を庇つて叫んだ。

虎は怪我した患部をドニクールに蹴られ、苦しんでいる。

「止めろー。怪我をした動物を蹴る等、サークัสの、ましてや園長のする事ではないぞ！」

流石の大神も腹を立て、「クリコを庇つように前に出た。

「ふん！部外者が口出しをするな。それともクリコ、俺に文句でもあるのか？」

「…………ありません。」

団長の権限を振りかざすドーカークールに逆らえず、抗議の声を飲み込むクリコ。

すると、ドーカークールは満足げに笑った。

「なら良い。開幕までに腹ごしらえをしておけ。」

そう言つて、ドーカークールはテントから出て行つた。

「…………何だあの男は。」

「葉巻は吹かず、動物には手を出す…………最悪だね。」

大神の言葉に同意するように、ダイゴもドーカークールという男に対しての不快感を露にした。

サークルは超人的な業を披露しておひねりをもらうシヨード。

当然本番までに大変な練習がいるし、失敗すれば大怪我どころでは済まされない。

だからこそ、サークルは団員全員が一つにまとまり、互いに助け合う事が必要不可欠だ。

だが、ドーカークールという男にはそれが塵程にもない。

葉巻は動物の身体に悪影響を及ぼすし、動物や団員に危害を加える等、人として言語道断である。

大神もダイゴも、よくあんな男が団長になつたと不思議に思つた。

それもそのはず。何故ならドーケールは、本来の団長である彼の弟が病気なのをいい事に、金でこのサークルを乗っ取つたのだから。

「いいんだ……。もうこ ciòよ……。」

それを指し示すように、コクリコが小さい声で言った。

「イチロー、ダイゴ、ありがとう。ボク、凄く嬉しかったよ。」

そう言って、コクリコは夕飯を持って来た。

「…………これがコクリコの夕飯なのか？たったこれだけが…………。」

「…………酷い…………。」

パンが一口と、野菜のふやけたスープ。まるで残飯のような酷い夕飯に、大神もダイゴも信じられない面持ちを見せる。

しかし、「クリコは笑っていた。

「ボクには」「馳走だよ？だつて毎日食べられるもん…………。」

「それで、奴に逆らえないんだね…………。」

ダイゴの言葉が、全てを物語っていた。  
確かに反発する事は出来るだろう。

しかしあのドーケールの事、そんな人間はすぐさまお払い箱にするはず。

そうなればどうやって生きていいくのか。

そう考へれば、苦しくてもドーケールに従う他なかった。

「我慢なんてしてないよ。…………ボク…………幸せだよ…………。」

その時、サークルの開幕を知らせるベルが鳴った。

「あ、もう行かなきや。じゃあねイチロー、ダイゴ。」

「コクリコ…………、我慢しているじゃないか…………。」

大神がそつ狂いた時、テントの方から動物達の叫び声が聞こえて来た。

「な、何だ！？」

「テントの方だ。行くぞ、ダイゴー！」

ショーにしては不自然な叫び声に、大神とダイゴはテントに急行した。

「みんな止めてよ！ 何でボクの言つ事聞いてくれないの！？」

テントの真ん中でコクリコが叫ぶ。

何と、動物達が突然暴れ始めたのだ。

まるで、ドーコールに逆らえないコクリコの代わりに怒るようだ。

「ええい騒がしい！ 構わん、逆らう動物は殺してしまえ！」

「止めてよー！ ボクが何とかするからー！」

ドーコールの言葉に血相を変えるコクリコ。  
しかし、動物達は怒りを収めてくれない。

「お前達、お鎮まり……。」

その時、テント内に透き通る声が響いた。

すると、今まで怒りの咆哮を上げていた動物達が、それこそ蛇に睨まれた蛙のように大人しくなったのである。

「す、凄い……。」

その様子に、驚くコクリコ。

見ると、南国を思わせる衣裳を来た若い女性が歩いて来るのが見えた。

「お待たせしましたわ、ドークール団長。今日から雇われる事になったカルチュラです。」

「あ、ああ。アンタが新入り予定だったカルチュラさんか。助かつたよ。」

鼻の下を伸ばして、ドークールが言った。

「凄い…………、の人動物と通じ合っているんだ……。」

「ふふ、よろしくお願ひするわね。」

そう言って、カルチュラはこちらに微笑みかけた。

その夜、巴里の裏通りに悲鳴が轟いた。

「うわあああつ……」

「イヒヒヒヒヒ……。素直に渡せば、苦しまずには済んだのにね……」

そう言つて現れたのは、全身が蛇の鱗に覆われた怪物だった。

怪物の目の前には、悲鳴を上げた男が謎の巨大な口に一呑みにされる姿がある。

「さて……。」

怪物は口が男を骨も残らず食い漁つたのを見届けると、残った服のポケットに手を入れ、何かを取り出した。

それは、高価なルビーだった。

「チツ、また違ったね。」

目的の物と違つたのか、怪物は落胆の表情を見せた。

「それにしても人間は、宝石を何だと思つてるんだろうな。自然の恵みに手を加えるなんてさ。……それを庇う裏切り者の気がしないよ。」

そう言つて、怪物はルビーを飲み込んだ。

「さて、証拠隠滅も済んだし、ずらかるかね。」

そう言つて、怪物は男の服を丸呑みにしてその場を後にした。

「…………待つてなよティガ。このピトン様は何処までも追い詰める。  
それこそ蛇のようにな…………。」

夜の巴里に、不気味な笑い声が響いた。

翌日、ダイゴはチラシを持つてシルク・ド・コーゴに赴いた。

昨日の一件から、コクリコの様子が気になつたからだ。

「今日は凄い人気だな…………。」

昨日とは打つて変わり人に溢れるサークัสにダイゴは驚くと共に、  
シルク・ド・コーゴの偉大さを改めて感じた。

「ダイゴさん！」

エリカの声が聞こえて来たのは、その時だった。

見ると、エリカを先頭に大神とグリシーヌ、メルとシーの姿もある。大神の話を聞いたエリカ達も、コクリコのサークルを見に来たのだ。

「もしかして、ダイゴさんもコクリコの様子を見に？」

「うん。昨日から気になつて。エリカさんも？」

ダイゴが聞き返すと、エリカは満面の笑みで頷いた。すると、それをフォローするように大神が言った。

「みんな、済まないが先に入つていってくれないか？俺達は後から行くよ。」

「仕方ないな。行くぞ、メル、シー。」

グリシーヌを先頭に、先に中に入る三人。

ダイゴは、エリカと大神の三人でコクリコのいるテントに向かつた。

「…………すっかり怪我も治つたみたい。ありがとう、カルチエラのおかげだよ。」

「獣医のまね事が役に立つたわ。もう团长も売るなんて言わないはずよ。」

そう言って、カルチュラは立ち上がった。

足元には、右足を治療してもらった虎が元気そうに一人を見ている。

「虎さん……。よかつたね……。」

「……どうしたの？」

ふと「クリコ」の目に浮かんだ涙に気付き、カルチュラが尋ねた。  
「この子とボクは同じだ……。一生懸命笑って芸をしないと、捨てられるかもしれない……。」

それは、「クリコ」が初めて明かした本心だった。

ドニクールは金のためならどんな犠牲も厭わない男だ。  
逆らえばどんな仕打ちを受けるか、想像にかたくない。

「……大丈夫。貴女も動物達も、あたしが守つてあげるから。」

そんな「クリコ」に、カルチュラは母親のような暖かい声で言った。  
すると、「クリコ」はいつになく甘えるような声で言った。

「……じゃあ、ボク、お願いがあるんだ。」

「何?」

そう言って「クリコ」の顔を覗き込むカルチュラ。  
すると、「クリコ」は赤い顔ではぐらかした。

「ううん、やつぱりいいや。また今度にするよ。……ボク、この子のゴハン持つて来るよ。」

そう言つて外に出た「クリ」に声がかけられたのは、その時だった。

「やあ「クリ」。遊びに来たよ。」

「あ、イチロー！エリカにダイゴも来ててくれたんだ。」

今や友達となつた三人の来訪に、「クリ」ははしゃいだ。

「そうだ、カルチャラに紹介してあげるー。」ひちに来て。」

興奮を抑えられない様子で、「クリ」は三人をテントの中に案内した。

「カルチャラ！イチローとエリカとダイゴが来ててくれたよー。」

「はじめまして、カルチャラと申します。クリから聞いていますわ。」

丁寧な挨拶をするカルチャラ。

大神達も、それに合わせて挨拶をする。

「それじゃあ、ボク虎さんの『ハンド』を持つて来るね。」

そう言つて外に出る「クリ」。

その様子に微笑んだのち、カルチャラが大神に尋ねた。

「今日はサークルを観に？それとも、「クリ」に会いに来て下さったのかしら？」

「両方です。前は「クリ」の元気がなかつたので。」

「でも、貴女のおかげで元気になつたみたいですね。」

「とんでもない。元気になつたのはあたしの方ですわ。」

大神の言葉にダイゴが続くと、カルチエラは笑つて答えた。

「へ？ 何でですか？」

「実は、あたしにも娘がいたんです。生きていればちょうど、『クリ』と同じ年に……。」

生きていれば。

つまりは死んだという事だ。

カルチエラにとつて『クリ』は、娘に等しい存在なのだろう。

「今日は『クリ』のステージもありますの。是非見てあげて下さいな。」

「あら、もう夜になつてる。大神さん、楽しいサークルでしたね。」

サークルが大盛況で幕を降ろした帰り道、エリカが興奮の覚め止ま

ぬ様子で言った。

「冗談じゃない…………、心臓が止まるかと思つたよ。」

その隣で、ダイゴが疲れた様子で言った。

今回コクリコが披露したマジックは、回転ノコギリによる切断マジックである。

会場の一人に手伝つて貰おうとした所、手を上げたエリカが見事に当たつてしまつたのだ。

当のエリカは楽しかつたようだが、客席のダイゴはエリカが斬られる様子を目の当たりにし、泡を吹いて倒れてしまった。

「さあ、今度は俺達だ。早く戻つて開店準備をしよう。」

そつ言つて戻るゝとした時、ダイゴがふと口を開いた。

「それじゃ、僕は予定があるから。またね。」

「はい、ダイゴさん。よかつたらシャノワールにも来て下さいね。」

そう言つてエリカ達と別れ、ダイゴは一人サークスに戻つた。コクリコと話がしたかった。

……いや、そうではない。

一人になる理由があつた。

それは……。

「やつぱり…………、スパークレンズが反応してゐる。」

ポケットの中で光る彫刻を握り締め、ダイゴはテントを見た。

スパークレンズが輝くという事は、その近くに何かがあるという事。

つまり、テントに何があるという事だつた。

そつとテントに近づき、ダイゴは中を覗き込んだ。

「…………毎日眺めても見飽きないなあ、」のダイヤモンドは……。  
「これさえあれば、動物等クズ同然だ。」

中にいたのは、団長のドークールだつた。

帽子に輝くダイヤモンドを幸せそうに見つめている。  
まさかあのダイヤモンドか。

ダイゴはそう思つたが、それは直後の声で間違こと分かつた。

「本當だねえ…………、食べけやこたいいくこと…………。」

「何つ? なつ! ? 何だお前は! ?

振り返つたドーカールは見てしまつた。

蛇のよつて娘に舌で田の前に立つ怪物、ピトンを。

「ヒィィイイ…………! 」のダイヤモンドは渡さねえぞ! -

「こゝよ。それなら…………一緒に奪つままでだ! -

「グ、グアアアアア…………! -

逃げ出やつとしたドーカールに、何処からか現れた巨大な口が襲い掛かつた。

血も肉も皮も残さず食い荒らされるドーカール。

その様子を満足げに眺め、ピトンはダイヤモンドを手に取つた。

「やつぱり違うねえ…………。」の近くに間違いないんだけど…………。

「

そいつに一つ、ピタンはダイヤモンドを飲み込んだ。

「何だか宝石ばかり飲み込んで、クセになりそうだよ。早い所奴を見つけないとねえ……。」

「…………！」

一部始終を目撃し、ダイゴは恐怖で身体が震えた。  
その時だ。

「…………ん？ 誰だいーそこにはいるのはーー！」

ドスの利いたピトンの声が飛んだ。  
もしや見つかってしまったか…………。

そう思つたダイゴだったが、別の声にそれは勘違いと分かった。

「あ、ゴメンね。『クリゴ』だよ？」

「（…………ー！ ロクリゴーー？）」

ダイゴはハッとした。

ピトンが気づいたのは、ダイゴではなく「クリゴ」だったのだ。

このままでは「クリゴ」まで…………。

いつぞ出て行こうか迷つたダイゴだが、次の言葉で二度驚かされる事になる。

「あり「クリゴ」、じりしたの？」

「（なつ…………！？）

ダイゴは驚きで目を見張った。

何故ならそこにいたのは、怪物ピトンではなく、カルチョラだったからだ。

「あのね、カルチョラ…………。そつきのお願い聞いてくれる……？」

「ええ。言つて『覧なさい』？」

先程の怪物は別人だつたのか？  
いや、そんなはずはない。  
だとすれば…………。

「あのね…………、カルチョラの事、ママって呼んでもいい？」

「ええ、もちろんよ。あたしの可愛いくクリ！」

そう優しい口調で答えて、口クリ口を抱きしめるカルチョラ。  
一見すると美しい家族愛である。

しかし、もしダイゴの想像が的中しているとするならば、これ程残酷な愛の形はなかつた。

「…………。」

ともかくばれずに済んだ事に胸を撫で下ろし、ダイゴはその場を後にした。

「…………。」

その様子を、後ろから見る視線に気づかずにしておいた。

その頃、シャノワールもシルク・ド・コーコーに負けない程の盛況ぶりを見せていた。

それもそのはず。何故なら…………、

「今宵はプログラムを変更して、皆様に新しい仲間を紹介しますー！」

「彗星の如く現れた新人ダンサー、その名もブルーアイ！」

司会のメルヒーの紹介で中央の階段から現れたのは、何とグリシーヌだつた。

彼女もまた、エリカのようになに舞台に立つ事を決意し、華々しいデビューを決めたのである。

「す、凄い！まるで緊張していない！」

ボーキの仕事に従事していた大神は、グリシーヌの様子に驚いた。

普通初めて舞台に上がる者は、どうしても緊張してしまい、それが客にばれてしまうものだ。

しかし、グリシーヌからは全く緊張が見えない。もしかしたら、緊張すらしていないかもしねれない。

そのくらい堂々とレビューを見せていた。

本人の言葉を借りれば当然なのだろうが、周りから見れば圧巻である。

すると、隣に現れたグラント・マが言った。

「花形スターの誕生だ。最も、本名は出せないけどね。」

グリシーヌは巴里の名門ブルーメール家の一人娘である。そんな大事な娘を舞台上に上げたと知れば、血氣盛んなブルーメール家の事、怒鳴り込んで来るに違いない。

そこで、ブルーアイという偽名でデビューしたのである。

「ほう、これは美しい。まるで極上のブルーサファイアですな。」

「おやロランス卿、『無沙汰だね。』

そう言って現れた人物に、グラント・マが笑いかける。一方、大神はその人物に驚いた。

「あ、貴方は市場の……！」

「おや大神君。覚えてくれたんですね。」

市場で会った時と変わらない笑顔で、ロランスが笑った。

「ところでロランス卿、今回の獲物は何だい？」

意地悪そうに尋ねるグラント・マ。

すると、ロランス卿もそれに合わせて感慨深げに答えた。

「やつと手に入れたんですよ。あの幻の巨大ルビー、『赤い少女の

涙』を。」

そう言ってロランスが取り出したのは、掌程にもなる巨大なルビーだった。

上の部分が尖っていて、確かに涙の雫のようにも見える。

「ほら、これがそうです。見事な輝きでしう?」

「これは見事なものだね…………。ロランス卿が必死になるのも分かるよ。」

その大きさと輝きに、流石のグラン・マも驚きを見せる。正しく人類の宝といつべき宝石が、そこにはあった。

「今、コンコルド広場で開催中の宝石展に展示してもうつ事になっているんです。」

「なるほど。その時は店の子達も連れて行こうかね。ムッシュ、その時は…………。」

「…………留守番ですか?」

「ああ、分かつてゐるじゃないか。アンタに宝石は、猫に小判だからね。」

その言葉に、三人は思わず笑った。

辺りは薄暗くなり、不気味な三日月が巴里の街を照らしていた。その巴里の人気のない裏通りを、ダイゴは歩いていた。そして、辺りに人がいない事を確認し、声を発した。

「…………隠れてないで出て来たら？」

「ばれてたのかい？」

そう言つてダイゴの背後に現れたのは、先程ドーカールを殺してダイヤモンドを奪つた怪人ピトンだつた。あれからピトンはダイゴの後を尾け、口を封じるチャンスを伺つていたのである。

「やつと見つけたよ。さあ、光の証をおよこしー。」

「やつぱり。狙いはスパークレンズかー！」

ダイゴはポケットからスパークレンズを取り出した。中心にしまい込まれたクリスタルは、淡い光を放つてゐる。

「イーッヒッヒッヒー！素晴らしい輝きだねえ。そいつをおよこしー。」

「…………嫌だと言つたら？」

答えはやつきの事で分かつてゐるが、ダイゴは敢えて言つた。

すると、予想通りピトンが叫ぶ。

「なら仕方ないねえ……、覚悟おしー。」

その声と共に、地中から巨大な口が現れる。

しかし、ダイゴは薄く笑つてスパークレンズを掲げた。すると、クリスタルから閃光が放たれ、口を消滅させてしまった。

「さつきのドニクールの時に見て気付いたんだ。今の怪物は常に地中に潜っている。ならば光に弱いとね。」

「チツー やるじゃ ないか。」

一筋縄ではいかないと感じ、ピトンは攻撃の手を一旦止める。その時、裏通りに別の影が現れた。

「そこまでだ！ 宝石泥棒め！」

それは、何と大神だつた。

グラン・マから宝石盜難事件の調査を命じられた大神は、夜の巴里を一人捜査していたのである。

「大神さん！」

「来るんじゃないよ！ お前も死にたいのかい？」

こちらへ走つて来る大神を威嚇するピトン。すると、今度はピトンにマシンガンが浴びせられた。

「そこまでです！ ダイゴさんは指一本触れさせません！。」

それは、マシンガンを持ったエリカだった。

エリカもまた、宝石盗難事件を聞いて捜査していたのである。

「チツ、覚えておいで！」

流石に形勢不利と見たか、ピトンは背を向けて逃げ出した。

「逃がすものか！エリカくん、ダイゴ、奴を追い掛けるぞーー！」

ピトンを追つて三人がたどり着いたのは、シルク・ド・ヨーロの前だつた。

「くそっ、見失ったか…………！」

辺りを見渡す大神。

すると、そこにカルチュラが現れた。

「あら、大神さん。こんな時間にどうなさつたの？」

「カルチュラさん。実は、宝石盗難がこの辺りに…………。怪しい人

物を見ませんでしたか？」

「怪しい人物……。」

大神の問いに僅かに考えるそぶりを見せ、カルチュラは思い出したように口を開いた。

「そういえば、確かに誰かがテントの近くをうろついてましたわ。」

「本当ですかー? どちらです?」

ようやく尻尾を掻んだとばかりに尋ねる大神に、カルチュラは笑つて答えた。

「はい、『案内しますわ。さあ、』いらっしゃいます。」

「その必要はない!」

しかしその時、待つたの声がかかつた。  
ダイゴである。

「どういう事だ、ダイゴ。早く探さないと犯人が……。」

「そんな必要ないよ、もう目の前にいるんだもん。」

そう言って、ダイゴはカルチュラを睨んだ。

「そうだよねカルチュラさん。……いや、怪人ピトン……かな?  
?」

「…………ふつ、優しく始末してやれりと困ったの。」――「…………」

ダイゴに指摘され、大神とエリカが驚きの表情でカルチエラを見る。すると、カルチエラは不気味に笑い、遂にその笑顔の仮面を剥ぎ取つた。

「イーチラマシ...」

「ギャーッ！！！ カ、カルチエラさんが……………！」

衝撃の事実に、エリカが思わず悲鳴を上げた。

目の前で知り合いの女性が突然怪物になつたのだから。

「そうか、宝石盜難事件の犯人はお前だつたんだな！」

「そうさ、宝石は美味しいだいたよ。持ち主の人間はみんな食い殺しちまつたけどね！！」

今までのカルチエラからは想像もつかないような残酷な笑み。これこそが、ピトンの眞の素顔だった。

しかし、ここでとんでもない事態が発生した。

「あ、ママお帰りなさい。何処に行つてたの？」

何と、事もあつてが「クリ」が出て来たのだ。

「コクリコ！近寄るなー！」

「チッ！」クリはあたしがいただくんだよ！」

大声で叫ぶ大神。

しかし、それより早くピトンが動いた。

「ふふふ……、可愛いコクリコ……、ママのために人質になつて頂戴ね。」

「ど、どうしたのママーー?..」

突然後ろから肩を捕まえられ、困惑するコクリコ。

大神は、意を決してコクリコに真実を告げた。

「コクリコ、落ち着いて聞くんだ。そいつは人間じゃない。巴里を襲う怪人だつたんだーー!..」

「か、怪人ーーー?..ママ、嘘だよね?優しいボクのママだよね?答えてよ、ママーー!..」

自分を娘のように可愛がってくれたカルチョラが怪人のはずがない。きっと見間違いか、疑われているだけだ。

そう信じ、一縷の望みをかけてコクリコが尋ねた。

しかし、健気で無垢な少女に突き付けられたのは、残酷なまでの真実だった。

「コクリコ……。その言葉、この顔を見ても言えるのかい?..」

「そ、そんなー?マ、ママーー!..」

「止める怪人!今すぐコクリコを離せー!..」

「動くな!一步でも動けば、この子の首が引き千切れると!..」

「クリ」を救出しようと三人を、ピトンが脅した。

鋭い爪が、コクリコの首に向けられる。

これでは助けに行く事もできない。

「バカ正直め。そのまま立つてなよ!」

その時、大神の真下から数多の犠牲者を食い殺した巨大な口が襲い掛かった。

「つわづわ！」

何とか食われずに済んだものの、大神は今の一撃で左膝を斬つてしまつた。

「大神さん！」

「くつ！…………怪人、コクリコを放せ！」

鮮血が流れる膝を手で包み、大神がピトンを睨んだ。  
その時だつた。

卷之三

どういいう訳か、コクリコが突然笑いはじめたのだ。

「『クリ』…………、何で笑ってるんだい？」

人質にされ、命さえ危うい状況なのに、何を笑っているのか。

大神やエリカ、ダイゴのみならず、ピトンすらも呆気に取られてし

また。

すると、「クリ」は笑つたままで言つた。

「ボク、泣かないんだ。どんな時でも、笑つてるんだ。」

すると、不思議な事が起つた。

「クリ」の身体を、淡い光が包み込んだのである。

「な、何何だい？」の光は！？

「だから、ボクは笑うんだ。泣いても辛いまだから、笑うんだ……。」

ピトンの驚く声も聞こえていないのか、「クリ」は謹言のように言った。

「ねえ、イチロー……、ボク笑つてるよね？泣いてなんかないよね？」

「もういい、クリーもういいんだ！…」

好きだった人に、ましてや一人だった自分を救つてくれたはずの者に裏切られて、どうして笑つてられようか。

「クリ」が笑顔の仮面の下で泣いているのが、大神には分かつた。

「イチロー……、ボクは……、ボクは！…」

「クリ」が叫んだ。

その時、「クリ」の身体を覆っていた光が、まばゆい闪光となつてピトンを襲つた。

「くつー！？しまった！！」

その拍子に、ピトンが「クリコから離れた。  
それと同時に、ダイゴが割つて入る。

「クリコに近づくな！怪人！！」

「チツ、覚えておいで！」

捨て台詞を吐き捨て、ピトンは夜の闇に消えた。

「クリコ、クリコ！大丈夫か！？」

倒れたクリコを抱き上げて呼びかける。  
しかし、失神しているのか返事はない。

「大神さんー！とりあえずシャノワールの医務室に！」

「…………」の子かい？ムッシュが見つけた靈力の持ち主は。

「はい。怪人を吹き飛ばす程の、強い靈力でした。」

グラン・マの問いに、大神が答えた。

目の前には、ベッドに横たわるコクリコの姿がある。幸い靈力の発動によるショックで気を失つただけらしい。

おそらくママと呼び慕つていたカルチュラが、怪人ピトンだつたシヨックによるものだらう。

「コクリコの心の傷は、深いものだつた。

「…………で、ムツシユ。この子は戦力になりそうかい？」

「そ、そんな！「コクリコ」を隊員にするつて言つんですか！？」

グラン・マの発言に、エリカが反発した。  
無理もない。

「コクリコはまだ11歳なのだ。

そんな幼い頃から戦場に立たせるなど、エリカには考えられなかつた。

一方グリシーヌも、根拠こそ違つがエリカに賛成した。

「同感だ。こんな子供に何が出来る？足手まといもいい所だ。」

「口を慎みな。巴里華撃団はただでさえ人手不足なんだ。子供だろうと関係ない。」

二人の意見をバッサリ切り捨てるグラン・マ。

すると、大神が口を開いた。

「司令、俺は「コクリコ」自身に選ばせたいと思います。」

「そんな、大神さんまで！こんな子供に戦わせるつて言つんですか

！？」

珍しく大神を睨むエリカ。  
しかし、大神はキッパリと言つた。

「コクリコは今までずっと戦ってきた。辛い事も悲しい事も、笑顔を作つて必死に乗り越えて来た。そうだろ？」「

「…………。」

大神の言葉に押し黙るエリカ。

グリシーヌも、無言だが大神の考えには納得したようだ。

「じゃあコクリコの事はムッシュに一任するよ。…………ムッシュ、側にいてあげな。」

「はい。」

他の仲間が医務室を出る中、大神は一人コクリコを見た。すると、不意にコクリコが目を開いた。

「…………イチロー…………。」

「「コクリコ…………、気がついたのかい？」

大神が優しく笑いかけると、コクリコは上半身を起こした。

「…………本当はね、さつきから起きてたんだ。…………話、聞いちやつた…………。」

巴里華撃団の存在を知られた事は、一向に構わない。  
もしかしたら「クリコ」も、共に戦うかもしれないんだから。

「俺達と一緒に戦つかは、「クリコ」が好きに決める事だ。でも、俺  
は「クリコ」の味方だよ。」

あくまでも「クリコ」を尊重してくれる大神。

傷ついた「クリコ」にとって、これ程救われるものはなかつた。

「イチロー…………。」

「笑わなくていいよ…………。」

胸に顔を埋める「クリコ」を抱きしめ、大神が優しく言つた。  
笑わなくていい。もう涙を飲み込む必要はないのだ。

「イチロー、ありがと……。」

「クリコ」は、大神の胸でおそらく初めて泣いた。

翌朝、大神が医務室に迎えに行くと、笑顔を取り戻した「クリコ」の姿があつた。

「『クリコ』、元気になつたみたいだね。何か食べに行こうか。」

「うん……」

元気な声で答える『クリコ』。

しかしその時、けたたましい警報が鳴り響いた。

「緊急事態発生！巴里華撃団隊員は、大至急作戦司令室に集合して下さー！」

それを耳にして、大神の表情は一変した。

「怪人が現れたのか！『クリコ』、君はここで待つていいんだ！いいな？」

「あ、イチロー！」

「クリコ」の返事も聞かず、大神は走り出した。

モニターに映し出されたのは、コンゴルド広場だった。確か口ランスが、赤い少女の涙を展示する予定である。おそらくそれを狙っているのだろう。

「あ、おひげのおじさんだ！」

「クリコが作戦司令室に飛び込んで来たのは、その時だった。

「クリコ、待ってるよつて言つただろ？」「

慌てて大神が奢めようとする、グラント・マが口を挟んだ。

「おひげのおじさん？ ロランス卿の事かい？」

「うん…いつもボクに優しくしてくれたんだ。おじさん、どうしたの…？」

「クリコは頷いて、大神に尋ねた。

「ねえイチロー、おじさん、怪人に狙われているの…？」

「大丈夫だクリコ。ロランスさんは絶対助ける。」「

大神が元気づけるように言つたその時、クリコは遂に決断した。

「ボクも戦う…おじさんを助けたいんだ！」「

「ふざけるのもいい加減にしろ…貴様」ときに一体何が出来る…足手まといだ…！」

たまり兼ねたグリシーヌが怒鳴るが、クリコは聞かなかつた。

「足手まといなもんか！ ボクだって力があるんだ！ イチロー、いい

でしょ？」

「…………分かつた。コクリコ、一緒に戦おうー。」

一瞬考えたのち、大神は「コクリコ」の申し出を受け入れた。カルチエラが敵と分かつた今、ロランスはコクリコに残された大切な人なのだ。

守れる力があるなら、守りたい。大神は、そんな「コクリコ」の想いと勇気を尊重したのだ。

「ありがとう！ボク、頑張るよー。」

「コクリコ、一つだけ言つておくよ。誰のためでもなく、自分のために戦うんだ。いいね？」

「はいー。」

グラン・マの忠告に素直な返事で頷く「コクリコ」。

その様子に満足そうに微笑み、大神は命令を下した。

「よしー!巴里華撃団花組、出撃ー!目標地点、コンゴルド広場ーー！」

「「「解ーー」」

いくつもの宝石が並ぶコンコルド広場の展示場。

そこにピトン率いるローン達が現れたのは、突然の事だった。

急いで逃げ出す人々。

その中に、クリコの大切なおひげのおじさん、ロランスの姿があつた。

奴らの狙いは、おそらく自分の持つ赤い少女の涙。

そう考へたローランズは、他の人々を危険から守るために車内でホークの真ん中を突っ切つての脱出を敢行したのだ。

「イーッヒッヒッヒー！逃がしちゃないよー。さあ、赤い少女の涙を渡して貰おうか？」

「あれば人類の宝だ！お前のような奴にくれてやる訳には行かん！」

ピートンやボーンに囲まれても毅然と言い放つロランス。すると、ピートンはニヤリと笑った。

「やつかり。ならアンタ、お食ひにやめなさい。」

「ルーティング」

「な、何つー? 誰だー...」

突然の声に驚いて左右を見渡すピトン。すると、ピトンとロランスの間に翻つて入るよつて、四つの光武Fが現れた。

「巴里華撃団、参上ー...」

刹那、先頭に立つピンク色の光武Fが叫んだ。

「おじやん、伏せてー...」

ロランスが退避したのを確認するや、「クリ」が両肩の大砲を撃つた。

その攻撃を至近距離で食らったローンは、たちまち炎上する。

「お、おのれ.....! ポーン達、あの邪魔者を蹴散らしておしま  
いーーー」

「ひひ、ピートンは素早く姿をくらました。

「よし、敵蒸氣獸を全滅せねーーー!」

「「「解ーーー」」

コンコルド広場の戦闘は、前回の凱旋門に比べて戦いにくかった。ショートソードという砲台をピトンが設置していた事もあったが、何より建物が入り組んでいて、中々敵を発見できないのだ。

しかし、それを打ち消したのがコクリコだった。

持ち前の身のこなしで建物の屋根を飛び移り、ローンを片つ端からやつつけたのである。

宝石を回収したのち、砲台を全滅させ、巴里華撃団はロランスのもとへ急いだ。

「おじさん、大丈夫？」

「ああ、私は大丈夫だが、あそこには……。」

光武Fに乗つて現れたコクリコに多少驚きつつも、ロランスは真上のオベリスクを指差した。

「あのオベリスクにまだ、赤い少女の涙が……！」

「分かりました。我々が保護しますから、貴方は避難して下さい！」

大神がそう答えた時だった。

突然地中から巨大な鮫のような怪獣が現れ、オベリスク」と赤い少女の涙に噛み付いたのだ。

「しまった！みんな、あの鮫を止めるんだ！！」

大神の指示で、花組は一斉に飛び掛かるが、鮫は凄まじいスピードで光武Fを跳ね退け、ピトンの下にたどり着いてしまった。

「イーッヒッヒッヒー…よくやつたよゲオザーグ。さて、赤い少女の涙はいただくからね。」

勝ち誇ったように笑つてゲオザーグの頭を撫でるピトン。しかし、配下の鮫が口にくわえた物を手に取るや、その笑いが凍りついた。

「な、何なんだいこれは？赤い少女の涙じゃないじゃないか？」

「ええつ！？」

何と、ゲオザーグがくわえていたのは、飴玉だった。  
確かにオベリスクをかみ碎いたはずなのに、一体どういう訳なのか。  
それは、一人の天才マジシャンの仕業だった。

「さあさあ、お代は見てのお帰りだよー！」

何處にしまっていたのか、コクリコが巨大なハットとバトンを取り出した。

「アン、ドゥ、トロワ！」

掛け声と共にバトンを振るとあら不思議。

ハットの中から巨大なルビーが出て來たのだ。  
コクリコはゲオザーグにしがみついた瞬間、一瞬の早業で飴玉と宝石を入れ替えていたのだ。

「はい、本物はこちりーー。」

途端に周囲から拍手が巻き起し<sup>レバ</sup>。  
すると、「クリコ」が大神に声をかけた。

「笑顔がこんなに……。イチロー、みんな笑つてるね。」

「やつこつ」クリコも、いい笑顔をして<sup>レバ</sup>いるよ。」

「本当? イチローだつて、笑つてるよ。」

それは、仮面などではない。

「クリ」の心を偽らない、本当の笑顔がそこにはあった。  
「グリシーヌさんが言つ程、足手まといになつてしませんよ?」

「うむ……。まあ、少しは役に立つたな。」

エリカに肘でつつかれ、グリシーヌがそっぽを向く。  
相変わらずだが、グリシーヌも「クリコ」を認めたのだ。  
しかし、この状況に怒る者がいた。

ピトンである。

「おのれ巴里華撃団ーあくまでも邪魔するなら、容赦しないよーー。」

すると、ゲオザーグと並ぶよつに一体の蒸氣獣が現れた。  
両腕がなく、代わりに蛇の形をしたロボットが腕になつてい<sup>ル</sup>。

「お前らだけでも絞め殺してやるー」の蒸氣獣『ベルスーズ』と、  
可愛いゲオザーグでねーー。」

「来るぞ！全員戦闘配置につけ……！」

「「」解……」「

大神の指令で、花組は直ちに戦闘体勢に入つた。

ピトンの操るベルスーズとゲオザーグ。

この一體の怪物に、花組は劣勢を強いられる事となつた。

ゲオザーグが地面に潜り、花組に地中から奇襲を仕掛けているのだ。そのゲオザーグに気を取られていると、今度はベルスーズが攻撃を仕掛けて来る。

しかし、浮足立つ巴里華撃団を救う者が現れた。

「やはり怪人の仕業だつたか…………」「

騒ぎを聞いてコンコルド広場に駆け付けたダイゴは、ゲオザーグとベルスーズに苦戦している花組を見た。いずれもベルスーズの毒にやられ、動きが鈍っている。

「ピトン…………、光の力を見せてやる…………」「

正義の怒りと共に、ダイゴはスパークレンズを取り出した。

メルバを倒した光の力。

今一度それを示すかの如く、クリスタルは光っている。

ダイゴはスパークレンズを構えて時計回りに回転させ、光の名を叫んだ。

「ティガ————ツ！！」

「チャツ！！」

それはやはり突然現れた。

空から飛来した巨人がベルスーズを蹴り飛ばし、コンコルド広場に降り立つ。

その姿に、巴里華撃団は驚きを露にした。

「ウルトラマンティガ！！」

それは正しく、凱旋門でメルバを倒した伝説の巨人。ウルトラマンティガであった。

「イーッヒッヒッヒ！待つてたよティガー！」ここで暴れていればアンタが来ると踏んでいたからね。」

「チャツ……！」

巴里華撃団と対照的に、ピトンはティガの登場に不敵な笑いを見せた。

コンコルド広場の襲撃は前座に過ぎない。

ピトンの目的は、ティガを誘い出して抹殺する事だったのだ。

「さあゲオザーグ！あの裏切り者を噛み千切つておやり！」

ピトンの命令で、地中鮫ゲオザーグがティガに襲い掛かった。

「ハツ！」

前方から背鱗を出した状態で突っ込んで来るゲオザーグ。

ティガはそれを前転で避けると、右手を突き出した。

ハンドスラッシュ…………突き出した右手から爆発する光弾を連射する、ティガの必殺技だ。

「ハツ！」

右手から打ち出された青白い光弾は、ゲオザーグの背鱗を直撃した。それに伴い、ゲオザーグは苦しみながら地中に潜る。

「凄い…………あれがウルトラマンなんだ……。」

初めて見る光の巨人に、瞳を輝かせるコクリコ。

今まで自分達が苦戦していた敵の片方を難無く退けたその力は、正

に救世主の三文字が相応しい。

「チャツ！」

次の目標をベルスーズに定め、ティガが構えを取る。しかし、ピトンはニヤリと笑つた。

「いいのかい？あたしばかり見て……。」

そう笑つた時、大神はベルスーズの異変に気づいた。ベルスーズの腕の蛇がない。それと同時にベルスーズの目が赤く光り、ゲオザーグ以外に地面を揺らす震動を感じる。

「まさか……、ティガ！下だ！」

大神が気づいて叫ぶが遅かつた。

「ジュワツー？」

突然地中から現れたベルスーズの腕が、ティガに巻き付いてがんじがらめにしてしまつたのだ。

「イーッヒッヒッヒー！腰にかかったねティガ。」

ピトンが凶悪な顔で笑う。

ゲオザーグがやられて油断した隙に、腕でティガを捕まえる作戦だつたのだ。

「さあ、巴里華撃団と共にあの世へお行き！ル・シャ・ドウ・デラ・

「テール！」

蛇の口から、緑色の猛毒ガスが浴びせられた。

ガスは勢い良く飛散し、ティガと花組を瞬く間に包んでしまった。

「くそつ、これじゃあ助けに行く事も……。」

動かない光武Fに、大神が悔しげに拳を握る。すると、ベルスーズに走る一つの影が田に入った。

「コクリコッ！？」

それは、何とコクリコだった。コクリコは持ち前のジャンプで毒ガスをかわしていたのだ。

「えいー。」

屋根からジャンプすると同時に、コクリコはベルスーズの顔面にドロップキックをきました。

「よくもみんなを騙したな！絶対許さない！」

「フン、調子に乗るんじゃないよーお前から絞め殺してやるー。」

「やれるもんならやってみるーみんなはボクが守るんだ！」

「ピーン」と音を返し、コクリコはバトンを取り出した。

「イツ、ショータイムーみんな、出でいでーマジーク・ボンボンー！」

バトンが振られると同時に沢山の猫が現れ、ベルスーズを引っ搔き回した。

「クワツ！？くそ、ガキが…………！」

その一撃で、ベルスーズは赤い目を潰された。すると、蛇の締めが急に緩んだ。

「ティガ！今だよ！」

「チャツ！」

「クリ！」の言葉に頷き、ティガは蛇を振りほどく。そして、両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「ンウウウ…………、ハツ！」

勢い良く両腕を振り下ろすティガ。

すると、ティガの体色が赤と銀に変わった。

スカイタイプと対を成し、超怪力で敵をたたきのめすパワータイプだ。

「チツ！ゲオザーグ！早くティガを片付けておしまい！」

ピトンの命令を受け、ゲオザーグがティガに迫る。しかし、今度は違った。

「チャツ！」

ティガはどうしつとゲオザーグを待ち構えると、その牙を掴んで地

上に引つ張り上げたのだ。

全身を太陽の光に曝され、苦しむゲオザーグ。

「デュアツ！！」

ティガはゲオザーグを高々と持ち上げると、ベルスーズ目掛けて投げつけた。

「クワツ！？」

たちまちベルスーズは、ゲオザーグの下敷きになつて身動きを封じられる。

その時、ティガのカラータイマーも点滅を始めた。

「チャツ！」

ティガは胸のカラータイマーに両手を合わせ、下に降ろした。すると、その二つの掌に赤い光が宿る。

「ハアアア…………！」

そのまま両手を大きく外側から回し、膨大なエネルギーが圧縮される。

デラシウム光流…………エネルギーをボール状に圧縮し、敵にぶつけるパワー・タイプの必殺技だ。

発動まで僅かに時間がかかるが、威力はランバート光弾を大きく上回る。

「ダアツ！！」

胸の前で圧縮された光のボールが、裂帛の氣合いと共にゲオザーグに直撃した。

刹那、ゲオザーグを光が包む。

「クワツッ！あ、あたしはまだ死ねない…………！」

死期を悟つたか、ピトンが吠えた。

「ティガ…………、貴様を倒してその宝石を食らい尽くすまで、死ねないんだよーー！」

そう叫ぶと同時に、ベルスーズはゲオザーグ諸とも大爆発した。

「…………終わったね。」

「ああ、大活躍だつたなコクリコ。」

「凄い！初めてなんて信じられない！」

「…………靈力の高さだけは認めてやるつ。」

光武Fから降りたコクリコに、花組が労いの言葉をかけた。  
ゲオザーグから赤い少女の涙を取り戻しただけでなく、ティガの窮

地までも救つたのだ。

これを大活躍と言わすして何と言おう。

「エヘッ。」

恥ずかしそうにコクリコが笑う。  
すると、エリカが大神に言つた。

「それじゃあアレ、やりましょつか！」

「アレつて……？」

初めての戦いで知らないコクリコが尋ねる。  
すると、グリシーヌが呆れた口調で説明した。

「巴里華撃団には、勝利した後の約束事があるらしいのだ。私は不  
本意なのだが。」

「ふーん、そうなんだ。それじゃ、いくよ！」

「勝利のポーズ、決めつ！！」

「チャツ！」

その様子を見届け、ティガは空高く飛び立つた。

それからじばらべ、「クリ」の姿はシャノワールにあった。  
それも、レビュー服を着て。

「へへへ、これからボクもシャノワールのステージに立てるんだって。」

正式に巴里華撃団のメンバーに迎えられた「クリ」は、グラン・マの提案でシャノワールでも働く事になった。  
最も、昼はサークัสがあるため、夜しか出演できないが。

「それとね、市場の手伝いも続けるつもりなんだ。」

「おーおー……、それじゃ身体がいくつあっても足りないぞ?」

「あ、そうか。アハハ……!」

大神に言われ、「クリ」は笑った。

今までのよつぎな仮面の笑顔ではなく、心からの笑顔で。

笑顔の仮面（後書き）

『次回予告』

私はブルーメール家の名誉と誇りにかけ、巴里を守る。

光の巨人だか何だか知らぬが、そのような者の出る幕はない！

次回、サクラ大戦3！

『サムライの誇り』

愛の御旗のもとで……

貴公のよしには……なれん……

## サムライの怒り（前書き）

ゲームで見つと第3話。

じつして見ると、ナマリノトの話もよく似たくだりだつた気も……

…

## サムライの誇り

「…………エリカさんが？」

コンコルド広場の一件からしばらくが経ち、巴里が梅雨の時期に差し掛かった頃、ダイゴはレノ神父の話に驚きを見せた。

エリカが屋敷へメイドの仕事に行つた…………。

ダイゴの耳が正しければ、レノ神父はそう言つたはずだ。

「ハイ…………。何でも大神さんがブルーメール家のメイドをしていふと言つるので手伝いにと…………。」

「メイド…………？大神さんってそんな趣味だったなのかな？」

あの眞面目を絵に描いたような男が女装趣味とは、流石にダイゴも考へづらい。

エリカの情報だけにやや信憑性に欠けるが、もし事実なら大神も随分恐ろしい趣味だ。

「しかし、大神さんは眞面目で誠実な方ですから…………。何か事情があまりかも知れません、ハイ。」

確かにレノ神父の言つ通りだつた。

エリカは嘘はつかないが、内容に大事な事が抜けている事が多い。

大神も趣味と言つより、何か理由があつたと考える方が自然だ。

特にエリカが向かつたのはグリシーヌの屋敷という。

もしかしたらお人よしの大神の事、メイドを手伝つように言われて断れなかつたのかもしれない。

「ダイゴさん。気になるなら行かれてみては如何ですか？今日のボランティアは、構いませんから。」

「…………うだね。ありがとうございます、神父様。」

レノ神父に礼を述べつつ、ダイゴはグリシース邸に向かつて歩きだした。

ブルーメール家は、巴里の貴族の中でも名門中の名門だ。

世界の歴史の中でも名高いノルマンディーの血を引く事に由来する。これに唯一肩を並べられる存在が、シャドーブリアン家であった。武のブルーメールと、商のシャドーブリアン。

この二つが、巴里の双璧を成す名門貴族だった。

当然、その名門の息女たるグリシースの屋敷は豪勢な訳で。

「お、大きい……。」

何度も遠目に見た事があるとはいえ、その巨大な威圧感に圧倒されるダイゴ。

そのダイゴの耳に声が届いたのは、その時だった。

「ダイゴさん！』

その声と共に、エリカが煙を上げて走つて来た。

「やつぱり来てくれたんですねー。エリカ信じてましたー。」

「え? あ、そうなの……。」

「うあえず自分が来た事を喜んでくれたらしく、ダイゴも笑顔を返す。  
すると、エリカがダイゴの腕を掴んだ。

「ほら、何突つ立てるんですか? 早く来て下さーーー。」

「へ? ち、ちょっとエリカさんー?」

訳の分からぬまま、屋敷の中に連れ込まれるダイゴ。  
そして、屋敷につくや否やエリカはエントランスで大声を張り上げた。

「タレブーさん!」

その声を聞いて現れたのは、グリシース邸でも最もキャラリアの長いメイドのタレブーだった。  
かなり年を取してはいるものの、その仕事の手際のよさは誰にも負けない、現役バリバリのメイドだ。

「何ざますかエリカ、騒々しい。」

指示棒を手に階段を降りてきたタレブーは、ダイゴの姿に目を丸くした。

「まあエリカ！本当に連れて来たのですね！？」

「はーーーダイゴさんはいつこう時、必ず駆け付けてくれる人ですか  
いーーー」

何やら自慢げに胸を張るエリカ。

どうやら自分がここに来ると、タレブーに宣言してこたらしこ。

「それでは、ダイゴ、貴方も早速着替えて来ながります。」

そう言つて、タレブーはダイゴに一着のメイド服を渡した。

「…………へ？」

「当屋敷で働くからには、所定のメイド服を着用してもいいります。」

「や、それじゃあ…………。」

まさかと思つてダイゴはエリカに目を向ける。  
すると、エリカは張り切つた表情で言つた。

「はーーーこれからダイゴさんも、私達と一緒にがんばりましょうね  
！ーーー」

やはりそうか、とダイゴは思つた。  
来た時から薄々と予感していた。

恐らくエリカの事、自分にもメイドをやらせらるつもりだらうと。  
そして、幸か不幸か #NAME# の予感は的中した。

「…………男用はないの？」

タレブーから渡されたメイド服は、何処からどう見ても女用だ。どう考へても、自分には合わなさ過ぎる。しかし、タレブーは首を横に振った。

「それはないです。ブルーメール家は代々、メイドは女の仕事です。」

「あ、そうなの…………。」

「そもそもオオガミも、お嬢様との決闘に負けてここにいるります。オオガミもダイゴも、この名譽ある仕事に携わるのは、例外中の例外ざます。」

「…………決闘？」

やはり趣味ではなく事情だったとしても、まさか決闘をしていたとは思わず、ダイゴは驚いた。

「まあ、早く着替えて仕事ざます。ダイゴはエリカと一人で、庭の掃除ざますよ。」

「…………やつぱり、いつなるのか…………。」

有無を言わせぬ状況に、ダイゴはため息をつくしかなかつた。

何故大神がメイドをやる事になったのか。

そのいきさつは、隣にいるエリカが作業しながらかい摘まんで説明してくれた。

何でも今朝、大神はみんなを集めてこんな事を言つたらしい。

「今日は思い切つてみんなで遊ぼう。」

何でも日本の遊びを教えると言つ事だつたらしい。

そして、エリカ、「クリコ」、グリシーヌの四人で遊んでいたのだが、グリシーヌは乗り気でなかつたせいか怒りだしたといふ。しかし、コクリコに羽つきで負けて墨を塗られそうになつたと聞き、ダイゴは思わず納得した。

顔に墨を塗られるという事は則ち、羽つきに負けたといふ事。グリシーヌにとってそれは、コクリコが相手だつた事も含めて堪え難い屈辱だつたのだろう。

「…………それで、大神さんと決闘なんて言い出したんだね？」

芝刈り機を動かしながらダイゴが言つと、エリカは石床を簾で掃きながら答えた。

「そうなんです。それで大神さんも受けて立つなんて言い出して……。」

どういう訳か、グリシーヌ邸の隣の湖には何隻もの船がある。決闘はそのマストで行われた。

互いに命綱を足につけ、最も得意とする武器で相手を倒した方が勝ちというものだ。

大神もグリシーヌも斧を使って戦い、最初は大神が優勢だったらしいのだが、一瞬躊躇つた隙にグリシーヌに負けてしまつたらしく。何とも大神らしい事だと、ダイゴは思った。

そして、大神一人に働くかせては可哀相だからと、エリカとコクリコも手伝う事にしたらしい。

「よく手伝う気になつたね。得する事なんてないのにや。」

決闘に負けた大神は自業自得として、エリカもコクリコも何故手伝う気になつたのか、ダイゴは不思議でたまらなかつた。すると、エリカはさも当然の如く言つてのけた。

「だつて私もコクリコも、大神さんの役に立ちたかったですから……。」

「…………。」

その一瞬、ダイゴの口元が引き攣つた。  
恐らく大神の笑顔でも想像したのだろう。  
エリカの顔は赤く染まつていた。

「…………そんなにあの人人が好きなんだ。」

「はい。…………ダイゴさんは、大神さんの事嫌いですか？」

探るようにエリカが尋ねた。

「別に。ただ、やたら女受けするなと思つて。」

初めて会つた時から、ダイゴは大神に対してもあまり良い感情を持つ

てはいなかつた。

加えて、大神がどの女性にも田につく程に優しい点が、拍車をかけていた。

フェミニストとは違うのだろうが、それでもどの女性にも優しくしている様子は、男から見て気分の良いものではない。

「女性だけじゃないですよ。大神さんは巴里のみんなに愛されてます。」

「みんな？あの人？」

「ダイゴさんだって、大神さんのために来てくれたじゃないですか。」

そう言って、エリカはダイゴの手を両手で優しく包んだ。  
その両手の暖かさに、ダイゴは思わずエリカから田を逸らす。

「ダイゴさん……、貴方はきっと、まだ気づいていないだけなんです。大神さんの素晴らしさに……。」

「……。」

ダイゴは答えようとしなかつた。

人々を分け隔てなく笑顔にできるのは、確かに大神の魅力だらう。しかし、ダイゴは認めたくなかった。

それを認めれば、エリカが自分を離れて大神の下へ行ってしまうような、そんな気がしたからだ。

「（そんなに）アイツがいいのか？僕よりも……。」

ダイゴが口には出せない言葉を心で訴えた時、俄かに玄関が騒がしくなった。

「…………何があったの？」

「さあ？ 私もよく分かりませんけど…………。」

ダイゴに尋ねられて首を傾げるエリカ。すると、その後ろから声が聞こえてきた。

「あれはリッシュ伯爵。巴里の中でも五本の指に入る名門貴族の人だ。」

「あ、グリシーヌさん。」

そこに立っていたのはグリシーヌだった。何か考え方でもしていたのか、いつも増して表情が険しい。そしてその表情は、ダイゴを見て更に険しくなった。

「…………やはりお前も来ていたのか。」

「…………。」

明らかに快い歓迎とは違つて言葉に、ダイゴは無言でグリシーヌを見返した。

どちらも顔見知りではあるものの、仲良しという訳ではない。グリシーヌはあからさまにダイゴを避けているし、ダイゴも大して気にしていなかった。

「まあ良い。ほら、わざわざと行け。隊長とコクリコばかり働かせるな。」

「はーい。行きましょ、ダイゴさん。」

「…………うん。」

グリシーヌに言われ、ダイゴはエリカについて行く形でその場を後にした。

大広間の前の扉の前には、既に大神と「クリコの姿があった。

「あれ、ダイゴー！ダイゴも来てたの？」

一人を見つけるや、「クリコが驚いた。  
まさかダイゴが来ていたとは、夢にも思わなかつたのだろう。  
見ると、大神も意外そうな顔をしていた。

「そなんです！#ダイゴさんも大神さんを助けるために駆け付けてくれたんですね！」

得意そうに胸を張るエリカ。

「どうやらみんなにダイゴが来ると宣言していたようだ。

「Hリカくんの言つ通りだつたな。ダイゴ、ありがとヘ。」

エリカの言葉を真に受けたのか、礼を述べる大神。ダイゴはそれには答えず、コクリコに尋ねた。

「二人は、ここで何してるの?」

「うん。さつきリッシュ伯爵つて人が来たんだ。それで広間に通し  
たんだけど……。」

すると、エリカが興味深そうに尋ねた。

「ねえコクリコ。そのリッシュ伯爵つて、どんな人だつた?」

「え? 別に普通だつたけど……。」

「クリコが答えた時だつた。

エリカが広間の扉に手をかけたのである。

「ち、ちょっとHリカさん!-?」

「駄目だよエリカ! 怒られちゃつよ!-」

慌てて止めようとするクリコとダイゴ。

一応自分達は今グリシース邸のメイドなのだ。  
そのメイドが客を盗み見るのはマナー違反も甚だしい。  
しかし、Hリカは一人の説得を聞かなかつた。

「大丈夫です。ほら、何事もまずは調べる事が大事って言つでしょ?  
?」

そんな言葉は聞いた事もないが、ともかく扉を開くエリカ。しかし、ここでもエリカの天才的ドジが発揮された。何とエリカは扉の前で躊躇、派手に扉にダイブしてしまったのだ。当然扉はけたたましい音と共に全開になる訳で……。

「あ…………。」

異口同音の声と共に三人の顔を冷や汗が伝づ。

「まあ、あなたたちーのぞき見はマナー違反ざますよー。」

「す、すみません!」

すかさずタレブーに一喝されて頭を下げる大神。すると、奥のテーブルから笑い声が聞こえてきた。

「ハツハツハツ、構いませんよ。この私の姿に見とれての事でしょうから。」

それは、グリシーヌにも劣らない豪華な装飾品で着飾つた男だつた。恐らくは彼がリッシュ伯爵だらう。

そんな事を考へてみると、リッシュ伯爵はタレブーに尋ねた。

「…………隨分むさ苦しい輩共ですな。マダム、こちらはグリシーヌ嬢のペットですか?」

「いいえリッシュ伯爵様。お嬢様のお戯れにござります。」

律儀にそう答えると、タレブーは四人を叱り付けた。

「客人に失礼を働く事は、以つての外ざますー四人共お仕置きざます！」

しかし、ここで止める声が上がった。

リッシュ伯爵である。

「その必要はございませんよマダム。こいつは叱るよつ……。

」

そう言いつつ一番近い「クリ」とリッシュ伯爵の方に歩み寄るリッシュ伯爵。刹那、ダイゴはリッシュ伯爵からただならぬ殺氣を感じた。

「身体に覚えさせるべきです！！」

「クリ、危ない！？」

大神が叫んで「クリ」とリッシュ伯爵の間に割つて入る。

その後、リッシュ伯爵の拳が深々と大神の鳩尾に減り込んだ。

「ぐふう…………！」

「イチローーーー？」

目の前でづくまる大神に驚く「クリ」。

しかし、リッシュ伯爵はその大神の頭を掴み上げ、顔面を膝にたたき付けた。

「ーーー！」

声にならない叫びと共に床に倒れる大神。

更にその腹を蹴りつけようとしたリッ・シユ伯爵だったが、間一髪の所でダイゴが止めた。

「…………言葉より先に暴力に訴えるなんて、貴族の名折れだね。」

「それを貴族というんだよ少年。君もその生ゴミのよひにされたくなかったら、その汚い手を退けて貰おうか？」

そう言いつつリッ・シユ伯爵はダイゴを殴るつもりするが、その前にタレブーがその場を諫めた。

「EJの屋敷内の乱闘は固くお断りするぞます。」

「…………仕方ない。確かにマダムの意通りですね。」

タレブーに諫められ、リッ・シユ伯爵は拳を降ろした。

「そもそもこの私が、このようなクズに触れる等、あつてはなりません。さあ、早くその生ゴミを片付けてくれたまえ。」

顎で三人に命令するリッ・シユ伯爵。

その言葉に「ククリ」は言い返そつとしたが、ダイゴに止められた。今ここで騒ぎを大きくしては、グリシーヌにも迷惑がかかるからだ。ともかく氣を失った大神を運ぼうとした時、別の声がかかった。

「あの…………。」

振り返つた三人の目に飛び込んできたのは、自分達に近い年齢の少女だった。

短く切り揃えられた黒い髪と黒い服が特徴的な、大和撫子を絵にし

たような姿。

三人はその清楚な佇まいに、一瞬見とれてしまった。

「 ようしければ、私の部屋で休ませませんか？ ここから近いですし  
…………。」

端正な顔で優しく微笑み、少女が言った。

「あ、うん。そうだね…………。」

その声で我に還ったダイゴが答え、三人は大神を抱えて少女の後を追つた。

少女に案内された部屋は、落ち着きのある日本風の和室だった。  
豪勢な屋敷とは対照的に、畳や屏風などで心の休まる空間になつて  
いる。

「 ありがとう。おかげで助かったよ。」

ダイゴが礼を言つと、少女は恥ずかしげに頬を染めた。

「 大した事ではありませんよ。」

「 …… そういえば、自己紹介がまだだつたよね？ 僕はダイゴ＝モ  
ロボシ。さつきの二人は、エリカとコクリコつて言うんだ。」

今はその場にいない一人を含めて、ダイゴは簡単に自己紹介をした。エリカもコクリコも、今は部屋にいない。

というのも、先程の騒ぎのお仕置きとしてすぐに仕事が割り当てられてしまったからだ。

よつて今この部屋には、少女の他はダイゴと寝ている大神しかいなかつた。

「やはり日本の方だったのですね。私は、北大路花火と申します。」

「花火さんって言つんだ……。よろしくね。」

同じ日本人だからか笑顔で言うダイゴに、花火も笑顔を見せた。

「うふふ、やつぱりグリシーヌに聞いた通りの方ですね。」

「グリシーヌに?」

「はい。年の割に鋭い方と聞いていますわ。」

その言葉に、ダイゴのグリシーヌに対する印象は、少なからず変化した。

グリシーヌはいつも、事ある毎に自分を威嚇するように睨みを効かせてくる。

そんな彼女が、まさか自分をそう評価していたとは思いもよらなかつた。

「ダイゴさんは、何時から巴里に?」

ふと、花火が尋ねた。

「生まれてすぐだよ。物心ついた時から、僕は巴里にいた。」

「まあ、私と同じなのですね。」

ダイゴが巴里育ちと思わなかつたのか、花火は意外そうに驚いた。

「それではダイゴさんも、留学か何かで？」

「いや…………、そんなのじゃない。」

忘れかけたあの雨の日を思い出し、ダイゴは表情を暗くした。  
すると、花火は聞いてはならない事を察して謝つた。

「あ、すみません…………。余計な事を…………。」

「いや、いいよ…………。」

花火に悪気がない事は分かつている。

ダイゴは、別の話で雰囲気を紛らわせる事にした。

「それじゃあ、花火さんも巴里育ちなの？」

「はい。家の意向で、古くから親交のあつたブルーメール家に居候させていただいてます。」

北大路家は、日本でも有名な男爵家の一つだ。

しかしその仕事柄日本を離れる事が多く、花火は幼い頃からフランスで生活していた。

その為まだ知らない故郷に思いを馳せ、日本について様々な事を学

んでいた。

そんな中、寄宿舎で出会ったのがグリシーヌだった。

「グリシーヌとは、両家の親交もあってすぐに打ち解けて、すぐに親友になりました。」

「へえ、じゃあグリシーヌとは長い付き合いなんだ。」

元々親交の深かつたブルーメールと北大路。

その両家の令嬢ならば、同様に仲良しなのは自然な事だ。それにグリシーヌが勇猛な性格なのに對し、花火は物静かな性格でぶつかり合う所がない。

恐らく衝突の少ない一人の性格も、親友になつた要因だろうと、ダイゴは納得した。

「でも、グリシーヌは私にも話さない事もあります。」

「例えば？」

「自分の誇りについてとか……。グリシーヌは、人に弱みを見せない性格ですから。」

その言葉に、ダイゴはまたも納得した。

グリシーヌは貴族としてのプライドを非常に大事にしている。  
それを揺らぐ事を決して許さず、斧を振り回して黙らせる事もあつた。

そんな彼女の事、自分の弱みを見せる以前に、弱みがあつてはならないと考えていたのもしれない。

「グリシーヌはいつも言ってましたわ。完全無欠の花婿を見つける

と。」

「完全無欠……。」

何ともグリシーヌらしい考えだと、ダイゴは思った。

「でも、そんな人つているのかな……？」

完全無欠。全てにおいて非の打ち所が存在しない人間。しかし人間である以上、何処かに必ず欠点はある。そんな中で完全無欠など、ある意味氣の長い話だ。実際の所、花火も似た考えだった。

「さあ……。彼女の理想というだけですから。実際に今日来られたリッシュ伯爵も、縁談目的だったようですし。」

「…………あの男と？」

リッシュ伯爵という名前に、ダイゴはあからさまに不快感を示した。コクリコのようにか弱い少女に平氣で暴力を振るい、大神をゴミ扱いするあの名ばかり貴族。

ダイゴの考え方からすれば、最も完全無欠とは掛け離れた人物である。

「先の一件を見る限り、私も縁談に賛成しかねます。しかし……。」

やはりリッシュ伯爵の行いを目の当たりにしていたために、花火も縁談に不服の表情を見せる。

「貴族社会には、やはり地位や身分を尊重して、軽はずみな行動が

取れません。もしかしたらグリシーヌも…………。」

確かにそうだ。

プライドが高いとはいって、グリシーヌは天下のものを見下すような事をしない。

そんな彼女がリッシュ伯爵の本性を知れば、すぐにでも斧を突き付けるだろ？

しかし、貴族社会では簡単にはいかなかつた。

貴族というのは、古くから伝わる家のしきたりや風習を重視し、地位や身分を末永く後世に伝えなければならない。

そのため、不用意な行いで先代の者が築いた栄光に泥を塗る事は貴族社会からの抹殺を意味する。

リッシュ伯爵は、ブルーメール家より下とはいって、巴里でも五本の指に入る名門貴族だ。

たとえブルーメール家といえども、そんな名門中の名門との縁談を断れば、リッシュ伯爵に恥をかかせる事になつてしまつ。それはブルーメール家の今後にも深く関わるために、強く言い出せないのが現状だった。

「…………」の、お願いね。」

そつ言いつつ、ダイゴは思ひ立つたように立ち上がった。

「ダイゴさん、どちらへ？」

「ちょっと用事が出来てね。」

花火にそつ答へ、ダイゴは部屋を後にした。

屋敷の前に広がる庭。

その隅にあるテラスに、グリシーヌの姿はあった。

「……にいたんだ。」

「…………そなたか。」

いつもと違い、明らかに無気力な返事が返つて來た。  
何かに悩み疲れているような、そんな様子だ。

「…………ダイゴ。」

背中を向けたまま、グリシーヌが語り始めた。

「鋭いそなたの事、私の言わんとしている事が分かるであろう?」

「リッシュ伯爵との縁談…………だね?」

「そうだ。…………正直な所、迷っている。」

表情は見えないが、暗い顔である事は容易に想像できる。

背中を向けるのも、その表情を見られたくないためだろうか。

「先の件、そなたが正しいと思つ。だが、ブルーメール家を危うくする訳にはいかん。……だが、それが本当に名譽ある事かと問わると、解らぬ。」

「どういふ事?」

「ブルーメール家は、今でこそ貴族を名乗つてゐるが、元々はバイキングだつたのだ。荒れ狂う海と戦い、家族を守る。そうして生き抜いた時代を思つと、今の地位や名譽を守る事が虚しくてな……。」

「

あながち驚くような話ではなかつた。

グリシースは麗しい外見と裏腹に勇猛な強さを持つ。

それがかつてのバイキング時代の先祖の名残と考えれば、納得がいく。

「結局は私も、家の一部に過ぎんのだ。」

「…………そりかなあ?」

「ここに至つ、ようやくダイゴが口を開いた。  
「地位や名譽が虚しつて分かつてゐるなら、断ればいい事じやない?」

「?

「そなた、話を聞いていたのか?私はブルーメール家の一部なのぞ?」

「そんな事言つて、本当は自分の意志を貫くのが怖いだけじゃないの?」

ダイゴのその言葉にて、グリシーヌは肩を震わせた。

そして、いつものように斧を取り、ダイゴに突き付けた。

「貴様……、もう一度言つてみるー。」の私が怖いだと？」

「だつたら地位とか名譽とか気にしないで、断ればいいじゃない。あの人完全無欠に見えるの？」

気の弱い者なら逃げ出しそうな形相のグリシーヌに、面と向かって言い返すダイゴ。

すると、グリシーヌは頭をふった。

「ええい黙れ！ 貴様のような平民に何が分かる！？」

「うん、分からぬ。」

「…………何？」

思いも寄らない言葉に、グリシーヌは一瞬怒りを忘れた。  
その彼女に、ダイゴはハッキリと告げた。

「地位とか家とか誇りとか言つて逃げるような人の気持ちなんて、分かりたくもないよ。」

「なつ…………！」

怒りのあまり固まるグリシーヌを冷ややかに見て、ダイゴは歩きだした。

「待てダイゴ……」の私を愚弄するつもりか！？」

「悔しかつたら考へて見れば？今のグリシーヌは、愚弄されて当然だと思つよ。」

平然と言つてのけ、ダイゴはテラスを立ち去つた。

「…………。」

その後ろ姿を、グリシーヌは無言で睨みつけていた。

「…………。」

テラスを離れた後、ダイゴはふと玄関前で足を止めた。  
理由は簡単。

いつものようにポケットのスパークレンズが、光り始めたからだ。  
シズーとピートンの事例を踏まえると、近くに怪人の潜む可能性が高い。

「…………隠れてないで出て来たら？」

確証はないが、ダイゴは試しにかまをかけてみた。

予想が正しければ、敵は姿形を変えてこの屋敷に来る程の周到さを持つている。

もしかしたらこんな場所では正体を現さないのかもしない。

まあダイゴにしてみれば、その方がすぐに襲われない分都合が良いのだが。

「…………やはり貴様か。」

ダイゴの言葉に答えるようにして現れたのは、何とリッシュ伯爵だった。その姿は表情こそそのままだが、こちらに向けられた殺氣は並々ならぬものがある。

「それはこつちの台詞だよ。暴力なんて、まともな人間のする事じやないもんね。」

「フツ、貴様こそよく言つ。この私が人間に何故躊躇わねばならん？」

明らかに人間という種族を下に見た物言いに、ダイゴは目の前の男があの怪人と同種である事を確信した。最も、相手も隠すつもりなどないのだろうが。

「一つ聞きたい。貴族を狙う理由は？」

「簡単な事だ。人間に上下などない。あるのは愚かという事実だけだ。」

「そんな奴らは、みんな自分の下に生きりと……？」

探るように、ダイゴが言つと、リッシュ伯爵は不敵に笑つた。

「そういう事だ。人間に味方する貴様には一生分からんだろうがな。

「

その時、屋敷の方から声が聞こえて来た。

「ダイゴー・ダイゴー・何処れますか！…？」

「どうやら今回の話はこれまでのようだな。」

タレブーの声に、リッシュ伯爵はニヤリと笑った。  
確かにここで下手に遅れでは、自分まで怪しまれてしまう。  
ダイゴは薄笑いを浮かべたリッシュ伯爵をその場に残し、屋敷に戻つて行つた。

「…………時が経つのは早いります。オオガミ、エリカ、ダイゴ、コクリコ。あなたたちの仕事も終わりります。」

四人を玄関に集め、タレブーが言つた。

「……………グリシースが大神に要求したのは、一日メイドとして働く事。  
その長いようで短い一日が、ようやく終わったのだ。」

「あなたたちがこのブルーメール家で得た技術は、末永くあなたたちの糧になるぞます。」

「（ねえダイゴさん。タレブーさんって、意外といい人でしたね。）

」

「それを生かし、これからは礼儀と気品を身につけるぞおまよ。」

「（…………やつぱり嫌な人じゃない？）」

ヒソヒソ話をする二人に気づかず、タレブーは感慨深げに一人頷いた。

「それでは四人共、よく頑張ります。元気に頑張るぞおまよ。」

翌日、大神達はグラン・マの召集を受けて作戦司令室に集まっていた。

「…………集まつたみたいだね。」

周囲を見渡し、グラン・マが言った。

今回、グリシーヌはいない。

昨日同様、リッシュ伯爵が来ているからだ。

「司令、話とは…………？」

「ああ、まずはこの写真を見とくれ。」

開口一番に尋ねる大神にそう答えると、グラン・マは机の上に写真を並べた。

それに写っていたのは、巴里でも指折りの貴族達だった。

着飾った装飾品や高貴な服装から、かなりの上流貴族と分かる。

「実は最近、上流階級の貴族が失踪する事件が相次いでね。これはその貴族達なんだよ。」

フランスの首都である巴里には、沢山の貴族がいる。  
しかし最近になって、その貴族が次々と行方をくらませていた。  
写真はざつと十数枚。

つまり、その数の貴族が行方不明になっている事になる。  
その時、写真を見ていたコクリコが何かに気付いた様子で一枚の写真を手に取った。

「イチローーーこの写真!」

「どうした、コクリコ? .....」、これは!—」

「コクリコに渡された写真を見て、大神も驚きの声を上げた。  
何故ならその写真の人物は、自分達も知る人物だつたからだ。

「こいつは昨日グリシーヌの屋敷にいた、リッシュ伯爵じゃないか!」

「そいつは妙だね。リッシュ伯爵は一週間前から行方不明になつていたはずだよ?」

大神の言葉に、グラント・マが眉をひそめた。

一週間前から行方が分からぬはずのリッシュ伯爵が、昨日グリシーヌの屋敷に現れた。

グラント・マの話が嘘でなければ、これは矛盾している。

「じゃああのリッシュ伯爵は……！」

昨日現れたリッシュ伯爵が本人である可能性は薄い。だとすれば、昨日の暴力的な態度も納得がいく。

「大神さん、もしかしたらグリシーヌさんが……！」

大神も予想した不安を、エリカが口にした。

もし大神の予想が当たつていれば、リッシュ伯爵は偽者で、尚且つ一連の貴族失踪事件に関与している可能性が高い。

だとすれば、次に危ないのは巴里屈指の名門貴族であるグリシーヌだつた。

「しかしそまだ証拠がない。ムッシュ、下手に動くんじゃないよ。」

今にもグリシーヌ邸に急行しようとした花組に、グラント・マが釘をさした。怪しいとはいえ、リッシュ伯爵が犯人である決定的な証拠が手元にない以上、軽はずみな行動はとれない。

場合によっては、ブルーメール家に悪い印象を与えてしまい、立場を悪くしてしまうからだ。

大神はわずかに考えたのち、決断した。

「…………よし、ここは俺が一人で行く。大人数より単独の方がやりやすい。」

大人数で乗り込んで騒いでは、逆にこちらが悪者扱いされてしまう。  
それに、大神には一つの考えがあった。

「よし、決まりだ。あたしらは何処に貴族が捕まっているか調べる  
から、ムツシユはグリシーヌを頼んだよ！」

「了解！」

力強い返事を返し、大神は作戦司令室を飛び出した。

「グリシーヌ！」

屋敷につくや否や、大神は中庭に駆け付けた。

そこには、驚いた様子のグリシーヌと、邪魔された様子のリッシュ  
伯爵の姿がある。

「どうした？ 屋敷内で騒ぐなど珍しい…………。」

「グリシーヌ！ 奴から離れる！ そいつは…………！」

訝しむグリシーヌに構わず、大神はリッシュ伯爵を指差した。

「私が何だ？言つてみなさい。」

自信があるのか、余裕の表情を見せるリッシュ・伯爵。大神はその表情を一点に見据え、言い放つた。

「リッシュ・伯爵！貴方に決闘を申し込む！貴方も誇りある貴族として、断れないはずだ。」

証拠はないが、リッシュ・伯爵は限りなく黒だ。

大神は証拠云々に関係なく、決闘で白黒をハッキリさせる事にした。そうすれば自尊心の固まりであるリッシュ・伯爵は断れないし、更に自分が勝てば、東洋人に負けた事でブルーメール家から縁談を断られる。

リッシュ・伯爵が決闘を受けて自分が勝たなければならぬが、大神に勝算はあつた。

「…………いいでしょ。誇りを賭けてその挑戦、受けてあげますよ。」

案の定決闘に応じたリッシュ・伯爵に笑みを見せ、大神はグリシーヌを見た。

「グリシーヌ。君は俺が絶対に守つてやるからな。」

「…………隊長…………。」

その言葉に、グリシーヌは少なからず驚いた。

以前大神に、リッシュ・伯爵と望まない縁談を相談していたが、まさか大神が断れない自分を助けに来てくれるとは、思いもしない事だ

つた。

「決闘はブルーメール家の伝統に従う。異存はないな！？」

「いいでしょう。」

大神とリッシュ・ショーブル爵の決闘の舞台は、以前グリシーヌとの決闘に使用した船のマストの上だった。

昨日と同じように足に命綱を巻き、各々武器を手にする二人。しかし、グリシーヌは昨日と全く違う何かに気付いた。

「あの抜き身の太刀のように鋭い姿勢……。間違いない、あれが隊長の真の姿か……。」

斧を使っていた前回と異なり、大神はその手に愛用の太刀を握っていた。

「随分と珍妙な武器ですね。まあ、一分で終わらせてもらいましょう！」

先に動いたのはリッシュ・ショーブル爵だった。

細身のレイピアを突きの体勢に構え、大神の心臓目掛けて突き出して来る。

その速さはグリシーヌをも越えるほどなものだつたが、大神は最小

限の動きで難無くかわして見せた。

「…………あのスピードを見切るだと…………！」

以前とはまるで動きが違う。  
もし今の大神と勝負をしようものなら、自分は瞬殺されてしまう。

大神の華麗なる太刀さばきに、グリシーヌはそう思わずに入れなかつた。

そして、それに驚いたのはグリシーヌだけではなかつた。

「む…………。私の突きを避けるとは、中々やり手のようだ。」

言いながら、更にリッシュ伯爵は攻撃を仕掛けて來た。

「これはかわせまい！」

右から左への払い。

確かに狭いマストの上では避けようがないが、大神にして見れば大した問題ではなかつた。

「これしきー！」

大神は横から来る刃を避ける事なく、真上に弾き返した。

「なつ…………！？」

「もうつたーー！」

レイピアはリッシュ伯爵の手を離れて宙を舞う。

大神はすかさず、リッシュ・ショウ伯爵に切り掛けた。

「ぐおおひ……！」

右肩を浅く斬られ、リッシュ・ショウ伯爵が片膝をつく。

それと同時に、レイピアがグリシーヌの足元に突き刺さった。

「…………これは…………！」

それを見たグリシーヌは、またも驚いた。

レイピアは根本の辺りで、真つ二つになつていていたのだ。

大神はあの一閃で、レイピアを斬っていたのだ。

「これが…………、隊長の真の力なのか…………。」

昨日とは別人のような雰囲気を漂わせる大神。  
その姿に、グリシーヌは真に完全無欠を見た。

「リッシュ・ショウ伯爵！ 貴方の負けだ！」

リッシュ・ショウ伯爵に、大神が鋭い声で叫んだ。  
すると、リッシュ・ショウ伯爵は自分が負けたという事実が信じられない様子で、ワナワナと震え始めた。

「馬鹿な…………！」の私が負けただと…………！

刹那、大神はリッシュ・ショウ伯爵の周囲に凄まじい妖気の集まりを感じ、後ろへ下がった。

すると、今まで大神のいた場所が、突然爆発を起こした。

「認めん！断じて認めんぞ！」

「ぐつ……！」

煙の奥から聞こえるリッ・シュ伯爵の声に、大神は煙を挿んだ向こう側のリッ・シュ伯爵に目をこらす。

しかし、そこにいたのはリッ・シュ伯爵ではなかつた。百獸の王、ライオンを思わせる蠶と牙。そして金色に光る獰猛な肉食獣の眼。

そこにいたのは、シゾーやピートンのように、田里の平和を齧かす怪人だつた。

「そ、そんな……！リッ・シュ伯爵が……！－！」

「貴様、やはり怪人だつたのか！－！」

刀を突き付ける大神。

すると、怪人は本性を現したように言った。

「そうだ。私の名はレオン。貴様ら人間を支配する、真に高貴なる者だ！」

「そうか、貴族達を誘拐したのはお前だな！？」

その言葉に、大神は確信した。

やはり一連の貴族失踪事件は、このレオンと名乗る怪人の仕業だつたのだ。

「覚えていろ、大神一郎とやらーーの屈辱は倍にして返してやるー！」

そう捨て台詞を吐き捨てる、レオンは煙を上げて消え失せてしまった。

「くそつ、逃げられたか…………。」

大神は急いでロープをほどき、下に降りた。  
予想通りリッシュ・ショ伯爵の正体が怪人レオンと分かつた以上、早急に  
グラン・マに報告しなければならない。  
しかし、それを止める者がいた。  
グリシーヌである。

「待て、隊長！ 一体どうこいつもりだー！？」

「…………何の事だ？」

「貴公、私が女だからと手加減をしただりつー。」

今の決闘を見る限り、自分と大神の力量の差は歴然としている。  
もし大神が今のような力を出せば、自分は一瞬でやられていた。  
そもそも大神は昨日わざわざ太刀ではなく斧を選んでいる。  
これが手加減と言わずして何と言うのか。

しかし、大神は首を横に振った。

「残念だが、俺はそんな理由で手加減はしない。」

「では、私を守るためにわざと負けたといつか！？」

「それも違う。」

「なら何故だ！答える！！」

そう叫んで、グリシーヌは大神の目の前に斧を突き付けた。だが、大神はその切つ先を眼前にして、微動だにしなかった。

「……強いな。その太刀を抜くかと思つたが。」

鞘に納められたままの太刀を見て、グリシーヌが言った。すると、大神はゆっくりと口を開いた。

「俺は自分の誇りのために相手を傷つける刀は持たない。リッシュ伯爵に決闘を申し込んだのも、君を助けるためだ。」

「あくまで護るために戦うのか…………。それが貴公の…………、サムライの誇りなのだな…………。」

思えば、大神はグリシーヌに決闘を申し込まれて受けたのであって、自分から言い出した事ではない。

それに今まで、大神は何かを守るために戦いこそすれ、自分から争いを始める事は全くなかつた。

あの決闘でグリシーヌに手加減したのも、勝つ理由がなかつたからだ。

その佇まいは、見かけばかりを大事にする輩より余程気品に溢れていると、グリシーヌは思った。

「さあグリシーヌ、シャノワールに戻つて司令に報告だ。」

「了解した！」

バステイユ牢獄。

かつてフランス革命の際に最初の戦場となつた、外界と断ち切られた世界。

その巨大な入り口に、ダイゴの姿はあつた。

その手には、淡い光を放つスパークレンズが握られている。

「やはりここか……。」

リッシュ伯爵に化けた怪人はここにいる。

それを指し示すように光るスパークレンズの光が俄かに強まつた。

「クツクツクツ……。やはり来たか。」

突如真後ろから聞こえた不敵な笑い声。

それに振り向いたダイゴの目に、一人の怪人の姿が移つた。

「しかしここまでだ。このレオンが、貴様を地獄に突き落としてやる。」

そう笑い、レオンは片手を高々と上げた。

「いですよ我がしもべ！我等に盾突く裏切り者を押し潰せ！」

すると、牢獄の近くの地面が割れ、中から一匹の怪獣が姿を現した。

全身黄土色の皮膚に、觸體のよつたな顔。

そして今までにないほどの強い闘争本能に、ダイゴは震えた。

「貴様！」とき私の出る幕はない。行け、觸體怪獣レッドキング！！！」

言ひや、レオンは煙と共に姿をくらました。

一方、レッドキングは獲物を見つけたよつて咆哮を上げる。

「ガオオオオツ！！」

地面が揺れるほど の声に我に還り、ダイゴはスパークレンズを掲げて叫んだ。

「ティガー——ツ！！」

「…………」

「…………」

暗く下水の流れるバスティーグ牢獄の地下に、巴里華撃団の姿はあった。

あれから作戦司令室に、ティガが怪獣とバスティーグ牢獄前で戦っているとの連絡が入り、大神はレオンが貴族をここに幽閉したと判断して、今回の出撃に至った。

「ここに貴族の人達が閉じ込められてるんだね……。」

「可哀相……、大神さん、早く助けてあげましょー!」

下水の流れる牢獄内は、悪臭などはないが、衛生的に悪い事は間違いない。

幽閉された貴族達が弱つていない事を祈りつつ、大神は指示を出した。

「よし、ティガが怪獣を足止めしてくれている間に、貴族を救助するぞ。」

「「ア解!」」

巴里華撃団が牢獄内に侵入した頃、ティガはレッドキングと激しい肉弾戦を繰り広げていた。

「ガオオオオオ！」

「チャツ！」

一つの巨体が激しくぶつかり合い、大地を揺るがす。しかし、腕力に限定すればレッドキングの方が上だった。

「ジユワツー？」

まるで紙屑のように放り投げられるティガ。

すると、ティガは両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「ンウウウ…………、ハツ！！」

そしてクリスタルが発光し、ティガの体が赤と銀に変わる。コンコルド広場でゲオザーグを倒した、パワータイプである。

「ガオオオオオーーー！」

闘争本能のままに襲い掛かってくるレッドキング。

しかし、パワー・タイプにチェンジしたティガは、先程のようにはいかなかつた。

「ハツ！」

レッドキングの剛腕を捕まえ、ティガはレッドキングを高々と抱えて地面にたたき付けた。

更に倒れたレッドキングの尻尾を掴み、ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばす。

「チャーッ……」

頭から再び地面に激突するレッドキング。

ティガは両手を胸のカラータイマーで重ねて真下に下ろし、ゆっくりと外回りに回転させた。パワータイプの必殺技、『テラシウム光流だ。

「ハアアア…………！」

圧縮されたエネルギーがボールになって、ティガの両手に包まれる。しかしその光のボールをレッドキングが掛けて投げつけようとした時、思わずカウンターが返ってきた。

「ガオオオオオッ！……」

何とレッドキングは、起き上ると同時に巨大な岩石をティガに向かってぶん投げたのである。

「ジュワッ！？」

その反動で光流が暴発し、ティガは後方へ吹き飛ばされる。

そこに、レッドキングは更に巨大な岩石でラッシュを掛けてきた。

「ガオオオオオオ！」

「チャッ…………！……」

両手で何とか岩石を押し返そうとするティガだが、いかんせんレッドキングは力が強く、パワータイプでもひけをとってしまう。

「（それなら……………！）」

形成不利と見たティガのクリスタルが輝きを放つた。

「ンウウウ…………、ハツ！」

それと同時に、ティガの体が赤と紫と銀に戻る。パワー、スピード、バイタルのバランスがとれた基本形態、マルチタイプである。

そして、ティガはマルチタイプに戻ると同時に胸のカラータイマーを発光させた。

「チャツ！！」

タイマー・フラッシュ……カラータイマーを発光させて敵を威嚇する、マルチタイプの技の一つだ。

「ガオオツ！？」

そのまばゆい閃光に、レッドキングが一瞬怯む。

その隙にティガはバック転で距離を置き、両手を胸の前に突き出した。そして両手をそのまま左右に広げると、その軌道に沿って光の筋が現れる。

ゼペリオン光線……膨大な光エネルギーを集約し、L字に組んだ腕から放つ、マルチタイプの必殺技だ。

「ハツ！！」

白い光線が、一直線にレッドキングの胸を直撃した。

「ガオオオオオオ…………！」

レッドキングは最期の咆哮と共に仰向けに倒れ、大爆発した。

「よし……、後はレオンだ……。」

既に牢獄内部から剣戟や銃声が聞こえている。  
おそらく例の巴里華撃団だろう。

ティガは両腕を胸の前で合わせ、エネルギーを集中した。

「ンウウウ…………！」

すると、ティガの体が無数の光の粒に変わり、牢獄内部へとテレポーテーションしていった。

その頃、巴里華撃団は牢獄内に徘徊していたローンを全滅させ、貴族達が捕われているであろう牢獄内部へ移動を開始していた。  
しかし、グリシーヌの青い光武Fだけは、入り口で立ち止まっていた。  
万一本レオンが先に戻つて来れば、自分達まで閉じ込められる可能性

があるからだ。

そこで大神は、メンバーの中で取り分け戦闘力の高いグリシーヌに見張りを頼んだのだ。

「…………やはり下水など、躊躇いもしないか。」

大神達の姿が見えなくなり、グリシーヌはふと呟いた。

この牢獄の下水道は深く、光武Fでも半身が沈んでしまう。そうなると、蒸気を排出する機関部や、下手をするとコックピットにまで下水が流れ込む事になる。

衛生的に良くないために自分は思わず躊躇してしまったが、大神はそれがどうしたと言わんばかりに突き進む。

正義のためなら、自分の身体など一の次と言つ事だろ？

グリシーヌは大神の侍気質に感心すると同時に、一瞬でも下水に入る事を躊躇した自分を恥じた。

「貴族達を救おうと決意しながら、躊躇いを感じるとは…………。」

その時だった。

グリシーヌは背後から、強烈な殺氣を感じ取った。

「な、何だ！？」

振り返つた一瞬、グリシーヌは左からの衝撃を受け、壁にたたき付けられた。

その勢いに、悲鳴も出ない。

すると、グリシーヌの耳に殺氣の主の声が聞こえてきた。

「フン、たわいのない。飛んで火に入る夏の虫とはこの事だな。」

それは、巨大な獅子の形をした蒸気獸に乗ったレオンだった。ティガをレッドキングに戦わせ、自分は巴里華撃団を迎撃つために牢獄内に戻つて来たのだ。

「さあ、貴族共々閉じ込めてくれる。」

言つや、レオンは右手を翳して魔力を集中した。すると、大神達が入つて行つた下水道の門が下がり始めたではないか。

「（まさか、下水道の門に封印を…………！）」

そんな事をさせる訳にはいかない。

気がつけばグリシーヌは、不意打ちで傷付いた身体のまま下水道に飛び込み、下がりかけた鉄格子の門を両手で持ち上げていた。

「ほう、まだ立ち上がる力があつたか。」

仕留めたと思った光武Fの抵抗に、レオンが意外そうな顔をした。

「だが、その体では長くももつまい。」

確かにレオンの言つ通りだつた。

先程左の脇腹に受けた一撃は決して軽いものではなく、加えて一トントになる鉄の塊を支えるのは無謀な行為。

おそらく今の状態では10分ももたない、だらう。

しかし、グリシーヌは苦しい表情を我慢して、弱みを見せなかつた。

「フン、貴族を名乗つても所詮は獸だな。この程度で勝つたつもりか!?」

すると、レオンは余裕の表情から一転し、怒りを見せた。

「小賢しいーならばこれでどうだーー。」

しつらつてレオンは、身動きの取れないグリシーヌに激しい攻撃を浴びせ始めた。

「へー、…………へー、」

「クツクツクツ、どうした? しつかりせねば門が閉まるぞ?」

たちまち苦悶の表情を見せるグリシーヌを樂しむよひよひ、レオンは一層攻撃を激しくした。

反撃の一つでも出来ればいいが、両手で門を押さえこんじの状況ではそれも不可能だ。

「どうだ。貴族のお前には薄汚れた下水は耐えられまい。」

勝ち誇った様子でレオンが言った。

しかし、グリシーヌは決してそれを認めなかつた。

「下水がどうした。そんな事で仲間を見捨てる私ではないーあの男が、それを教えてくれたのだ。」

自分を傷つける事になつても、自らの意志を貫く。

ダイゴが指し示し、大神が身を以つて教えてくれた事だ。

その仲間を助けるために下水に汚れる事など、何を躊躇つといつのか。

「強がりはよせ。命じいをすれば、助けてやらん事もないぞ?」

「貴様」ときに屈する私ではない。……吠えているー。」

レオンの言葉を軽く突っぱねるグリシーヌ。すると、レオンの殺気が俄かに高まつた。

「そりか……、ならば望み通り死ねー！」

炎が宿つた拳が眼前に迫る。

しかし、その一撃がグリシーヌに届く事はなかつた。何故なら、二人の間に割つて入つた巨大な影が、その一撃を受け止めたからである。

「な、何！？」

「…………ティガ…………。」

その姿に、レオンもグリシーヌも驚きを隠せなかつた。グリシーヌを庇うようにレオンの攻撃を押えていたのは、これまで一度自分達を助けてくれた光の巨人、ウルトラマンティガだつたからだ。

「ハツー！」

ティガは押えていたレオンの拳を振り払い、その腹部に蹴りこんだ。

「グオツー！」

その反撃で、レオンの蒸気獣は大きく後ろに倒れる。

しかし、これで状況が好転したとは言い難い。

何故なら、今の一撃と同時にティガのカラータイマーが赤く点滅を始めたからだ。

何せレッドキングとの激戦の直後にテレビ・テレショーンを使ったのだ。

エネルギーの消費は半端なものではない。

「チャツ！」

しかし、ティガは真後ろの鉄格子にハンドスラッシュを放ち、鉄格子そのものを破壊した。

その姿にグリシーヌは、大神に見たものと同じ強さをティガに見た。

「ティガ……、そなたもか……。」

おそらくティガは、グリシーヌを助けるために自分の身体など一の次なのだろう。

その姿に、グリシーヌは胸が熱くなつた。

「ティガ……、この私を守ってくれるのか……？」

すると、ティガはグリシーヌに振り向き、しつかりと頷いた。

「小賢しい！弱つた貴様など、この蒸気獣マルシユで捻り潰していくれる！！！」

「チャツ！！」

再び襲い掛かるマルシユに、ティガは真正面からぶつかつた。激しい衝撃が、牢獄内を揺るがす。

「ティガ！」

グリシーヌは援護しようとしたが、レオンに痛め付けられたダメージからか、光武Fは動いてくれない。

その間にも、ティガとレオンは激しい格闘戦を展開していた。

「ハッ！」

ティガが渾身の右ストレートを打ち込む。

しかし、それはマルシュの左手に軽く止められてしまった。

「どうした、この程度で私と張り合いつもりか？」

「チャツ……！」

ティガの基本形態であるマルチタイプは、パワー、スピード、バительのバランスに優れた隙のない点が長所だ。

しかしそれに伴い、差し当たって抜きん出た特徴がなく、レオンのように力が強い相手には、押し負けてしまう弱点があつた。本来こういう相手にはパワータイプにチェンジするべきなのだが、今度ばかりはそうはいかない。

パワータイプはマルチタイプ以上に、エネルギーを激しく消費してしまうからだ。

ただでさえカラータイマーが点滅しているこの状況でチェンジすれば、たちまちエネルギーが尽きてしまう。

そうなれば、自分でなくグリシーヌもやられてしまうだらう。しかし、ティガの戦いも長くは続かなかつた。

「悪いが貴様とはこれ以上遊んでおれん。そろそろ終わらせてもら

「うわ。」

そう言つて、マルシユがティガを殴り飛ばした。

「ジユワツー？」

その勢いで後ろに下がるティガ。

そこには、レオンが必殺技を放つて來た。

「血に飢えし干の獣よ、我に従え！－ロイヤルラージュ－！」

ライオンを象つた炎がティガに襲い掛かる。  
もはやこれまでか…………。

しかし、またしてもそれを食い止めるものがいた。  
巴里華撃団である。

「グリシーヌ、ティガ、大丈夫か！？」

マルシユの攻撃を一刀で防ぎながら、大神が叫ぶ。

「ふつ、遅いぞ隊長。」

エリカに治療してもらいながら、グリシーヌが言った。  
その隣には、「クリ」の姿もある。

大神達は貴族達を無事に救出し、間一髪で戻つて來たのだ。

「おのれ巴里華撃団ー！」つなればまとめて始末してくれるわー！」

計画を台なしにされ、怒りに震えるレオン。  
すると、グリシーヌがすかさず言い返した。

「ほぞけ！正々堂々と戦う事の出来ぬ輩に負ける巴里華撃団ではないわ！」

言つや、グリシーヌは斧を構えてマルシュに切り込んだ。  
怒りで周りが見えなくなつたからか、レオンは一瞬反応が遅れ、グリシーヌの一撃を真正面から受けてしまう。

「グオツ！？」

斧を叩き込まれたマルシュの左腕が宙を舞い、石床に転がつた。  
そこに、グリシーヌの靈力を集中した更なる一撃が見舞われた。

「大いなる荒波の力を我が手に！ グロース・ヴァーグ！！」

凄まじい高波がマルシュを包み、真後ろの壁に勢い良くてたたき付けて。

先程までボロボロだつた者の攻撃とは思えない程に強烈な一撃。  
その一撃が致命傷になつたのか、マルシュは全身から煙を上げ始める。

「ティガ、今だ！」

グリシーヌの言葉に頷き、ティガは一連の動作で腕をL字に組み、マルシュ目掛けてゼペリオン光線を撃ち込んだ。

「ば、馬鹿な！？私は認めんぞ！私こそ…………、私こそ真の貴族なのだああ…………！」

最期まで己を貴族と信じ続け、マルシュは轟音と共に大爆発した。

「…………フッ…………。」

「どうした、グリシーヌ？」

戦いを終えて微笑むグリシーヌに、大神が尋ねた。  
すると、グリシーヌは何処か吹つ切れた様子で答えた。

「隊長。貴公のサムライの誇りといつもの、学ぶ所が多い。これからもよろしく頼むぞ?」

「…………ああ、よろしくなー。」

以前の彼女ならまず口にしなかつただろう言葉。

グリシーヌが心を開いてくれた事に感謝し、大神は笑顔で答えた。  
すると、グリシーヌは更に意外な言葉を口にした。

「では、いつものをやるとしよう。みな、遅れるでないぞー。」

何と、前回まで嫌がっていた決めポーズを自分からやると言い出したのだ。

その変わり様に、大神を含めて三人は互いに顔を見合わせる。

「グリシーヌ、どうしたのかな?」

「何かいい事でもあつたんじゃないですか?」

「まあいいじゃないか。それより、俺達もやるぞ?」

「勝利のポーズ、決め！」

次の日、ダイゴの婆は近くの公園にあった。何でもまた大神がみんなで遊ぼうと言い出したらしく、起きるや否やエリカに連れ出されたのだ。

「あ、イチロー！ エリカが来たよ～！」

最初に気付いたコクリコが、二人に手を振った。手に羽子板を持っている事から、羽つきをしていたと分かる。

「やあ、エリカくん。ダイゴも来ててくれたのか。」

「はい！ 大人数の方が楽しいですから！」

「ハハハ……。」

完全にペースに呑まれ、力無く笑うダイゴ。すると、グリシーヌが声をかけて来た。

「ちょうど良い。ダイゴ、私と勝負だ。」

見ると、「ククリ」と羽つきをしていたのか、顔に墨が塗られている。

「負ければ奴と同じく、またメイドを手伝つてもいいんだ？」

「え……？」

「グ、グリシーヌ……。」

意地悪そうに笑うグリシーヌに異を唱えようとする大神。すると、グリシーヌは突然真顔に戻つて言つた。

「…………〔冗談だ。」

その一言に、またも四人は固まつた。  
まさかあのグリシーヌが「冗談を口にするとは、思いもしなかつたらだ。

「本当にどうしちゃったのかな、グリシーヌ。」

「今までと全然違いますよね？」

「よかつたじゃないか。前より明るくなつたし。」後ろで三人がそう言つている事にも気付かず、グリシーヌはダイゴに羽子板を突き付ける。

「その顔を真っ黒に塗り潰してくれるー勝負だー！」

「やれやれ…………。」

ぼやきつつも羽子板を構えるダイゴ。

この勝負の行方がどうなったかは彼らしか知らないが、ただ一つ言えるのは勝負の後、二人とも真っ黒な顔で笑っていたという事であった。

## サムライの驕り（後書き）

『次回予告』

窃盗、傷害、強盗……。

課された懲役は毎里最長の1000年。

そのアタシに、平和のために戦えだ？

次回、サクラ大戦3。

『闇よりの使者』

愛の御旗のもとで……

ハラワタまで、焼き尽くしてやる……！

ゲームでこう第4話。

ロベリアって今までこなじヒロイック像でしたよね。

あのラストがとにかく衝撃だった。

## 闇よりの使者

それは草木の眠る真夜中の事だった。

「…………いい月だ…………。」

屋根の上に立つ一つの影が、徐に弦いた。  
夜空に浮かぶ満月が、その姿を怪しく照らす。

「……」  
「……」

影はそう弦き、眼下の建物を見る。

そして次の瞬間、何もない掌に炎を生み出した。  
揺らめく炎が、影の顔を悍ましく照らし出す。  
影はその炎を、屋敷日掛けて投げつけた。  
刹那、屋敷の一角からたちまちにして火の手が上がる。

「フフフ…………、楽しいねえ…………。」

その様子を満足げに眺めつつ、影は更に大きな炎を生み出し、屋敷  
に放つ。

「アーッハッハッハ…………！！」

全てを燃やし尽くす様に笑う影。  
すると、やけに中からけたたましいサイレンの音が聞こえて来た。

「何だ、もう感づきやがったのか？警察も暇なこって。」

お預けを喰らつたような口調で吐き捨て、影はその場を立ち去つとした。

しかしその時、田の前に別の気配を感じて立ち止まつた。

「…………誰だ？」

殺氣を漲らせた声で威嚇する。

自分は一人のため、仲間などとこうのは有り得ない。  
こんな夜更けに屋根の上に立つてるのは、大方同業者か裏の人間だ。

それを熟知している影は、油断なく身構える。  
すると、ややあつてむつ一つの影が答えた。

「…………相手より先に、自分から名乗らない？」

「悪いがこいつちはそんな常識を重んじる氣はない。早く答えな。」

予想より若い子供のような声に驚きつつも、先程よりも殺氣を込めて迫つた。

既にサイレンの音はすぐ近くまで来ている。

早くここを離れなくては、警察に見つかるかも知れない。  
沸き上がる焦燥感を抑えて睨みつける影だが、相手も素直には答えなかつた。

「それじゃこいつも答えられないよ。」

「アンタ、消し炭にされたいのか？」

言つや、影は痺れを切らして炎をちらつかせた。

炎は影の殺意を代弁するかのように、激しく燃える。

しかし、子供はそれを笑つて返した。

「名前も教えてくれない人には遠慮したいなあ……。」

「だったら覚えておきな。」の町里一番の大悪党、ロベリア・カリーニをなー！」

そう叫び、ロベリアと名乗った影が炎を放とうとする。だがその時、ロベリアの首筋を鋭い激痛が走った。

「うぐっ…………！？」

激痛と共に全身を痺れが駆け巡り、ロベリアはそのまま崩れ落ちた。

「…………何だ、先にやつちやつたんだ。」

倒れたロベリアの奥に立つ三つ目の影は、子供はやれやれとこう口調で呟いた。

三つ目の影は無言のまま、血のように赤い二つの目を光らせた。

「まあここや、早く行こうよ。五円戻くなつてきたし。」

そう言って子供がその姿を消すと、赤い二つの目もまた見えなくなる。

その直後、屋根一体を無数のサーチライトが照らし出した。そこには、アシンメトリーのポートを身に纏つた一人の若い女性が、首筋に傷を残して倒れていた。

『ロベリア・カルリー』、遂に逮捕。』

その見出しで始まつた記事は、新聞の一面を完全に占領していた。

「……昨夜未明、レイモン氏の邸宅で火事が発生。巴里市警は放火の犯人としてロベリア・カルリーを逮捕。」

ゆっくりと記事を読み上げたのち、大神は奥の席に座るグラン・マに尋ねた。

「司令、この記事は……？」

「今朝の朝刊だよ。巴里華撃団の戦力向上には、うつてつけだらう？」

この日、大神以下三人の隊員は作戦司令室に顔を揃えていた。グランマの提案で、新隊員について話し合うためだ。

今現在の巴里華撃団の戦績は三戦全勝。

ティガの助力もあって、白星をあげ続けている。

しかし裏を返せば、巴里華撃団が単独で敵を撃滅出来た例は存在しない。

そのため、次の戦いにティガがなくして勝てるかと問われると、大神は自信がなかつた。

怪人や蒸気獣は大した問題ではない。

しかし奴らの従える怪獣は強力で、ティガなしで勝てる可能性は、

少なくとも今の自分達にはなかつた。

そこで新隊員を加えて戦力向上を計る訳だが、集まつて早々グラン・マは大神にこの朝刊を渡したのだ。

「司令、この記事と新隊員に何の関係が……？」

「何言つてんだい、ムツシユ。そこに名前が書いてあるじゃないか。

」

意図が分からず尋ねる大神に、グラン・マはさも当然の如く言つ。すると、大神はグラン・マの考えを理解すると同時に驚愕の表情を見せた。

「まさか……、」このロベリア・カルリーーを隊員にするんですか！？」

正義を貫く巴里華撃団に犯罪者を入れるなど、聞いた事がない。しかし、グラン・マはあつさり頷いた。

「そりゃ。ロベリアはかなり腕の立つ靈力の持ち主らしいからね。加わってくれれば戦力は著しく上がるよ。」

「でも、悪者が簡単にボク達に協力してくれるのかな？」

「クリゴが的確な意見を述べた。

相手は巴里の平和を脅かす悪党である。

そんな人間に平和のために協力を求めた所で、断られるのがオチだ。しかしグラン・マは、主張を曲げなかつた。

「簡単な事さ。何らかの条件をつけて交渉するんだよ。相手は懲役1000になる悪党だからね。飛び付いてくると思うよ？」

「1000年！？長生きな人ですね～！」

あからさまに驚くエリカ。

ロベリアは巴里で最も最悪と言われた大悪党だ。

窃盗、傷害、強盗……。

その数え切れない程の罪状を並べると、懲役は途方もないものだった。

すると、ここでグリシーヌが反論した。

「私は反対だ。このような極悪人を仲間にするなど、巴里華撃団の名折れではないか。」

「俺もグリシーヌの意見に賛成です。改心させるならともかく、取引では信用できません。」

相手は悪党だ。当然正義感もなければ、協調性もない。  
いつ裏切られるやも知れぬ人物を仲間に加えるなど、正気の沙汰とは思えなかつた。

が、しかし。ここでエリカが意外な事を口にした。

「だつたら大神さん、今からロベリアさんを正義に目覚めさせればいいんじゃないですか？」

「え？いや、でもエリカくん……。」

「大丈夫です！私がロベリアさんを正しい道へ導いて見せます！」

大神の言葉を無視して、一人意氣込むエリカ。

どうやら今の会話を聞いて、ロベリアに人としての道を説き伏せる

使命感に駆られてしまつたらしい。

しかし大神は、素直には喜べなかつた。

改心させるというエリカの決意は素晴らしいのだが、ドジなエリカの事、また何か失敗をやらかす可能性は限りなく100%に近い。そんな事になれば、どんな被害を被るか想像も出来なかつた。

「決まりだね。ロベリアは今、サンテ刑務所に服役中だよ。」

それを知つてか知らずか、グラン・マはエリカの申し出に便乗して決定を下してしまつた。

こうなつては仕方がない。

大神はエリカが大きな失敗をしないように、祈る事しか出来なかつた。

サンテ刑務所は、巴里郊外に位置する刑務所の一つだ。中では多くの囚人が集まり、出所の時を待つている。ロベリアは、その一番奥に位置する特別牢獄に収監されていた。

「ここにロベリアが……。」

先が暗闇に包まれた螺旋階段を、ライトの明かりを頼りに下りていく大神達。

そこは、完全に外界と遮断された、奈落の底にも見えた。

「……。」

最下層にて、大神は奥に気配を感じてライトを向けた。

「あれが……ロベリア？」

薄汚れた囚人服を着せられ、足は鎖で壁に固定されている。恐らくは目的の人物と見ていいだろう。

「……あ、怪我をしますよ？」

ふと、エリカがロベリアの首筋を指差した。

そこには、何か鋭いもので突き刺されたような刺し傷がある。多分逮捕のどさくさでついたのだろう。

ろくな手当でもされなかつたらしく、血が滲んで僅かに腫れていた。

「悪人だけど、可哀相だね……。」

「確かに……。」

同情を見せるコクリコに、グリシースが同意する。

その時、ロベリアの目が四人を睨みつけた。

刹那、何処からともなく炎が現れ、一直線に襲い掛かつてきた。

「なつ……！」

「危ない！！」

咄嗟に前に出たエリカが、靈力のシールドで炎を止める。やがて炎は、数秒四人に牙を剥きつづけて消え去った。

「…………君が、ロベリア・カルリー二だな？」

炎が収まつた事を確認して、大神はロベリアに声をかけた。

「…………。」

「单刀直入に言う。ロベリア、俺達の仲間になつてほしい。」

沈黙を保つロベリアに、大神は单刀直入に申し出た。すると、ロベリアは沈黙から一転して苦しみ出した。

「うう…………ううう…………！」

「大変！ロベリアさん、大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄るエリカ。

しかしその瞬間、苦しみに耐えるばずのロベリアの顔が笑つたのを、大神は見逃さなかつた。

「駄目だ！行くな、エリカくん！！」

ロベリアの狙いに気付いた大神が叫ぶ。が、それより早くロベリアが動いた。

「動くな！動いたらこの女を殺すよ？」 いつの間にか手錠を外した

口ベリアの腕がエリカの首を捕まえ、フォークが突き付けられる。やはり大神の読み通り、口ベリアは演技でエリカをおびき寄せたのだ。

「待て口ベリア！俺達の仲間になれ！」

「仲間だと？」

「そうだ！ そうすれば君は自由になれる……！」

「…………悪いがノンだ。アタシはアタシ自身のためにしか動かない。」

大神の予想通り、口ベリアは聞く耳を持たない。すると、ここでエリカが動いた。

「大神さん、ここは私に任せて下さい！」

「H、エリカくん！？」

こんな人質にされて命まで危うい状況だと呟くのに、一体何を言うのか。

しかしこの後、大神達三人はエリカが文字通り奇跡を起こす瞬間を、目の当たりにする事になる。

「口ベリアさん、貴女は本当は悪い人じやないはずです！」

「馬鹿言つな！アタシは巴里の悪魔だ。その気になりや、お前を殺す事も出来るんだぞ！」

「大丈夫、貴女の罪は私が許します。」

「別にお前に許して貰わなくていい！」

「神は申されました。右の頬を叩かれたら左の頬を差し出せと。」

「いい加減にしろー。それ以上喋つたら心臓ブチ抜くぞー。」

「だから私も、左の心臓を刺されたら右の心臓を差し出します。」

「お前アタシをナメてるな！？心臓は左にしかないだろ？がーー！」

「そうすれば、きっと貴女も真人間になれるはずです。」

「心臓と真人間に何の関係があるー！」

「あ、それと話は変わりますけど…………。」

「こら、勝手に変えるなー！」

「ロベリアさんの何処が真人間かと言いますとね…………。」

「変わつてねえじゃねえかーー！」

「す、凄い…………。ロベリアがエリカくんのペースに巻き込まれている。」

先程までの緊迫した状況から一転、奈落の底はエリカによつて漫才

劇場になってしまった。

ロベリアは予測不能のエリカのボケに突っ込むあまり、完全に周りが見えなくなっている。

「よし！「クリコ、グリシーヌ、今之内にロベリアを取り押さえろ！」

「任せろ！」

「分かった！」

大神の指示で、三人は一斉にロベリアに飛び掛かった。

「し、しまった……！！」

エリカを人質に脱獄を試みた巴里の悪魔は、何とも情けない形でお繩についた。

「…………よく分かった。ロベリア、君に会つ事は二度とないだろ？」

「

「貴様にはその格好がお似合いだ。」

「

再び手錠と鎖で拘束されたロベリアに、大神とグリシーヌが鋭く言い放つ。

所詮悪党と正義は裏表。

この現状が何よりの証拠だ。

ロベリアを加える事は不可能であると分かつた以上、ここには用はない。

「あ、ちょっと待つて下さい。」

三人が牢獄を後にしようと背を向けた時、エリカが再びロベリアの方に駆け寄った。

そして、ロベリアの首筋に手を翳し、怪我の治療を始めたのだ。

「お前…………！」

驚きの表情でエリカを見るロベリア。

その顔が、ふと大神の目に止まった。

「あれ…………、さつきと違つよつな…………。」

最初に睨みつけて来た時のロベリアの表情は、刃物のように鋭く冷たい印象を受けた。

しかし今エリカを見るロベリアには、その印象がない。悪人特有の暗い感じが、彼女からは感じなかつたのだ。

「はい、これで大丈夫です。」

「そんな奴、放つておけばいいのに。」

先程の騒ぎの心配からか、「クリ」が悪態をつくる。ロベリアの怪我は、エリカの治癒能力のおかげで完治していた。

「エリカ、あまり不用意な事はするな。」

「はーい。や、行きましょうか。」

本当に分かったのか怪しげ返事で戻つて来るエリカ。その様子を、ロベリアは無言で見つめていた。

「」苦労さん、ムッシュ。」

牢獄から出て来た四人を、グラン・マが出迎えた。「で、どうだつた？あつちの反応は。」

あつちとは言ひ間でもなくロベリアの事だろう。その問い合わせ最初に答えたのはグリシースだつた。

「やはり悪党に過ぎん。話すだけ時間の無駄だ。」

「ボクもやだよ。あんな奴を仲間にするの。」

グリシーヌに便乗して意見する「クリ」。すると、ここでエリカが反論した。

「そんな事ありません。ロベリアさんだつて、本当は悪い人じゃないはずです。」

「エリカ、先程の事を忘れたのか？そなたこそ命が危うかつたのだぞ！」

呆れた様子でグリシーヌが怒鳴る。しかし、大神は考える様子を見せて言つた。

「俺は……、出来ると思ひます。」

「隊長！貴公まで何を言つのだ。」

先程までロベリアの参入に反対していた大神の意外な一言に、グリシーヌが驚きを見せる。

「エリカくんに怪我を治療された時のロベリアの表情は、犯罪者特有的の冷たさや暗さを感じなかつた。あれがもし彼女の本当の姿なら……。」

「やつぱり！大神さんも分かつてくれたんですね！」

一転してロベリア参入に賛成した大神に、エリカが感激する。それと対照的に、「クリ」やグリシーヌは不快感を露にした。

「イチロー、あんな悪い奴を仲間にするの？」

「正氣か！？」

「まだ結論を出すのは早い。もつ少しロベリアを観察してみるべきかと。」

ロベリアを隊員に迎えるかは隊長である大神に絶対的権限がある。まだ彼女の参入を認めた訳ではないが、今の時点でその選択肢を切り捨てるのは、些か拙速感があった。

先程暗がりの中で放った炎の威力はかなりのもので恐怖すら感じたが、仲間になればこれ程心強いものはない。

巴里華撃団の今後を考えるなら、ロベリアは是非加わってほしい人材だった。

「なるほどね。ま、相手が相手だし一筋縄じゃ行かないよ。アタシもムツシユと同意見だよ。」

そう言つた後、グララン・マは思い付いたように続けた。

「それならムツシユ。アンタ、ここにしばらく世話になつたらどうだい？」

「いいつー？俺が刑務所ですかー？」

突然の宣言に驚く大神。

つい先月、グリシーヌ邸のメイドをさせられたばかりだというのに、冗談ではない。

すると、グララン・マはさも当然の如く言つた。

「ロベリアを観察するんだろ？だつたら四六時中同じ建物がいいじやないか。」

「そ、そんな……。」

大神は今になつて自分の言葉を後悔したが、あとの祭である。  
かくして巴里華撃団隊長大神一郎は、めでたくサンテ刑務所に収監  
される事となつた。

巴里には沢山の芸術がある。

それこそ世界にその名を知らしめた巨匠の作品がいくつも眠る巴里  
の美術館は、芸術の宝庫だ。

その一角に、不穏な影が現れた。

「……随分夜が静かになつたわ。」

高い声色から、女性と推察できる。

胸元から大きく露出した服を身に纏う妖しい魅力を携えた女性。

その後ろに、赤い二つの目が光つた。

「ロベリアとかいう小悪党が捕まつたからね。流石はあたしのペッ  
トだわ。」

そう言って、女性は赤い二つ目を褒める。

「フフフ……。芸術の都と呼ばれた巴里の芸術、全部ズタズタにしたら、人間共はどんな顔するかしらね？」

そう言って、女性は目の前にある絵画に爪を立て、真っ二つに引き裂いた。

「…………しても、人間の芸術センスは酷いわね。壊し甲斐がないわ。」

無残に引き裂かれた絵画を前に、女性が呟いた。

人間と口にしている辺りから、やはり怪人の一人と推測できる。

「…………そうだ。もつと有名な奴を引き裂くのよ。巴里の誰もが知るアーヴィングを、このナーデルがね。」

ナーデルと名乗った女性が、残忍な笑みを浮かべた。すると、それに合わせて赤い二つ目も輝きを増した。

「フフフ……、哀れな裏切り者。あたしが芸術にしてあげるわ。」

「……刑務所？」

レノ神父の口にした一言に、ダイゴは思わずマヌケな声を出してしまった。

今朝から教会にエリカの姿がない事が気になつてレノ神父に尋ねた所、神父はこう返したのだ。

「はい。今朝から一人の友人と連れ立つてサンテ刑務所の方へ。何故か張り切っていたので、失敗しなければ良いのですが……。」

その言葉に、ダイゴは思わず苦笑いを浮かべた。

エリカのドジはどういう訳か、張り切っている時に限つてよく発生する。

そのジンクスが働けば、エリカは刑務所で少なくとも一度は何かしらの失敗をするだろ？

小さいミス位ならいいのだが、下手をすれば囚人を脱走させてしまつたり、不用意に近付いて人質にされたりするかもしねり。

「…………ですからダイゴさん…………。」

レノ神父もダイゴと同じ事を考えていたらしく、申し訳なさそうに言った。

「でもいいの？僕まで抜けて…………。」

「それなら大丈夫です。今日から新しくボランティアの方が見えますから。」

そう言った時、タイミング良くその人物が姿を見せた。

「お待たせしました、レノ神父。」

そう言つて教会の入口に立つていたのは、ダイゴと同じく一〇〇歳の少年だった。

白い肌と金髪が特徴的な美少年で、そこら辺のパリジョンヌなら悩殺されそうな笑みを浮かべている。

「ああ、ピエールさん。よく来て下さいました。」

レノ神父が笑顔で迎えると、ピエールと呼ばれた少年は、こちらに歩み寄つて来た。

「ダイゴさん。こちらが今日からボランティアに加わってくれる事になつたピエールさんです。」

「よ、よろしく……。」

人とは違つ神祕的な魅力を持つピエールに驚きつつ手を差し出すダイゴ。

すると、ピエールは笑いながらダイゴの手を握つた。

「ボンジュール、君がダイゴか。ピエール・タバルニエだよ、よろしく。」

エリカとはまた違つた笑顔。

それには、エリカさんを頼みます。

「ダイゴさん、エリカさんを頼みます。」

「うん、分かった。ピエール、またね。」

そう言って、ダイゴは急ぎ足でサンテ刑務所へと向かって行った。ピエールという新しい友人が出来た事に喜びながら。

「…………。」

目的地のサンテ刑務所に着くや、ダイゴは固まつた。  
無理もない。

けたたましいサイレンの中を、沢山の警官達が走り回っているのだから。

「エリカさん…………。」

まさかもう何かやらかしたのではなかろうか。  
そんな不安を抱きながら、ダイゴは刑務所全体が混乱しているのをいい事に刑務所内に入り込んだ。

「ふえ～ん！助けて下さあ～い！！」

刑務所内に入るや否や、エリカの声が耳に入った。

「エリカさん！？」

慌てて牢獄の奥に走るダイゴ。

しかしその瞬間、ダイゴは別の意味で驚く事になる。

「エリカさん！大丈夫…………つて、ええつ！？」

てっきり脱走した囚人に人質にされたと思っていたダイゴは、目の前の状況は全く違つて驚いた。

「助けてえ～！…」

泣きながらこっちに走つて来るエリカ。

しかしそれを追い掛けているのは、何と警棒を持つた警官だった。それもそのはず。

何故ならエリカの手には、十字架を摸したマシンガンが握られていたからだ。

「待ちなさい！凶器準備罪だぞ！？」

「そんなん！私何もやってないのにい～！！！」

マシンガンを持つて刑務所に入れば怪しまれるのは当たり前だ。ダイゴはとりあえずエリカが無事だった事に胸を撫で下ろして、事態の收拾を行つた。

「待つて。彼女は脱走犯とかじゃないよ。」

「ダイゴさん！」

助けに来てくれた事が嬉しかったのか、エリカは両手に涙を溜めてダイゴの背中に隠れた。

「本當か？じゃあそのマシンガンは…………。」

「護身用だよ。囚人に襲われるかもしれないでしょ？」

「そうです！私、グラン・マの使いで来ただけです！」

「グラン・マからのーーこれは失礼いたしました！」

ダイゴと全然話が噛み合つてないが、とりあえずグラン・マの名前が上がつた事で誤解が解けたらしく、警官は頭を下げて走つて行つた。

「ありがとうございます、ダイゴさん。助けに来てくれたんですね。」

「うふ。まさかこうこう形になるとは思わなかつたけど。」

まさかエリカがマシンガンを携帯しているとは思わず、意外そぞうに

「マシンガンを見るダイゴ。

すると、エリカが辺りを見渡して尋ねた。

「あ、そうだ！ダイゴさん、ロベリアさん見ませんでした？」

「ロベリア？誰それ？」

初めて耳にする名前にダイゴは首を傾げる。すると、エリカはロベリアについて簡単に説明した。

「ロベリアさんは、昨日逮捕された大泥棒さんなんです。」

「ど、泥棒…………？」

「はい！でも本当はいい人なんです！そのロベリアさんが逃げ出しちゃつて…………。」

あまりよく分からぬ説明だが、とりあえずこの刑務所に収監された人物と分かる。

何のためかは知らないが、とりあえずはそのロベリアという人物に用があるのだろう。

「それにしても、何でまた刑務所なんか…………。」

囚人に教えを説きに来た訳でもないのに、何故こんな場所に来たのか。

すると、エリカは驚いた表情で答えた。

「ダイゴさん、知らないんですか？大神さんが昨日からここで厄介になってるんですよ。」

「……、ハア！？」

ダイゴはまたしてもマヌケな声を上げてしまった。  
先日のメイドから一転して囚人になるとは、一体彼に何があつたといつか。

ダイゴは改めて、大神という人物が分からなくなつた。

「それじゃ、私ロベリアさんを探して来ますね！」

「あ、ちょっとエリカさん！」

マシンガンもしまわずに走り出すエリカを、ダイゴは慌てて追い掛けた。

その頃、大神の姿はロベリアが収監されていた特別牢獄にあつた。  
昨日と同様に暗い闇を覆われた奈落の底。  
しかし、そこにロベリアの姿はない。  
彼女を拘束していた鎖も断ち切られていた。  
炎を使ったのか、断面が溶解している。

他に牢獄内で身を隠せる場所はない。

しかし、ロベリアはここにいるはずだった。

『ロベリアは探さない所にいる』

混乱に乗じて脱獄を試みた囚人の情報だ。

探さない場所、それに当て嵌まるのは、ロベリアが元々いたこの奈落の底である。

脱獄を成功させるには、とにかくスピードが命である。

グズグズしてては、たちまち退路を塞がれてしまうからだ。そのため脱獄を開始したら、すぐさま建物から屋外に逃亡を計るのが常套手段である。

普通は誰でもそう考えるだろ？し、警官達もそう考えて、ロベリアを追跡するべく次々と外に出ている。

そうなれば刑務所内は必然的に手薄になる。それまでここで待っているつもりだろ？

囚人の情報から、大神はそう推理した。

「ロベリア、出てこい！そこにはいるのは分かっているぞ！」

奈落の底に、大神の声が響く。  
すると、その背後から返事が返つて來た。

「…………中々鋭いじゃないか。」

振り向くと、囚人服から普段着に着替えたロベリアが鋭い目つきで笑っていた。

アシンメトリーの「コードが闇に溶け込むように見える様は、巴里の悪魔という異名を連想させる。

「脱獄なんてよせー懲役が増えるだけだ！」

「ハツ、1000年だろ？が2000年だろ？が、アタシには関係ないわ。…………どいて貰おうか？」

大神の説得を鼻で笑うロベリア。

やはり無理なのか…………。

大神が一瞬諦めかけた時、上から声がした。

「勇ましい事だね。ますます氣に入ったよ。」

「支配人！」

それは、何とグラン・マだつた。

話を聞いたグラン・マも、ロベリアに直談判すべく刑務所に急行したのだ。

「单刀直入に言つよ。ロベリア、巴里華撃団にお入り。」

「巴里華撃団？」

「巴里の平和を守る秘密部隊さ。警察や軍隊の介入もない。アンタの自由も保障できる。」

流石に大神より数段口の上手いグラン・マ。

しかし、それでもロベリアは首を縦には振らなかつた。

「それがどうした？巴里の平和なんて興味ない。自由だってアンタに貰わなくとも……。」

「簡単に手に入る、かい？今のアンタじゃ、説得力ないよ。」

言葉の尻を食つて、グラント・マが言い返す。

確かに今のロベリアは何もない。

自力で脱獄すれば、一時の自由は手に入るだろ？

しかし、それでも完全な自由ではない。

ロベリア自身もそれを理解しているらしく、舌打ちを返した。

「だつたら、もっと別なものをよこしな。」

今までノンの一点張りだつたロベリアが、初めて答えを変えた。  
大神は改めてグラント・マの話術に驚くと共に、ロベリアの求める別の条件を打ち出した。

「巴里華撃団に入れば、君の懲役を減らしてやる。どうだ？」

ロベリアの自由を拘束しているのは無数の軽犯罪から生まれた100年もの懲役。

ならばその鎖を断ち切れば、ロベリアも納得してくれるのではないか。  
ろうか。

大神はそう考えたのだ。

「……なるほど。悪くないね。どのくらい減らしてくれるんだい？」

ロベリアも大神の予想とかなり近い反応を返す。  
すると、今度はグラント・マが口を開いた。

「手柄一つにつき、10年でどりだい？内容によつては、ボーナス  
もつけるよ。」「

一回の活躍につき10年。

つまり、最大でも百回手柄を上げれば、刑期が満了する計算になる。しかし、ロベリアは何か引っ掛けた様子で言った。

「つまよがる話だね。……何か裏があるだろ?」

「さう、巴里華撃団は命懸けの仕事さ。でも、あくまで自分のために働けばいい。」

「自分のためねえ。」

巴里の平和を守るためにではなく、自身の懲役を減らすため。グラン・マの提示した条件は、自分のスタンスと十分噛み合っている。

「…………。」

ロベリアは目を閉じ、一瞬考えるそぶりを見せた。  
そして……。

「…………さつきまで刑務所にいたとは思えないダンスだな。」

ステージに立つ新入りのダンスを見て、大神が呟いた。  
あれからロベリアは、グラン・マの提案を受けて巴里華撃団参入を承諾したのだ。

そして今夜、シャノワールの新しいダンサーとしてステージに立つたのである。

ロベリアは何処で覚えたのか、華麗なステップでステージを舞い、観客達を瞬く間に虜にしてしまった。

すると、大神の後ろからよく知る声が聞こえて来た。

「やあ大神君。席は空いてるかな？」

「エビヤン警部！」

それは何と、巴里市警の筆頭であるエビヤン警部だった。  
何やら何時にも増して機嫌がいい。

「ロベリアも逮捕出来たし、巴里も平和になつたよ。今日はそれを祝おうと思つてね。」

「は、はあ……。」

そのロベリアが今まで踊つていた事など知る訳もないエビヤン警部に、大神は引き攣つた笑いを返す。

しかしぬる瞬間、大神や後ろにいたエリカ達は、信じられない光景を目の当たりにする事になる。

「いらっしゃい、一名様ですか？」

「ロ、ロロ、ロベリア！？ いつ脱獄したんだー！」

笑顔だつたエビヤン警部が突然に凍り付く。

確かに今日捕まえたばかりの悪党がシャノワールにいるとは、誰も思わないだろう。

すると、そこにグラン・マがやって来た。

「おや、警部。紹介するよ、今日入ったダンサーだ。」

「サフィールと申します。よろしくお願ひしますね。」

グリシーヌとはまた違つた意味で、ロベリアの名前を公にする訳にはいかない。

そこでロベリアは、サフィールという偽名でステージに立つ事になつたのだ。

「サフィールさん……。これは失礼しました。……なるほど、ロベリアと性格はまるで別人ですな。」

「ウフフ、ありがとうございます。」

「それにしても美しい。」

「あら、警部さんも素敵よ？」

幸いあつさり信じたエビヤン警部。

しかし、後ろに控える大神達は唾然としていた。

無理もない。

ロベリアの態度が別人のように変わってしまったからだ。

ちょっとでも不用意な事をすればたちまち炎に焼かれるような鋭い

視線が、今は全く感じられない。

演技なのかもしないが、目の前にいるロベリアは最早別人だった。

「…………！」

その時、ロベリアが鋭い目つきで客席の入口を睨んだ。

「ん？ どうかされましたか？」

「…………いえ、何でもありませんわ。」

何でもないといいつつも、入口を一点に見るロベリア。  
大神は素早くその空気を読んで、エビヤン警部の注意を逸らす事にした。

「そういうえば警部、巴里で変な事件は起こっていませんか？」

すると、サーモンムニエルを味わっていたエビヤン警部の表情が俄かに固くなつた。

「そういういえばここ最近、夜中に美術館の名画を切り裂く事件が相次ぎまして……。」

一流の名高い名画ばかりが無残に切り裂かれる事件。  
被害額は既に3000万フランを越え、巴里市警は頭を抱えている。  
かくいう昨日も、名画が十数枚切り裂かれてしまった。

「私はてっきりロベリアの仕業と思つていたんですが……。」

「それはないさ。ねえ、ムッシュ。」

「はい、俺も違ひと思いますよ?」

グラン・マも大神も即答した。

ロベリアは盗みこすれ、金田のものをわざわざ壊すような真似はない。

何より本人の前で確証もなしに言えるはずもない。

「確かに、そうですな。あの守銭奴なら、売つぱらひでしょうね。」

「そうですね。ロベリアなら切り裂くなんて事しませんわ。」端から聞けば実に恐ろしい会話である。

ロベリアが入口を睨んだ視線を気にしつつ、大神はその様子に苦笑いを浮かべるしかなかつた。

「ロビがシャノワールか。賑やかな場所だね。」

「そり? 喜んでくれて嬉しいよ。」

瞳を輝かせるピエールに、ダイゴは笑顔を返した。

この日、ダイゴはボランティアを代わりにしてもうつたお礼に、ピ

エールをシャノワールに連れて来たのだ。

「…………。」

「どうしたの？」

ふと黙つて奥のテーブルを見つめるピエールに声をかける。すると、ピエールは変わらぬ笑顔を返した。

「何でもないよ。それより、店の中を色々教えてよ。」

「うん、いいよ。」

ピエールの笑顔は、他の人達のそれと違うものがあった。

まるで昔同じものを見たような、懐かしさを感じさせる笑顔。

それに、ダイゴは引き込まれていた。

最もそれがエリカに勝る事はないのだが、もしエリカが大神に取られたとしても孤独ではないといつ安心感が、ダイゴの心に芽生えつつあつた。

その時、懐のスパークレンズが僅かに光つた事に、ダイゴは気付かなかつた。

その日の夜、巴里華撃団の姿はルーブル美術館にあった。

エビヤン警部の話した事件に怪人が絡んでいると見たグラン・マが、次に狙われるだろう美術館を警護するように指令を出したのである。当初ルーブルかオランジュリーのどちらの美術館を警護するかで意見が別れてしまったのだが、餅は餅屋という事から大神はロベリアの意見を尊重し、ルーブル美術館を警護する事に決定したのである。

「…………まだ現れないな。」

警護を始めて小一時間。

巴里で最も有名だけに100人近い警備員がいる中、刻々と時間が過ぎていく。

「やつぱりルーブルに来るつもりないんじゃない?」

「その時はロベリア、分かつているだろうな?」

オランジュリーを警護すべきと意見していたグリシームとコクリコが口を挟む。

すると、ロベリアは遠くを見たまま言葉を返した。

「来るわ。いろんな空気の冷たい夜はね。」

その時、ロベリアの予想が現実に変わった。

「グアアー!?

「うう……!」

「ギャアアアー！」

入口を警護していた警備員達が、突然苦しみながら倒れたのだ。

「お、大神さん！警備員さん達が……！」

「いや待て、エリカくん。」

隠れていた茂みから警備員を助けに行こうとするエリカを、大神が止めた。

どういう方法を使ったか知らないが、相手は警備員の数をものともしていない。

下手に姿を現せば、こちらまでやられてしまう危険があった。すると、倒れた警備員の近くに人影が現れた。ナーデルである。

「フフフ……、ルーブル美術館の警備もこの程度ね。まあ人間だから仕方ないけど。」

「…………来やがつたな。」

獲物を見つけたように、ロベリアが目つきを鋭くした。どうやら美術館を襲撃している怪人に間違いないらしい。

「待て……！」

大神の一喝と共に、隊員達は一斉にナーデルの前に現れた。

「ん？まだ生き残りがいたのかしら？」

「貴様が名画を狙う怪人だな！これ以上好きにはさせないぞ！」

意外そうな反応を見せるナー＝デルに、大神が吠える。しかし、怪人相手には大した威嚇にもならなかつた。

「フフフ、このナー＝デルに刃向かうつもり？」

「何！？」

不敵な笑いを見せるナー＝デルに警戒する花組。すると、ナー＝デルが満足げに笑つた。

「ちょうど良いわ、遊び相手をあげる。出てらっしゃい、蠍怪獣アンタレス！」

高々と上げた右手の指をスナップしたその時、大神達とナー＝デルを割るように地面が裂け、中から巨大な怪獣が現れた。茶色の皮膚と先が尖つた長い尻尾。そして顔には赤い二つの目が光る。ナー＝デルの使役する蠍怪獣アンタレスだ。

「わあ！出たあ！！」

「大神さん、どうしましょーう！？」

初めて生身で相対する怪獣に、思わずたじろぐ隊員達。そんな中、ロベリアだけは表情が違つた。

「コイツ……、何でアタシを攻撃しない？」

身体の大きさを活かしてこちらを追い詰めるアンタレスだが、どういつ訳かロベリアを無視している。まるで敵意を示さないのだ。

「ウフフ、仲良く食べられてちょうどいい。」

「いかん！ロベリア、奴を追つてくれ！！」

美術館に向かつて走り出したナーデルに気づき、大神が叫んだ。幸いアンタレスはロベリアを攻撃しないので、自分達が怪獣を引き付けている間にロベリアなら追跡ができる。

「…………チツ！分かったよ。」

やれやれといった表情で答えると、ロベリアはナーデルを追つて走り出した。

「…………何だこりゃ。警備員がまるで役立たずじゃねえか。」

美術館の外を走りながら周囲を見て、ロベリアは悪態をついた。無理もない。

巴里で一番厳重な警備をしていた警備員達が、揃つてナーデルにやられていたからである。

「見つけたぞ、ナーデルとやらー。」

壁を蹴つて跳躍し、ナーデルの前に立ちはだかるロベリア。すると、ナーデルは何かに気付いたように笑った。

「あら…………、誰かと思えばロベリアじゃない。捕まつたんじゃな

かつたの？」

「成り行きでね。で、どういづ訳だい？」

「何の話かしりつ。」

「とほけんじやないよ。」

白をきるナーデルを一蹴し、ロベリアが倒れている警備員を指差した。

「ロイシの首や背中の傷、アタシがレイモンの屋敷を襲った時と同じものだ。多分さつきの怪獣だろうが……。」

おそれらくアンタレスとかいう怪獣によるものだわ。怪獣の殺氣は、正にレイモンの屋敷で感じたそれだった。

「そうよ。貴女があんまり巴里で騒ぎを起すから、警戒が厳重になっちゃってね。」

これでロベリアの推理は確定した。

あの夜、レイモンの屋敷でロベリアを襲ったのは、ナーデルだったのだ。

「しかしまさか、ここで念つとは思わなかつたわ。おかげであの子も攻撃してくれないし。」

その言葉に、ロベリアはある程度の察しをつけた。

蠍の中には、体内に持つ毒素を感じて仲間を見分ける種類がいる。アンタレスも同様なら、以前毒を受けている自分を仲間と勘違いし

たのだろう。

それなら、自分が攻撃されないのも納得がいく。

「ちょうど良いわ、ロベリア。話があるの。」

ナーデルが、再び不敵に笑つた。

「…………これは……！」

スパークレンズの輝きに導かれたダイゴは、目の前の状況に驚きの声を上げた。

ルーブル美術館に現れた巨大な怪獣。

その足元には、どういう訳かエリカや大神の姿がある。

「まさか、また怪人が現れたのか…………。」

ダイゴは懐のスパークレンズを取り出した。

古代の彫刻は、ダイゴに戦う事を促すように光を放っている。

ダイゴはキッと怪獣を見据えると、スパークレンズを大きく時計回りに回転させ、夜空に掲げた。

「ティガ――――――！」

「チャーッ！！」

夜空を舞うように現れたティガが、アンタレスに空中から蹴りつけた。

「ガアアアアッ！！」

いきなりの不意打ちに、アンタレスは真後ろへ吹っ飛ぶ。そして、ティガは大神達を守るように地面に降り立つた。

「チャッ！」

アンタレスを前に身構えるティガ。

アンタレスも標的を大神達からティガに変えたらしく、こちらには目もくれない。

「よし、ティガが戦っている間にロベリアと合流するぞ！」

「」「了解！」

アンタレスをティガに任せ、大神達は手分けしてロベリアとナーデルを探した。

何せ辺りは真っ暗である。

二人が何処をどう走ったのか皆目見当がつかない。

そこで大神は四つに分かれてロベリアを探す事にした。  
これならナーデルが更に援軍を呼んでいなければ間違いないなく一対一  
になるので、効率が良い。

そして、最初にロベリアを見つけたのは大神だつた。

「ロベリア、大丈夫か！…………って、あれ？」

ロベリアと言えど生身で怪人を相手には出来ない。

先程は見失わぬいために追跡させたが、ナーデルの確保よりもロベ  
リアの安否が心配だつた。  
が、大神の不安は一瞬で消えた。

「よお隊長。何息切らしてんだ？」

「ロベリア…………、何呑気な事言つてゐるんだ？」

怪獣まで差し向けて来た怪人を前に何の余裕をかましているのか。呆気に取られる大神に、今度はナーデルが言った。

「心配ないわよ。あたしはロベリアと、大人の話をしていたんだから。」

「大人の話？」

「ああ。手を組まないかと誘われてね。」

「何だつてー? ロベリア、まさかそれを受けたのかー?」

信じられない面持ちで尋ねる大神。すると、ロベリアはいつものように曖昧に返した。

「条件次第さ。言つたら? 巴里の平和なんてどうでもいいってね。」

「ロベリア…………！」

「どうするんだい? 何か条件をつけるなら考へても…………。」

そうロベリアが笑つた時だつた。

突如大神が刀を抜き、白銀に輝く刃をロベリアの眼前に突き付けたのだ。

「そんな事、俺が許すものか!!」

「なつ…………！」

「答えるロベリアー返答いかんによつては、俺が君を切り捨てるー！」

「…………！」

その瞬間、辺りの空気が震えた。

もし怪人と手を組むと言えば、大神は本氣で自分を斬る。

大神の視線から、ロベリアは確信した。

「大丈夫よロベリア。そんな奴あたしが先に殺してあげるから。」

ナーデルはそう言ったが、そんなもので安心できる程の殺氣ではない。

言うなれば、ここで死ぬか否か。

それが、ロベリアを決断させた。

「…………ったく、冗談の通じない奴だねアンタは。言つたら？ ロイツよりエリカがマシだつて。」

「な、何ですつてーー？」

今度はナーデルが驚く番だった。

巴里の大悪党が、自分よりあの男につくとは信じられなかつたからだ。

「当たり前だろ？ 元はと言えばアンタのちよつかいで捕まつたんだ。そんな奴と対等に交渉してやるようなアタシじゃないよ。」

「だったら交渉決裂ね。きっと後悔させてあげるわよー！」

そう吐き捨て、ナーデルは夜の闇に消えた。

「あ～あ、もう少しで捕まえられたのに。空氣読んだら分かるだろ?  
？」

「ロベリア…………。」

呆れた表情で言つてのけるロベリアだが、ふと大神に笑みを見せた。  
「でもね、さっきのアンタ格好よかつたよ。…………惚れそうな位に  
ね。」

「え…………?」

普段は絶対に見せない表情に、思わず見とれる大神。  
すると、ロベリアは途端に元の呆れ顔に戻った。

「嘘に決まつてんだろ!何照れてんだよ、馬鹿だからか?」

そうは言つものの、赤いままでの顔で言わわれては説得力がない。  
残りの三人が駆け付けたのは、その時だった。

「二人とも、無事でしたか!?」

「ああ、それよりナーデルが美術館にポーンを呼び出すらしい。大  
至急シャノワールに戻るぞ!」

「「了解!」」

その頃、ティガと戦っていたアンタレスにも異変が生じた。

「ガアアアアツー！」

何と、突然地面に穴を掘つて逃走を始めたのだ。

「チャツ！」

ティガは逃がさんとばかりにアンタレスの背中に馬乗りになつて殴り掛かつた。

「ハツ！ハツ！チャツ！」

しかし何度もパンチを浴びせようとした時、ティガの背中に何かが突き刺さつた。

「ジユワツー？」

それは、ロベリアさえも倒した尻尾の先にある猛毒の針だった。途端に全身を痺れと激痛が襲い、ティガは地面をのたうつ。その間に、アンタレスは地中深くに逃げ去ってしまった。

「チャツ……。」

無念そうにその様子を見つめ、ティガは姿を消してしまった。

ルーブル美術館には、既に裏口からかなりの数のポーンが侵入していた。ちょうど特別展示の日だったために、たくさんの芸術文化財が並んでいる。

「…………ティガも始末した事だし、早速始めましょうか。」

ナー・デルの爪が一つの絵画を切り裂こうとした時、別の声がそれを制止した。

「やれるもんなら、やってみなーー！」

「なんですか……！？」

声のした入口に睨むナー・デル。

すると、別の声と共に五つの光武Fが現れた。

「でも出来ればやらないで下さこね！」

「巴里華げき…………」「お前は黙つてろーーー」「

見事に決めを失敗しながら。

「ロベリアさん、『』の和詞は『巴里華撃団、參上』って教えたじゃないですか。」

「やかましいーお前のせいでしぐじつたんだろーーー。」

注意するリカに爪を立てて威嚇するロベリア。  
すると、ナーデルが冷たい笑みを浮かべて笑った。

「ロベリアじゃない。もしかして手を組みに来ててくれたの？」

「お前馬鹿か？美術品の価値も分からねえ馬鹿と組む訳ねえだろバ  
ー力！」

呆れた口調で頭を叩いて見せるロベリア。

その行為が気に障ったのか、ナーデルは表情を一変させた。

「キーッーよくも言つたわね！ ポーンども、やつておしまーーー！」

言つや、ナーデルは転移魔術でその場を離れた。

同時に美術館内にいたローン達が一斉にこちらに向かつてくる。たちまち館内は、激しい剣戟の音に包まれた。

ルーブル美術館内の戦闘は、様々な意味で戦いにくかつた。

ボーンの数が多い事もそうだが、何よりそこら中にある展示品を気にして戦わなければならぬいため、攻撃に躊躇いが生じるのだ。大神は的確に指示を出し、美術品を傷つけないように勤めた。

そして、中央に位置する高級美術品を含む全ての美術品を保護する事に成功した。

「よし、あとはナーデルだけだな。」

美術品を保護したら、あとは主犯であるナーデルを倒すだけだ。その姿を探して辺りを見渡すと、ロベリアが一点を指差して叫んだ。

「隊長、ナーデルならあそこだ！」

それは、美術館の奥だった。

ナーデルは特に逃げようともせず、ボーンが全滅したこの状況において尚、余裕をかましていた。

「残りはアンタだけだ。どうする？ 助けでも呼ぶかい？」

「あら、それはこっちの台詞よ？ これでも戦えるつもり？」

ロベリアの凄みを嘲笑で返し、ナーデルは真後ろの絵画に爪を突き

立てた。

その絵に、グリシーヌは見覚えがあつた。

「あれは、『モザ・リナ』！フランスを代表する名画だぞ！」

「な、何だつて！？」

フランスの代表的な文化遺産。

そんなものに傷をつけられてはたまらない。

「わあ、この絵に傷をつけられたくなかったら、道を開けなさい。」

「くわっ…………！」

二択を迫られ悩む大神。

確かに『モザ・リナ』を傷つけられる訳にはいかない。  
しかし、それではナーデルにまたも逃げられてしまう。  
すると、ここでロベリアが口を挟んだ。

「簡単な引き算さ。いつすればいいんだよー。」

言つや、ロベリアはとんでもない行動に出た。

掌から炎を放ち、絵をまるごと焼いてしまったのである。

「あやつー？」

「『モザ・リナ』が、灰にーー。」

止める間もなく、フランスを代表する名画は跡形もなく消し炭になってしまった。

「ロベリア、何て事を！」

「わづよーせつかくあたしが素敵に作り変えようとしてたのにー。」

「あとでグラントマに怒つてもうからね。」

ナーデルを含め日々に非難を浴びせる一堂。すると、ロベリアはキッパリと言い放った。

「何言つてんだ！ 怪人の撃破が最重要任務なんだろ？ 絵の一つや二つ、切り捨てちまえよー。」

それは、かつてのロベリアからは考えられない言葉だった。自分のためなら何でも簡単に切り捨てる彼女が、フランスの宝を灰にしてまで正義を貫こうとは。

「…………君が怪人に見えるよ。」

「褒め言葉にしどこでやるよ。」

大神の言葉にニヤリと笑い、ロベリアはナーデルに向き直った。

「ほりほらナーデルちゃん、次は何を人質にするんだい？ 全部燃やしてやるよー。」

すると、その言葉が逆鱗に触れたらしく、ナーデルは地団駄を踏んだ。

「キーッー馬鹿にしないでよー。アンタ達、絶対許さないんだからー。」

「！」

「へえ？ 許さないならどうするんだよ？」

「いりあるのよ……」

そう言い返し、ナーデルは魔法陣を出現させた。たちまち辺りの妖氣が高まる。

「まあいい！ みんな、光武に戻るんだ！」

大神の指示で素早く光武Fに乗り込む隊員達。それと同時に、ナーデルが叫んだ。

「出て来なさい！ 蒸気獣『ノクテュルヌ』！」

すると、真後ろの魔法陣から深紅の蒸気獣が現れた。鍊のような両腕と長い尻尾は、猛毒の蠍を連想させる。しかし、ナーデルが呼んだのはそれだけではなかった。

「こ、これは！」

突如震動が美術館全体を襲つたかと思つと、床を突き破つてアンタレスが現れた。

「！」の美術館」と芸術に変えてあげるわ！ 覚悟なさい、巴里華撃団！ ！」

ナーデルの叫びと共に、アンタレスが襲い掛かつて來た。

「ガアアアアアツ！」

「まざい！みんな、双方に注意しながら戦うんだ！」

「「了解！」」

大神の指示を受け、五つの光武Fは別々の方向に動いた。目標をばらけさせる事で、相手の狙いを分散させる作戦だ。結果それは上手くいき、アンタレスは大神の狙い通り辺りをキョロキョロしている。

「よし、今の内にナー・デルを仕留めるぞ！」

二刀を握り、大神が叫ぶ。

アンタレスより先に指揮官のナー・デルを倒せば、アンタレスも僅かに戦いやしくなるはず。

大神はアンタレスの注意を逸らし、その上でナー・デルを倒す事にしたのである。

「喰らえッ！」

振りかぶった二刀をノクテュルヌ目掛けて振り下ろす大神。しかし、それでやられてくれる程相手も甘くはなかつた。

「フフフ……、かかつたわね？」

「何つ！」

ナー・デルが不敵に笑つた時、大神は周囲の状況にハツとした。自分を含め、全ての光武Fがナー・デルの眼前に集まっていたのだ。

「赤は血の色、死は闇の色、妖艶なれ！ ル・フラー・デュ・マ  
ル！！」

刹那、ノクテュルヌの尻尾から超高压電流が発射された。

「くつ、しまった！」

電流を受け、大神はハツとした。

光武Fは構造上、靈力を靈子水晶に反応させて動かす。その動力部分は、希少な金属で覆われている。つまり……。

「大変です大神さん！ 光武が動きません！」

最初に叫んだのはエリカだった。

見ると、他の光武Fも動きが完全に停止している。大神の予想が、現実に変わった瞬間だった。

光武Fの弱点は靈子水晶にダメージを受ける事だ。

そうなれば、靈力が光武Fに伝わらないため、攻撃どころか身動きすら取れないのである。

「ここのナーデルを甘く見たわね。先にあたしを狙つて来る事くらい計算済みよ。」

沈黙した光武Fを前に、ナーデルが勝ち誇ったように笑う。対する大神は、悔しげに顔を歪めた。

「くそつ……。」

状況は完全に絶望的だ。

このままでは光武Fの機能が回復する前にやられてしまつ。しかし、ここでナーデルは意外な事を口にした。

「さて、アンタ達はしばらくそのままでいて貰つわよ?」

「何? どういう事だ! ?」

せつかくのチャンスだといつにトドメを刺そうとした大神が、大神が問う。すると、ナーデルは笑って答えた。

「あたしの狙いはもう一つあるのよ。アンタ達はその後。」

そして、ナーデルは美術館全体に響く大声を上げた。

「ああ出て来なさい! ウルトラマンティガ! 」

「くつ……!」

柱の影に隠れていたダイゴは、ナーデルの言葉に身震いした。

アンタレスに逃げられてすぐ、変身を解除したダイゴは美術館を離れようとしたのだが、背中から全身に痛みが走つて思うように動けず、美術館内に身を潜めていたのである。

「そこにいるのは分かつてゐるのよ？大人しく姿を見せなさい！」

おそらくこちらの居場所はばれているだらう。ナーテルの声は明らかにこちらを向いていた。

「（どうする…………？）この身体で勝てるか…………？」

先程のダメージは色濃く残つている。

この状況で、怪獣と蒸気獣の二体を相手に勝てる自信はない。しかし、スパークレンスはダイゴの意志に反して、光を放つていた。まるで、ダイゴに戦えと言わんばかりに。

「ティガ…………、それが君の意志なの…………？」

勝てる見込みはない。

だが、目の前に巴里を齧かす存在がある限り自分は戦わなければならぬ。

それが、光を継いだダイゴの宿命だった。

「ティガ…………、僕に勇気を授けてくれ…………！」

ダイゴは傷付いた身体で立ち上がると、その光に従い、スパークレンスを天に掲げた。

「ティガ――――ツ！！」

そして、光は再び戦場へ舞い戻った。

「チャツ！」

「ティガ！！」

「……現れたわね。」

姿を見せた光の巨人に、花組は驚き、ナーデルは笑った。  
獲物を見つけた蠍のように、悍ましい顔だ。

「フフフ、やはり現れたわねティガ。最高の芸術に変えてあげるわ。」

「…………」  
言つや、アンタレスが襲い掛かつて來た。

「ガアアアアツ！」

「チャツ！」

真正面から体当たりして來た首を捕まえ、一本背負いの要領で投げ  
飛ばす。

しかし、仰向けに倒れたアンタレスに攻撃を仕掛けようとした時、  
ティガは背中に激痛を感じた。

「ジユワツー？」

激痛の余り立つていられなくなり、片膝をつくティガ。  
そこに、起き上がったアンタレスが襲つて来た。

「ガアアアアツ！」

「チャツ……！」

首を締め上げる両腕を外そうと、ティガがアンタレスの両腕を掴む。  
しかし、毒にやられて弱つた身体に十分な力が入らない。

「そ、う、よ、ア、ン、タ、レ、ス、……。そ、の、ま、ま、テ、イ、ガ、離、さ、ない、で、ね、……。」

「

身動きの取れないティガの様子を楽しむように笑い、ナーデルがティガに迫る。

「さあ、その首を撥ねてオブジェにしてあげるわ！」

「ティガ！！」

ティガの身を案じてエリカが叫ぶ。しかし、ナーデルの攻撃は意外な人物によつて阻止された。

「何正義の味方がやられてんだ？」

「なつ！ロベリア！？」

何と、ロベリアの光武Fがノクテュルヌの前に割って入り、右手の三本の鉤爪で攻撃を防いだのである。

「どういう事！？あたしの電撃が効かなかつたつて言つのー？」

動きを封じたはずのロベリアからの反撃に、呆然となるナーデル。すると、ロベリアはニヤリと笑つた。

「馬鹿が。このアタシを見て分からぬのか？」

その言葉に、ナーデルは顔を凍りつかせた。

「なつ…………！」

何と、ロベリアの光武Fは腰から下が地面に溶け込んでいたのだ。あの時、ロベリアは全身を床に沈める事でナーデルの攻撃をやり過ごしたのである。

「ほら、いつまで情けない格好してんだ？早いとこケリつけちまえー！」

ノクテュルヌを押し返しながらロベリアが叫ぶ。

すると、その言葉に奮起されたティガは全身に力を集中した。

「ンウウウ…………、ハツ！！」

額のクリスタルを発光して、ティガはパワータイプにチェンジする。

そして、その凄まじい握力でアンタレスの両腕を握りしめた。

「ンウウウ…………！」

「ガアアアッ！？」

突然のティガの反撃に驚いたアンタレスは腕を外そつとするが、パワータイプの握力からは逃げられない。

「ハツ！」

ティガが気合いの一聲を発する。

すると、アンタレスの両腕が音をたてて粉々に握り潰された。

「ガアアアアッ！！」

「チャツ！」

両腕を潰されて苦しむアンタレスに、ティガはじこぞとばかりに反撃に出た。

逃げようとする怪獣の尻尾を捕まえ、ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばす。

「チャーツ！…」

美術品を展示していた台を薙ぎ倒しながら、倒れるアンタレス。ティガは両手を大きく外側から回してエネルギーを圧縮する。

「ハアアア…………！」

そして、アンタレス目掛けて渾身のデラシウム光流を放った。

「ダーツ！！」

超高熱の光球は一直線にアンタレスを捕らえ、一気に包み込む。

「ガアアアアア…………！」

アンタレスは断末魔の叫び声と共に大爆発した。

「そ、そんな…………！あたしのアンタレスが…………！」

自分の可愛いペットが目の前で倒され、呆然とするナーデル。そこに、ロベリアが襲い掛かった。

「よそ見してる暇あんのか！？」

血に飢えた爪でノクテュルヌに切り掛けた。気付いたナーデルは慌てて避けようとするが間に合わず、爪はノクテュルヌの腹を深々と引き裂いた。

「キーッ！卑怯じやない！少しは手加減しなさいよ！」

「ハン、ここで死ぬ奴が何言つてんだ？いい加減諦めな！」

そう吐き捨て、ロベリアは凄絶な笑みでナーデルを睨んだ。右手の鉤爪が、灼熱の炎に包まれる。

「…………！」

その悪魔にも似た恐ろしい視線に魅入られ、ナーデルの身体が固ま

る。

そこいらロベリアは殺意に満ちた鉤爪を振り下ろした。

「炎を見る度思い出せ、火の恐怖を！ フィアンマ・ウンギア！！」

鉤爪はノクテュルヌの脳天を直撃した。

たちまちに赤い蠍の全身を煙と火花が包む。

「こんなの……、こんな、認めないわ！ あたしの芸術を分から  
ない、無能な……、人間共に……！」

無念の声と共に、ナーデルは地獄の業火に蒔かれて灰になった。

「チャツ。」

その様子を確認し、ティガは静かに消え去った。

ルーブル美術館を後にして、大神が口を開いた。

今回の任務におけるロベリアの功績は素晴らしいものがあった。  
ルーブル美術館が襲撃される事をピタリと言い当て、ナーデル撃破  
に貢献し、ティガのピンチまで救つたのだ。

「……今日はロベリアのお手柄だつたな。」

これを大活躍と言わずして何と言うのか。

悪党だとか言う事は関係なく、ロベリアは立派に巴里華撃団としての存在をしらしめたのである。

最も、本人にそのつもりは全くないが。

「そうだ！」モザ・リナ 燐やしちゃったけど、どうしよう！

ふと思い出したように、コクリコが叫んだ。

ナーデルを追い詰めるためにやむを得なかつたとはいえ、フランスの宝を灰に変えてしまった責任は重い。

すると、シャノワールから通信が入つて來た。

「それなら、ご心配には及びません。」

「あの絵画は全部、美術館が用意した偽物だそうです。」

「ロベリアさんの事ですから、最初から知つてたんですね？」

「当然さ。眉毛のない』モザ・リナ』が、本物な訳ないだろ？」

得意そうに腕を組むロベリア。

確かに偽物と見抜いていたなら、先程の行動も頷ける。

しかし、ここでグリシースがある事に気付いた。

「……待てロベリア。元々『モザ・リナ』に眉毛はないぞ。」

元々眉毛はない。

と言つ事は、眉毛の有無では本物と偽物の判断が出来ない事になる。つまり……、

「あ～ら、そうだったつけ？まあ良いじゃねえか。」

「ふざけるな！本物だつたらどう責任を取るつもりだつたんだ！」

無責任なロベリアの言動にすかさず噛み付くグリシーヌ。すると、エリカがそれを宥めながら言った。

「はいはい落ち着いて。いつものアレがまだですよ~。」

「…………こつものアレ?..」

「はい。私達は戦いに勝つた後、必ずポーズをキメる事に……。」

刹那、ロベリアの表情は一変した。

「なつー？じ、「冗談じゃねえ！」そんな子供みたいな真似出来るかよー！」

「ひひひロベリア、逃げるんじゃない！」

嫌がるロベリアを押さえ付け、大神が言った。

「行くぞ、勝利のポーズ…………」

「キメるかあ――――――！」

闇よひの使者（後書き）

『次回予告』

いつまでも覚めない夢……。

私は貴方と、愛に揺らめきたい。

そう、いつまでも……。

次回、サクラ大戦3。

『揺らめく想いは』

愛の御旗のもとこ……

それでも貴方を、忘れられない……

描ひめく想いは（前書き）

フランの相場がイマイチ分からぬといつゝ。  
勉強不足か…………。

## 描ひめく想いは

巴里の街は、全てが華やかといつ訳ではない。この花屋の近くにも、そういう場所があった。

墓地。

このフランスで生涯を終えた魂達が、静かに眠る場所。その一番奥に、彼女はいた。

「フィリップ……、貴方の好きな花を持って来ました。」

漆黒の喪服に身を包み、静かに微笑みながら、彼女は花束を墓の前に置く。

その墓標には、「フィリップ・マールブランシュ」と彫つてある。おそらくフィリップという人物の墓参りだろ？  
喪服の少女は、静かに微笑んでいた。

「今日も一人で、楽しく過ぎてしましちゃうね……。」

「はあ……、身体がだるい……。」

教会の掃除をしながら、ダイゴが呟いた。

何せ前回は蠍怪獣アンタレスに毒針を刺されるという深手を負ったのだ。

背中の痛みは無くなつたが、今だに身体を動かすとだるさを感じてしまう。

今日も教会の前を箒で掃くだけなのに、すぐにじうじうして疲れが出てしまつた。

「ダイゴ、大丈夫かい？少し休んだ方が……。」

「いや、大丈夫だよ…………。」

心配そうに言つピエールに空元気な返事を返し、ダイゴはため息をついた。

疲れているのは事実だが、怪獣にやられたとは口が裂けても言えない。

訝しげにこちらを見る親友の痛い視線を浴びながら掃除を再開するダイゴに声がかけられたのは、その時だつた。

「やあ、ダイゴじゃないか。」

「…………ああ。」

それは、モギリ服姿の大神だつた。

大方エリカ狙いだらう。

そう判断するや、ダイゴの顔は反射的に険しくなる。

一方、大神とは初対面のピエールは珍しげな表情で口を開いた。

「ダイゴ、この人は知り合いなの？」

「ああ、紹介するよ。大神一郎さん。僕と同じ日本人なんだ。」

「へえ、日本人か。ボンジユール、ムッシュ大神。僕はピエール・タバルニエ。よろしくね。」

渋々ながらも紹介するダイゴと対照的に、笑顔で右手を差し出すピエール。すると、大神もいつものようにこやかな笑顔でピエールの手を握り返した。

「俺は大神一郎。シャノワールでモギリをしているんだ。よろしく、ピエール。」

自己紹介も済んだ所で、大神は辺りをキョロキョロしながらダイゴに尋ねた。

「ところでダイゴ、エリカくんを見てないかい？」

「…………ここにはいないよ。」

やはりそうか。

ダイゴはあからさまに不快な表情で言った。

「そうか……。ん？」

ダイゴに言われて立ち去ろうとした時、大神は何かに気付いたように立ち止まつた。

そして、何やら不思議な形をした機械を取り出した。

「…………？」

「済まないダイゴ。ちょっとといいかな？」

そう言つて、大神は不思議な機械をダイゴに向けた。  
すると、何やら音がして機械の下にあるカウンターが動いた。

「…………何それ？」

訳の分からぬ機械を突き付けられ、不快感を更に募らせるダイゴ。  
一方、大神は難しい顔でカウンターの針を見ていた。

「あ、いや、済まない。もういいよ。」

そう言つてダイゴから機械を退ける大神。  
すると、ピエールが物珍しそうに尋ねた。

「ムツシユ大神、それは何かの道具？」

「ああ、そんな大したものじゃないよ。」

そう曖昧に返し、大神は機械をしまいかける。  
しかしまた何かに気付いた様子で、しまいかけた機械を今度はピエールに向けた。

「…………？」

「…………うーん、やつぱり違うか。」

そう言つて機械をしまい、今度こそその場を後にする大神。

その様子に、ピエールは穏やかに笑った。

「何だか変わった人だね？」

「うん。僕もよく分からぬ人だよ…………。」

大神が何故あんな不思議な機械を持つて街をうろついていたか。  
それは、約一時間前に遡る。

「ふう、少し休憩にするか…………。」

大神はそう呟いて、目を通して書類を机の上に置いた。

それは、巴里華撃団最後の隊員の候補を載せた極秘リストだった。  
巴里華撃団の隊員数は、賢人機関の決定によりあと一人となつた。  
つまり、今いるエリカ、グリシーヌ、コクリコ、ロベリアに一人を  
加えた五人が、巴里華撃団最終メンバーという事になる。  
秘密部隊としてはちょうど良い人数だ。

そこで、候補に上がつた人物のリストを一枚ずつ見ているのだが、  
めぼしい人物は未だに見つからなかつた。

確かに一般人の中では靈力に秀でた人物が集まっているが、靈力ばかりが隊員を決めるのではない。

過酷な戦いに挑むゆるぎない覚悟と、巴里を守りたいという想いが揃つて初めて隊員と呼べると、大神は考えている。

残念ながら、それに該当する人物はない。

「よつ隊長さん。新隊員選考は順調かい？」

そこに、ジャン班長が顔を出した。

「あ、ジャン班長。残念ながら、これと言える人物はありません。  
だ。」「だらうな。そこでよ隊長さん、さつき地下で面白いモン作つたんだ

「面白いもの？」

「おうよ。」  
「いつを見てみな。」

おつむ返しに聞く大神の前に、ジャンは地下で作った道具を見せた。見た目は蓄音機に近い構造だが、中心にカウンターがついていたり、端からアンテナが伸びていたりと、何やら複雑な道具に見える。

「こいつはアンテナを向けた相手の靈力を計る靈測機だ。」

「靈測機？じゃあ、これを持って街を歩けば……。」

「そう。誰が高い靈力を持つているか一目瞭然だ。後はそいつが相応しいが隊長さんが判断すればいい。」

ジャンにとつても自信作らしく、満足げに頷いている。

そして、大神は意氣揚々と隊員探しに繰り出した訳だが……。

「やっぱり簡単には見つからないか……。」

花屋の前を通りかかり、大神はため息をついた。

意氣揚々と巴里市内を歩き回って一時間。

靈力のある人物は数人見かけたが、いずれも光武Fを扱える程ではないし、隊員にするにはイマイチ足りない気がした。

今のところ、カウンターに計測されるだけの靈力を持つのは三人。グリシーヌ邸で掃除をしていたタレブーと、教会にいたピエール。そして、同じくダイゴである。

しかし、タレブーの靈力は掃除をしていた時にしかカウンターに計測されなかつたし、ピエールとダイゴも光武Fを扱えるかはやや怪しい。

その時、視界の隅に見覚えのある人物が写った。

「あれは……、花火くんか？」

あの黒い喪服からして間違いない。

花束を手に、花火は墓地へ向かっているようだ。

「（お墓参りでもするのかな……？）」

個人的に人のプライベートを覗くのは趣味ではないが、どうも様子が違う花火が気になつた大神は不本意ながらも花火の後を追いかけた。

墓地は花屋の隣に位置していた。

大抵の人は花屋で購入した花を墓に手向けるため、位置的には都合が良い。

見ると、花火はその墓の一つに寄り添っていた。

「…………。」

花火の様子に大神は声をかけようとして、やめた。  
墓参りに来ているはずの花火が、やけに幸せそうな表情でいる事に訝しさを感じたからだ。

「（…………仕方ない。一度シャノワールに戻ろう。）

流石に後ろめたさを感じて立ち上がる大神。  
すると、花火が大神の存在に気付いた。

「あ、大神さん…………。」

こちらに歩いて来る花火。

その表情も、やはりいつもより幸せそうに見える。

「どうなされたんですか？こんな所で。」

「いや…………、それより花火くんは、誰かのお墓参りかい？」

痛い所を聞かれ、大神は上手くはぐらかした。  
流石に目の前で尾けて来ましたとは言えない。  
幸い、花火は疑いもせずに言葉を返した。

「私ですか？私はただ、人に会いに来ていただけです。」

「え…………？」

人と言つても、ここには自分と花火の二人しかいない。  
自分が訳はないし、一体誰と会つというのか。

「それでは、失礼します。」

眉をひそめる大神をよそに、花火は一礼してその場を後にした。

「…………」じいじがお参りしていた墓か。」

花火が見えなくなると、大神は彼女がお参りした墓の前に立つた。  
先程の花火の様子は何処かおかしい。  
墓参りなの人に会いに来たと言うし、顔を赤くしている。  
常識的に考えて、墓参りに来た人の顔らしくなかつた。

「フイリップ・ディ・マールブランシュ…………。」

おそらく花火の知り合いだろうか。

名前の下には、『フイリップは花火のために生きた』と彫つてある。

「ん？これは…………。」

大神は手向けられた花束の影に何かを見つけた。

拾つて見ると、それは一枚の写真だった。

おそらく花束を置いた時に落としたのだらう。

「もしかして、この人がフィリップか……？」

写真には、花火と一人の金髪の青年が微笑ましげに写っていた。写真の花火は喪服を着ていない事を除いて今と変わらない。つまりこの写真は最近のもので、この青年がフィリップなら、彼はかなり若くして命を落とした事になる。

「…………とりあえず、花火くんに返そう。」

フィリップは花火にとつて、少なからず大切な人物のはず。ならばこの写真は、花火が持つているべきだった。

大神は、花火を追いかけて墓地を後にした。

「…………遅いなあ…………。」

そつぼやきつつ辺り見渡すダイゴ。

エリカが教会に活ける花を買いに行つたきり戻つて来ないので、心配になつて探しに来たのだ。

案の定花屋はとっくに後にしたらじぐく、ダイゴはまだるい身体で歩き回る事になつた。

「それじゃ、また遊ぼうね～！」

その捜し求めた声が耳に届いたのは、ちょうど公園の辺りを歩いていた時だつた。

「あ、エリカさん…………。」

疲れと喜びの入り混じつた、陰りのある笑顔でダイゴはエリカを見た。

すると、エリカも「ひらり」と気がついた。

「あ、ダイゴさんー、ビービーしたんですか？缶蹴りならもう終わっちゃいましたよ？」

「いや、別に缶蹴りがしたい訳じゃないから…………。」

見ると小さな子供達が向こうへ走り去つて行く様子が見える。おそらく今まで、あの子供達と缶蹴りをして遊んでいたのだらう。やれやれとため息をつくダイゴ。

その時、エリカの右膝から血が出ている事に気がついた。

「エリカさん、怪我してるよー。」

「ああ、それなら平氣です。さつき大神さんが治してくれましたから。」

「…………え？」

エリカの口から出た『大神』といつ言葉に、手当てを始めようと  
したダイゴは固まった。

その顔は、遠目から見ても分かる程に引き攣っている。  
しかし、肝心のエリカはダイゴの表情に全く気づかず、更なる追い  
撃ちをかけた。

「大神さんって優しいんですよー！痛いのを抑えるおまじないして  
くれて。エリカますます大神さんが好きになっちゃいました！」

ダイゴは答えなかつた。

いや、答えられなかつた。

大好きなエリカから目の前で他の男を好きと言われたのだ。無理も  
ない。

「それじゃ、私は先に教会に戻りますね。」

やはりダイゴの様子に気づく事なく、エリカはそもそも嬉しそうにスキ  
ップして公園を後にした。

「…………」

残されたダイゴはしばらくの間、身体のだるさも忘れて立ち廻りし  
ていた。

「えっと……、見失ったかな……。」

辺りを見渡して、大神が呟いた。

花火を追いかけて来たはいいものの怪我をしたエリカに捕まってしまった、適当におまじないでごまかしたもの、公園を過ぎた橋の辺りで見失つてしまつたのだ。

「あ、あそこか……。」

見ると、花火は橋の真ん中で眼下を流れる川を眺めていた。  
しかし、やけに悲しげな表情が気になる。

「（やさつき墓地で会つた時といい、様子がおかしいな……。）」

そう思いつつも写真を渡そうと大神が歩き出した時だつた。  
何と花火が、突然橋から身を乗り出したのである。

「は、花火くん！早まるなー！」

慌てて止めようと走り出す大神。

すると、その叫び声に反応した花火がこちらに気付いた。

「え……、お、大神さん！？」

必死で走つてくる大神にびっくりしたのか、花火は橋の淵から離れる。

しかし、今度は大神が危なかつた。

勢いを付けすぎて、止まれなくなつてしまつたのだ。

「わ！わ！しまつた…………！」

サムライの熱血が裏目に出て、大神はある意味華麗に川へとダイブしてしまつた。

その時、

「嫌あああああ…………！」

大神の耳に、誰かの叫び声が聞こえた。

「…………あれは…」

突然聞こえた叫び声を聞き付けて公園を飛び出したダイゴは、橋の上で倒れている花火を見た。

「花火さん！しつかりして、花火さん！」

急いで抱き起こし、身体を優しく揺する。

その真下の川でもがいている大神を無視する辺りは、ダイゴらしい所だろうか。

「う…………ん…………、…………フィリップ…………。」

謫言で誰かの名前を呟く花火。

すると、そこに川からかい上がった大神が姿を現した。

「花火くん！じゃあさつきの悲鳴は…………。」

「僕も聞いた。多分花火さんだよ…………。」

一体何があつたというのか。

二人が揃って首を傾げていると、花火がようやく意識を取り戻した。

「あ…………、大神さん…………、ダイゴさん…………。」

「花火くん、気がついたんだね。」

優しく笑いかける大神。

すると、花火は虚ろなままの表情で尋ねた。

「私…………、まだ生きてるんですか…………？」

「え……？」

その言葉に、ダイゴの顔から安堵の表情が消えた。  
花火の様子が、初めて会った時と違うのだ。

まるで生きる事を無力に思い、生きる事すら拒むような様子に見える。  
現に今の一言も、本当は死ぬはずだったのに生き残ってしまったよう

に聞こえる。

「え？ 別に怪我とかはないけど……。」

その事に気付いていないのか、戸惑つた様子で答える大神。

「そうですか……。まだ、生きてるんですね……。」

「花火くん……、どうしたんだい？ さっきから様子が変だよ？」

生氣のない表情で立ち上がる花火に、大神が心配そうに声をかける。  
しかし、花火は表情を変えずに首を振った。

「心配には及びませんわ。それでは……。」

そう言って歩き出そうとする花火を、大神が止めた。

「あ、ちょっと待ってくれ。この写真、花火くんのだらうっ！」

「え……？」

墓地で拾った写真を花火に差し出す。

幸い水には曝されなかつたらしく、濡れたりふやけたりはしていな

い。

しかし、その写真を見るや、花火は表情を一変させた。

「それは……！か、返して下さい……何処でそれを……？」

余程大切な写真だったのか、花火は大神の手から写真を引つたくつた。

「あ、いや……墓地で拾つたんだけど……。」

やはり戸惑いながらも律儀に答える大神。すると、花火はハッと我に還つた。

「あ……すみません。取り乱してしまって……。し、失礼します……。」

氣まずくなつたその場の空氣に耐えられなかつたのか、花火は早足で橋から立ち去つた。

「な、何だつたんだ……？」

イマイチ状況が飲み込めない大神が呟く。すると、ダイゴが言葉を返した。

「少なくとも、以前とは様子が違うよね。」

「ああ。花火くん……、一体どうしてしまつたんだ？」

いくら考へても、答えが出て来る様子はなかつた。

「で、どうだつた？新隊員は見つかつたの？」

「いや、これと確定できる程の人物はなかつたな。」

「クリコの言葉に、大神は些か残念そうに返事を返した。

あれからシャノワールに戻つた大神は、クリコに呼ばれて新隊員についての会合に参加する事になつた。

今現在靈力が確認されたのは、タレブー、ピエール、ダイゴの三人。しかし、いずれも光武Fを動かせる程の靈力を維持出来るかに疑問が残る。

すると、ここでエリカが申し出た。

「それじゃあ大神さん。花火さんなんてどうですか？」

「花火くん？どうだろ？……、きちんと靈力を測れなかつたから  
…………。」

確かにあの時、靈測機のカウンターは測定不能にまでなつていたが、それが本当に花火の靈力によるものなのかは怪しい。

「花火は戦いには向かん。それより、新隊員であろう？」

「どうでもいいじゃねえか、そんなもん。アタシの給料一倍にしたら一人分働いてやるよ。」

ぶつきらぼつに言つて、ロベリアがテーブルの上の菓子をつまむ。一方、グリシーヌは大神に念を押すように言つた。

「新隊員には靈力と共に、巴里を守るといつ理想が必須だ。そこは、分かつておろうな？」

「もちろんだ。そこはグリシーヌと同意見だよ。」

「だつたらやつぱり花火さんですよ！みんなも知つてますし、優しいですしちゃ……。」

「エリカくん……、そこまで花火くんに固執する事ないと思つぞ？」

あくまでも花火を推薦したがるエリカを抑える大神。すると、唯一花火を知らない人物が口を開いた。

「花火？誰だそいつは？」

「あ、そつか。ロベリアさん、メイドしてませんでしたね。」

「エリカ、今は新隊員についての話だぞ？」

脱線を続けるエリカをグリシーヌが奢める。

「おいおい、せめてその花火って奴について先に教えろよ。」

「えっとね、グリシーヌの友達の日本人なんだ。」

「ふうん、日本人ね……。」

しつこく尋ねるロベリアに根負けして、コクリコが簡単に花火について説明する。

「……じゃあ、話を戻すよ。」

いい加減隣のグリシーヌの視線が痛くなつて来た大神が、冷や汗をかきながら言つた。

あくまで本題は花火ではなく新隊員である。

「支配人によると、新隊員はあと一人だけなんだ。」

「だつたら花火さんでいいじゃないですか。」

「うん。ボクも花火と一緒にいいな。」

「なら、もうそいつでいいじゃねえか。さつさと隊員にしちまおうぜ？」

新隊員があと一人と聞くや、三人は揃つて花火を推薦した。  
が、グリシーヌだけは頑なに反対を示した。

「花火は戦いなど向かん。ごり押しをするな。」

「はい……。」

残念そうにコクリコが俯く。

すると、ロベリアがふと大神に尋ねた。

「アーリー隊長。靈力はどうやって調べるんだ？」

「ああ、この靈測機だよ。アンテナを向けた一人々の靈力が、このカウンターに表示されるんだ。」

そう言って、大神は靈測機を取り出した。  
幸い直つているらしく、カウンターは0に戻っている。

「面白そうだな。隊長、アタシの靈力を計つてみてくれよ。」

「ああ、いいよ。」

言われるままにアンテナを向ける大神。  
すると、驚きの結果が現れた。

「す、凄い！針が振り切れている！測定不能だ！！」

「当然さ。アタシは危ない橋を何度も渡つて来たからな。」

大神が驚く様子に満足したのか、ロベリアは得意げに腕を組む。  
すると、エリカが尋ねた。

「ねえ大神さん。その機械で花火さんも測つたんですか？」

「うん。でもきちんと測る事はできなくって……。」

「隊長、会合の主催を忘れたか？」

釘を刺すようにグリシーヌが睨んだ。

まるで花火の話をやめると言わんばかりだ。

「じゃあイチロー、他に靈力のある人はいなかつたの?」

「そうだな……。強いて挙げるならダイゴくらいか…………。」

「ダイゴ? またよく分からぬ奴が出て来たな。」

「ダイゴも日本人だよ。エリカの友達なんだ。」

「じゃあ花火つて奴が駄目ならそいつはどうだ?」

余程会合を早く終わらせたいらしく、ロベリアがダイゴを新隊員に提案する。

すると、今度はエリカが猛反対した。

「駄目ですー! ダイゴさんを戦わせるなんて、神様が許しません! !」

「…………じゃあ、結局は地道に探すしかないな。」

花火やダイゴが却下された以上、候補は0に戻った。やはり再び出直す必要がありそうだ。

「よし、結論は出たな。今後はみなで街を見回るぞ?」

「みんな、よろしく頼むぞ?」

「もちろんー! ボクに任せとよー!」

「ま、アタシも気をつけてやるよ。」

「エリカもがんばります！」

力強い返事を返す隊員達。

大神はその様子に心強さを感じた。

「隊長……。」

そうして開店準備に取り掛かるとした時、グリシーヌがふと声をかけて来た。

「少しいいか？花火の事で話がある。」

「ああ。俺も聞きたい事があつた。」

「では場所を移そつ。ついて参れ。」

大神がグリシーヌに連れてこられたのは、楽屋だった。  
確かに開店前なら、楽屋に来る者はそういうない。

「…………よし、まずは貴公の話を聞こうつか。」

「ああ。フィリップ？貴公、何故その名を…？」

「フィリップ？貴公、何故その名を…？」

刹那、グリシーヌは表情を一変させ、大神の胸倉を掴んだ。

「吐け！その名前を何処で聞いた！…！」

「は、墓参りをしていた花火くんに会つたんだ。その墓に名前が彫つてあつた……。」

「では貴公が知るのは名前だけか？」

「ああ、他には何も……。」

そう答えると、グリシースはよつやく手を離した。

「ならば話しておこう。フィリップは……、花火のファンセだ。」

「な、何だつて！？」

予想もしなかつた答えに、大神は仰天した。

知り合いか友達だらうと思つていたが、まさかそれ以上の関係だつたとは……。

「花火の婚約が決まつた頃、私もよく一人に会つていた。花火とフィリップの仲の良さは、私から見ても微笑ましいものでな。」

つまりは相思相愛。

花火とフィリップは、既に一生を約束した仲だつたのだ。

「二人は末永く幸せにあると思つていた……。あの日までは……。」

おそらくはフィリップの命日の事だらう。

何らかの事情でフィリップは命を落としてしまつた。

それが一生を誓ったファイアンセであるなら、花火のあの様子にも納得がいく。

「それで、花火くんはフィリップさんの墓に寄り添つていたのか。」

「そうだ。あれ以来、花火はショックから喪服を脱ごうとはしなくてな……。」

花火の様子を思い出したか、グリシーヌは悲しげな表情で俯いた。

「グリシーヌも、話があるつて言つていたけど……。」

「いや、貴公と同じ話だつた。失礼する……。」

そう言つて、グリシーヌは足早に樂屋を後にした。

「そつか……。あれはファイアンセの墓だつたのか……。」

愛した人に先立たれ、残された苦しみがどれだけ大きいか。  
それは、大神自身もよく知つていた。

巴里は華の都。

芸術を始めとする様々な文化が軒並み名を連ねている。  
その一角が、オペラであった。

役者が舞台を舞い歌う様は、さながら生きた芸術である。  
しかし、それを真上から冷ややかな視線で見る者がいた。

「ああ、なんと悲しく滑稽なるかな。享楽に溺れる愚かな人間共よ。」

芝居がかつた口調で、声がした。

「教えてやるう、幾千の灯を点しても、消えぬ闇がある事を。見せてやるう、幾千の朝を迎えるとも、醒めぬ悪夢がある事を……。」

田の前で演じられる悲劇の舞台上に嘲笑を浴びせ、跡形もなく消えた。

「闇に生まれながら、幾重の闇を打ち消したる我が裏切り者よ。見せてやるう、その見せ掛けの光では救えぬ、底なき闇を！」

夜の闇に包まれた巴里を疾駆する影。

その足が止まつたのは、一つの豪邸の前だった。

「感じる……、じる。引き裂かれし心が……、闇を求める」  
女の心が……。」

「フイリップ、……、覚えてますか？あの日の事を……。」

漆黒の身体を闇に溶け込ませ、一つの田がギラリと花火を捉えた。  
まるで、獲物を見つけた猛禽類のようだ。

「見せてみよ、その永久なる願いを。」

「影の目が光つた。」

そこは田の前と同じ部屋。

今見える少女が笑顔を見せている。

唯一違う事があるとすれば、身に纏う服が黒ではない事だろうか。

「フイリップ、来てくれたの。お茶を煎れるから、座つて待つて。」

少女が嬉しそうに誰かの名前を呼ぶ。  
すると、一人の青年が姿を見せた。

「花火、お茶なんかいいよ。さあ、こっちへおいでの。」

「は、はい……フイリップ……。」

顔を赤く染め、フイリップと呼ばれた青年に寄り添つ少女。  
すると、フイリップは少女を抱きしめて囁きかけた。

「可愛い花火……。素敵な笑顔を、僕を見せておくれ。」

「はい……、フイリップ……。」

「ついに、ついに見つけたぞ！」の乙女こそ、我が探し求めた君！  
！」

影は歡喜に震えた。

「黄泉の国へ旅立つた恋人を愛するが故に望まれる死。そのか弱き心に、そのあどけなき胸に、何と深い闇が渦巻いている事か……。」

影は喝采を上げた。

捜し求めていた闇が、ついに見つかったのだ。

芝居の役者を発掘した監督にも似た様子で、影は喜びにうち震えた。

「見るがいい、愚かな人間共。見るがいい、哀れな裏切り者。そのかりそめの光を、我が君の闇に沈めてくれるわ！」

冷たい夜空に、漆黒の羽が羽ばたいた。

「……。」

その夜、ダイゴは中々寝付けずについた。

「エリカ、ますます大神さんの事が好きになっちゃいました！」

エリカの事だ。

「エリカ、ますます大神さんの事が好きになっちゃいました！」

昼に公園で聞いた一言が、しつこく耳に残る。

自分の見ていない所で、エリカは確実に大神に靡きつつあった。

「本当に、あの人人がいいのかな……。」

ほんの数ヶ月前に現れた自分と同じ日本人。  
そんな奴に、自分は負けるのか。

そう考えると、無性に悔しくて仕方がなかつた。

「……。」

ダイゴは黙つたまま、懐からスパークレンズを取り出した。  
月の光を反射し、優しい光を放つてゐる。

「ねえ、ティガ……。」

ダイゴは、彫刻に眠る巨人に問い合わせた。

「君にも消せない闇はあるの？ 例えば……、」

僕の心のよう。

そう言いかけ、ダイゴは止めた。  
返つてくるのは沈黙だけ。

また心の傷を深いものにするだけだ。  
しかしダイゴは気付かなかつた。

夜空に輝く星の一つが、ダイゴを慰めるよつと輝きを増した事を。  
ウルトラの星。……。

その星の名前を、ダイゴはまだ知らない。

「ああダイゴさん。いい所に来て下さいました、ハイ。」

ダイゴが教会に来るや、レノ神父が慌てた様子で走り寄つて来た。

「どうしたのレノ神父?」

「じ、実は……エリカさんがいきなり花火さんといつ方にプレゼントをするとか言つて、市場の方へ大張り切りで……。」

そう言つて市場を指差すレノ神父。

その方角を見て、ダイゴも冷や汗を流した。

エリカは一日に一回必ず何か失敗をする。

特に張り切つている時は、不思議と失敗の可能性が倍増してしまうのだ。

つまり……、

「私はこれから//サがりますので、どうかエリカさんを……。」

「分かった、エリカさんの事は任せで!」

エリカがまだドジを踏んでいない事を祈りながら、ダイゴは一旦散に市場へと駆け出した。

「…………ん? あれは…………。」

不意に窓の外を過ぎつた影に、大神は目を凝らした。  
物凄く急いだ様子で走り抜けた黒い影。  
もしやダイゴではなかろうか。

「どうかされましたか? 大神さん。」

「え? あ、いや、何でもないよ…………。」

向かい側の席に座る花火にそう答え、大神は食べかけの豆腐の冷や  
奴を一口頬張った。

この日、大神は昨日と同じように墓参りをしていた花火と会い、一  
緒に少し早めの昼食を取っていた。

フィアンセを失つた悲しみから立ち直れずにいる彼女を少しでも励ましてあげようと考えたからだ。

そこで、巴里に来てからよく行くレストランで食事を提案した。幸い花火もグリシーヌとよく来るらしく、殿方の頼みは断れないと了承してくれた。

「ありがとうございます。わざわざ日本食を選んでいただいて。」

「いや、たまたま今日のオススメ料理が日本食だっただけだよ。」

大神はそう言つが、半分は花火の言つ通りだ。

フランスのレストランは決まつたメニューがない。

基本的にシェフが朝から食材を買い揃え、その食材からメニューを考えるのだ。

中でも今日のオススメ料理は、シェフがその日に仕入れた食材をふんだんに使用している最高の一品。

味は当然の如く絶品だが、その分値段も高い。

特に今日の日本食は、フランスでは中々手に入らない食材のために値段も高い。

加えて大神も、巴里華撃団の隊長とはいえ普段はシアターのモギリである。

当然の事ながら、給料はそんなに高くない。

実際に今日の食事で、大神の財布はかなり寒い事になつていた。

「（良かつた。花火くん、少し元気になつてくれたみたいだな。）

墓地で会つた時と比べて、僅かだが花火に笑顔が増えた。

そのための代償は大きかったが、彼女が元気になつてくれるなら大した事ではない。

しかし、その安心も長くは続かなかつた。

「お食事、美味しかつたです。ありがとうございました。」

昼食を食べ終え、外に出た花火が大神に礼を述べた。  
どうやら大分元氣を取り戻してくれたようだ。

「それじゃあ、グリシーヌ邸まで送つて行くよ。」

「はい。お願いいたします。」

そう言つて歩き出そうとした時だつた。

突然辺りに黒い羽根が舞い降りて來たのである。

「な、何だ！？」

驚きつつも花火を守ろうと警戒する大神。

すると、二人の前に黒い不気味な影が現れた。

「貴様……、怪人か！？」

その姿を見るや、大神が吠えた。

漆黒のマントとシルクハット。

そして黒く尖つた嘴。

まさに闇に溶け込む姿に対し、獲物を捉える一いつの目はギラリと光つている。

「我が名はマスク・ド・コルボー。お初にお目にかかります。黒き衣のマドモアゼルよ。」

「黒き衣のマドモアゼル？ 花火くんの事が！？」

芝居がかつた口調で迫るコルボーなる怪人から花火を庇うように立つ大神。

すると、コルボーは打つて変わつて大神に殺氣を漲らせた。

「愚かなる男よ！ 貴様になど用はない。」

その時、花火が信じられない事を口にした。

「……………フイリップ……………？ フイリップなのね……………？」

「なつ！ 花火くん！？」

振り返つた大神は驚きに目を見張つた。

それもそのはず。

何故なら花火は、目の前に立つ怪人に怖がる様子もなく、むしろ微笑みながら近付いて行くからだ。

どういう事かと訝しむ大神だったが、次にコルボーが放つた一言で全てを理解した。

「待たせてしまったね、花火。さあ、僕の側へおいで。」

「はい……………、フイリップ……………。」

コルボーの異なつた口調と、コルボーをフィリップと呼ぶ花火。コルボーは幻術が何かで、花火が自分をフィリップと錯覚させているのだ。

花火もフィリップへの思いからか、正常な感覚を失っている。

「行くな花火くん！うわっ！」

大神は花火を止めようとするがその瞬間、周りの黒い羽根が一斉に鳥に変身して大神に襲い掛かって来た。

「さあ花火、僕らだけの世界へ行こう。誰にも邪魔されない世界へ……。」

「はい、フィリップ……。」

その間にも、花火はコルボーに抱かれて連れ去られてしまった。

「花火くん！くそつ……！！」

何とか鳥の群れを追い払い、大神は空を行くコルボーを追い掛けた。

その頃、ダイゴの姿は市場にあった。

「…………また随分とやつがやつて…………。」

「クスン…………、「めんなれ」…………。」

ため息をつくダイゴに、半べソで謝るエリカ。

一人の手には、揃つて包丁とジャガ芋が握られている。  
実はエリカが何かしらのミスをして八百屋の屋台を一つ壊してしま  
い、罰としてジャガ芋の皮剥きを手伝わされていたのだ。  
そこにはちょうどダイゴが到着し、仲良く一人で皮剥きをする事にな  
ったのである。

「それにしても、本当にこのカゴ全部剥くよつに言われたの？」

そう言つて、ダイゴはまたカゴから一つジャガ芋を手に取つた。  
既に100個近い数のジャガ芋を剥いているが、山積みにされたジ  
ヤガ芋は一向に減る気配がない。

そもそも売り物のジャガ芋をこんなに剥いていいのかも怪しい。  
しかし、エリカはキッパリと言つた。

「本当ですー、ダイゴさん、エリカの事信じてくれないんですか？」

「いや、疑つてる訳じゃないよ。変な事頼むと思つて…………。」

常識的に考えて、このカゴ全部のジャガ芋を剥くのはおかしい。  
もしかしてエリカの事、また何か聞き違いをしているのではないか  
うか…………。

また一つジャガ芋を剥き終えてダイゴがそう思つた時、聞き覚えのある声が耳に届いた。

「おやおや、いつかの猿君。今度は市場のお手伝いかな？」

それは、以前ダイゴを猿呼ばわりしてけなした巴里の貴族、ダニエルだった。

前にグリシーヌに一喝されて懲りてないのか、ふてぶてしい態度は以前のままだ。

「…………！」

「おやおや、どうしました？」「ーの華やかさに、声も出ないかな？」

何かに気付いた様子で田を見張るダイゴに、ソレジヤとばかりに胸を張るダニエル。

しかし、ダイゴが見ていたのはそんなものではなかつた。

「（あれは…………、花火さん……）」

何と雨雲が立ち込める空に、黒い影に抱かれた花火が見えるではないか。

それと同時に、懐のスパークレンズが光を放つた。

「（間違いない！怪人が現れたんだ！！）」

「まあ、君にも人を見る田があつたとして、ミーも何か買ってあげよつ。」

「えー本当ですか！？エリカ大感激です！」

た。 気を良くしたダニエルに、エリカは剥いたジャガイモを全部押し付け

「やあどうも！剥いてあるので、すぐに料理出来ますよ。」

「なつー・ひ、ちよつと待てー!!」まーつで……

「遠慮しないで！お店の人も喜んでくれますよ。」

「冗談じゃない！ほら、そこの猿君！君も何か言つて…………！」

ダニエルがそう言つて振り向いた時、ダイゴの姿は忽然と消え、代わりに店の主人が立っていた。

「おう嬢ちゃん。ジヤガ芋は剥き終わつたか？」

「はい！」の方が全部買いたいと

待て!!

・本当かしい?ありかどよ シヤガ芋120個で1200円なんた

そんなん！

かくして、ここに赤い修道服に涙を呞む者がまた一人増えた。

オペラ・ガルニエ。

数ある巴里の舞台の中でも、「オペラ座」という一つ名を持つ程の人気を集める舞台だ。

コルボーは、追い掛けで来る大神ともう一人の人物を冷ややかに見下ろしつつ、黒き衣のマドモアゼルと共にこのオペラ座にやって来た。

「待て！花火くんをビデオするつもりだ！」

「フハハハハ！男の嫉妬程醜いものはないな。そうだろう、花火。」

妨害をかい潜つて追跡して来た大神に、コルボーが侮蔑を吐き捨てる。

「大神さん、私達の邪魔をなさらないで下さい。」

「は、花火くん！」

完全にコルボーをフイリップと信じ込んでいる花火までも、大神を睨む。

「フハハハハ！美しきマドモアゼルよ。貴女の願い、叶えましょう。このマスク・ド・コルボーが！」

言つや、コルボーは花火を連れてオペラ座の中に消えた。

「待て！」

その後を追い掛けようとする大神。

しかし、オペラ座の入口で何かが大神を弾いた。

「くそつ、結界か！」

おそらくコルボーの仕業だろう。

これではオペラ座の中に侵入出来ない。

「大神さん！」

市場から走つて来たダイゴが到着したのは、その時だつた。

「ダイゴ！何故ここに！？」

思いもしない人物の登場に驚きを隠せない大神。すると、ダイゴは肩で息を切らしながら言つた。

「市場で花火さんが怪人に連れて行かれる所を見たんだ。奴は？」

「この建物の中だ。しかし、結界が張つて……。」

そう言いかけた大神だったが、それより先にダイゴがオペラ座に向かつて駆け出した。

「ま、待てダイゴ！そこから中には……。」

慌ててダイゴを止めようとする大神。

しかし、ここで更に驚くべき出来事が起こった。

何と、ダイゴは大神が弾かれた結界を事もなげに素通りしてしまつたのだ。

結界の存在に気付いていないのか、ダイゴはそのままオペラ座の中に入つて行く。

「くつ……、ここはシャノワールに戻らなくては……」

このままでは花火はあるか、中に入ったダイゴも危険だ。

大神は急いで、シャノワールに取つて返した。

外界から遮断され、漆黒の闇に閉ざされたオペラ座の舞台。その舞台の中央に、スポットライトが当たられた。

「ああ……、フィリップ……。」

亡き恋人の笑顔にまどろみ、その場に立ちすくむ花火。ダイゴがその舞台に駆け付けたのは、その時だった。

「見つけたぞ！花火さんを庇つするつもりだー！？」

「やはり来たか、かりそめの光に縋る裏切り者よ…………。」

ダイゴの姿に、コルボーの目が光った。

「我はマスク・ド・コルボー！愚かな人間共に裁きを下す、哀れな裏切り者を闇に沈める者なり！」

「何ー？」

その時、闇に闇ざされた周囲が急激に歪みはじめた。

「舞台は作られ、役者は揃つた、さあ、死のオペラの開幕だーー！」

「…………くつーーー、これは…………ーーー？」

目の前に広がる光景に、ダイゴは絶句した。  
闇に覆われていたはずの舞台。

それが、豪雨に曝される船の甲板に変わっていたからだ。

「…………。」

虚ろな表情で座り込む花火。

おそらく目の前の状況すら、見えていないに違いない。

「ククク……、哀しき黒衣のマドモアゼル。この悲劇の舞台に幕を降ろせるのは、奴の、そして貴女の死を以つてのみ！」

そんな花火にぬけぬけと言うコルボー。  
しかし、そこに別の声が割り込んで来た。

「そつはせん！－！」

「あ、あれは……！」

後ろには、五つの光武Fが立っていた。  
グリシーヌに続き、全員が声を合わせる。

「巴里華撃団、参上！－！」

「怪人！花火くんを幻から解放しろ！－！」

二刀を突き付け、大神が叫んだ。

すると、コルボーはヒラリと五人の前に立つ。

「幻？この雨を、幻と思っているのかね？」

「何！？」

大神を尻目に、コルボーはヒラリと甲板に降り立ち、語りはじめた。

「これは、美しくも悲哀に満ちた物語。オペラ座は、裏切り者と共に冷たい海へ沈んでいくのだ。」

コルボーが再び移動した。今度は煙突の上だ。

「そう……、かつてこの海に沈んだ、一隻の船のよう……！」

その言葉に、人一倍反応する者がいた。

巴里華撃団の中で唯一花火の過去を知るグリシーヌだ。

「まさか……、あの日の花火の記憶を再現しようといつのか！？」

「あの日？グリシーヌ、どうこう事だ？」

大神に尋ねられ、グリシーヌは躊躇いながらも話しあじめた。

「あれはちょうど一年前。花火とフイリップの船上披露宴の時だ……。」

あの日、雲が立ち込めていたが、一人の幸せな笑顔で披露宴は盛り上がっていた。

だが、フイリップが花火に指輪を嵌めたその時、船を衝撃が襲った。隣国の水爆の誤認発射事故と言われている。

船は揺られ、笑い声は悲鳴に変わった。

そして折悪く嵐が来て、船が傾いたのだ。

「花火、この柱に掴まれ！！」

フィリップは咄嗟に、花火を近くの支柱に掴ませた。だがその瞬間、激しい衝撃が再び船を襲つたのだ。

「フィリップ！」

船は大きく傾いた。

柱に掴まつた花火は平氣だつたが、フィリップは雨で滑つた甲板にしがみつく状態になつてしまつた。

「フィリップ！ もう少し手を伸ばして！！」

「人を呼んでくる！ フィリップ、花火！ それまで待つんだ！！」

今思えば、それが失敗だったかも知れん。

花火は必死に手を伸ばしたが、僅かに届かん。

私は、一刻も早く助けを呼びに船に戻つた。

「フィリップ！ もう少しだけ頑張つて！！ すぐにグリシースが助けを呼んでくれるから！！」

花火はフィリップを泣きながら励ましたそうだ。すると、フィリップにこう言われたらしい。

「花火……、泣かないで。花火は、笑顔が一番綺麗なんだから……。」

「フイリップ！」

「だから、微笑んでいておくれ。花火……、愛してるよ……。」

「フイリップ…………！？ フイリップ！！

嫌あああああ…………！」

私が人を連れて甲板に戻ったのは、ちょうど花火の悲鳴が聞こえた時だった。

「花火！ フイリップは、フイリップは無事か！？」

まさかとは思ったが、私は一縷の望みを賭けて尋ねた。  
だが、花火の答えは予想を裏切ってくれなかつた。

「フイリップ…………。」

力のない返事。

何よりもそこにフイリップがいない事が全てを物語つていた。

「まさか…………、フイリップが…………！？ 花火、済まない！  
私がもう少し早ければ…………！」

謝つて済むような事ではない。

しかし、花火の口から出た言葉に、私はハッとした。

「いいのよ、グリシーヌ…………。」

「花火…………？ 何故笑っているんだ…………？」

雨に濡れた花火の顔は、涙を流しながら笑っていた。  
理由が分からず尋ねる私に、花火はこう答えた。

「フィリップが言ったの。ずっと微笑んでくれと……。」

花火はそう言って、フィリップの名前を呼んだ。  
笑顔のまま、泣きながら。

「…………そうよね…………、フィリップ…………。」

「そんな…………、結婚式の日に恋人を亡くしたなんて…………！」

予想だにしない花火の悲しい過去に、エリカも表情を暗くする。

「その通り。これは彼女が一年前に愛する者を失った記憶。」

それとは対照的に、コルボーは高らかに笑つた。  
まるでこの悲劇に酔いしれるかのように。

「今ここに蘇らせよう！幸せに満ちた結婚式の夜を！そこに訪れた  
悲嘆劇の夜を！悲哀のマドモアゼルは幻に微笑みながら、冷たい海  
の底で永久に眠るのだ！！」

それと同時に、激しい衝撃が船を襲つた。  
一年前に悲劇の始まりを告げた、あの時のように。

「大神さん！花火さんを助けないと！」

「そつだな。よし、急いで花火くんの所へ行くぞ！」

エリカの提案を受け、大神が指示を出す。  
しかし、ここで異を唱える者がいた。  
グリシーヌである。

「いや、私はあの怪人を斬る！花火の心を弄ぶ外道を、許してはおけん！」

「あんな所まで行つたら危ないよ！イチローが海に落ちちゃうじゃ  
ない。」

「おいおいどうすんだ？バラバラじゃねえか。」

ロベリアの指摘通り、エリカ以外は大神の指示を聞こうとしない。  
確かにコルボーの卑劣な手口は許し難いし、直接波に曝される甲板  
は危険だろう。

しかし、大神は何よりも花火の救出を優先した。

「頼む、今は俺の指示を聞いてくれ。誰かが指揮を取らなければ、  
本当にバラバラになる。」

部隊が分裂してしまえば、チームワークどころではなくなる。  
ただでさえ一刻を争う状況なのだ。  
こちらからピンチを招く余裕はなかつた。

「確かに。では隊長、指揮を任せると。」

「イチロー、無茶しないでね。」

「アンタもやるねえ。決まつたんなら早いと」動いたつぜ?」

「よし、甲板に移動して、花火くんを救出するぞ!」

大神の指示を受け、五つの光武Fは一斉に動きはじめようとした。だがその時、コルボーの怪しい笑い声が聞こえて来た。

「フハハハハ! そんな事をしても無駄だ。さあ、来るがいい。宇宙を蹂躪する、魔の大怪獣よ! ! !」

コルボーが腰に下げたレイピアを抜き、雲に覆われた空に向けた。その時、真上から微かに鳴き声が聞こえて来たかと思うと、巨大な黒い影が物凄い勢いで船の側に現れた。

「あ、あれは…… ! ! !」

その姿に、大神は戦慄した。  
何故なら……。

「ポキヤーッ! ! !」

怪獣の咆哮が海を揺らし、船を揺るがした。

間違いない。

いや、間違いようがない。

五角形の身体と、ペンギンのよつな顔。

そして腹部にあるもう一つの口。

「べ……、ベムスター……！」

まさに3年前の悪夢を彷彿とさせる、宇宙大怪獣ベムスターがそこにいた。

「…………そういう事か…………。

船の煙突からベムスターを見下ろし、ダイゴが呟いた。  
すると、その後ろからコルボーが口を開く。

「あの愚かな男から逃げている時に少し記憶を覗かせてもらつた。  
かの男が最も強かつたと戦く大怪獣。貴様に奴が倒せるか！？」

それは、ダイゴがティガである事を見越しての、コルボーからの挑発だった。

花火の生きる事に絶望して生まれた闇の中で、巴里の平和を守る巴里華撃団とウルトラマンティガをまとめて始末する。  
それがコルボーのシナリオだつたのだ。

「やつてやるぜ。光の力、見せてやる…………！」

ダイゴは決意と共に、スパークレンズを暗黒の空に掲げ、叫んだ。

「ティガ————ツ！！」

「チャーッ！！」

大空を舞い、ティガがベムスターの前に降り立つた。

「ウルトラマンティガ！！」

突然の巨人の登場に驚く大神。  
すると、隣にいるエリカが叫んだ。

「大神さん！今之内に花火さんを！」

「よし、分かつた。みんな、行くぞ！！」

「「了解！」」

ティガは、ベムスターを船に近付けないよう船を背中に庇い、ベムスターと対峙した。

怪獣の大きさで生まれる波の高さは半端ではない。

そんな波が船を襲えば、たちまち甲板にあるもの全てが流されてしまう。

絶対にベムスターを船に近付かせる訳にはいかなかつた。

「チャツ！」

ティガはベムスターの注意をこじらりに向かせんべく、ハンドスラッシュを放つた。

青白い小さな光弾が、ベムスターの顔を掠める。

「ビィーーー！」

すると、狙い通りベムスターは標的をティガに変えて襲い掛かつて來た。

「チャツ。」

ティガは避ける事もなく、突進して来るベムスターの片腕を捕まえ、横に投げ飛ばした。

「ビキュツー？」

一回転して海にたたき付けられるベムスター。

そこに、ティガが馬乗りになつて追い撃ちをかけた。

「ハツ！ハツ！チャツ！」

激しいパンチのラッシュを浴びせるティガ。形勢がティガに傾いたかと思われたが、そう簡単に勝たせてくれるような相手ではなかつた。

「ビィツー！」

何とベムスターは、腹部の口に海水を吸い込ませ、一気に吐き出したのである。

「ジユワツー？」

思いも寄らぬ反撃に吹き飛ばされるティガ。

すると、ベムスターは両翼を羽ばたかせて空に舞い上がつた。

「ポキヤーツー！」

そして頭からミサイルの如く、ティガ曰掛けて飛び込んで來たのである。

「ジユワツー？」

大きく後ろに吹き飛ばされるティガ。

ベムスターは更に追い撃ちをかけるべく、再び空へ舞い上がる。しかし、ティガもやられてばかりではなかつた。

「ンウウウ…………、ハツ！」

額のクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジする。

そこに、ベムスターがまた頭から突っ込んで來た。

「ポキヤーッ！！」

しかし、パワー・タイプにチエンジしたティガには、ベムスターは格好の的だった。

「チャーッ！」

何とティガは、マルチタイプの時は吹き飛ばされた程のベムスターの一撃を、いつも容易く受け止めたのである。それだけではない。

ティガはそのまま脳天から、ベムスターを地面にたたき付けたのだ。ウルトラヘッドラッシュシャー…………敵を持ち上げて脳天から地面に沈める、パワー・タイプの豪快な力技だ。

「チャーッ！！」

「ビキュッ！？」

凄まじい轟音と共に、ベムスターの頭が海中に消える。

「ハアアア…………！」

ティガは弱つたベムスターにトドメを刺すべく、胸の前に圧縮したエネルギー・ボールを生み出す。

「あつー！デラシウム光流だ。」

気付いたコクリコが叫んだ。

ゲオザークやアンタレスを倒して来たティガの必殺技。

しかしその場の誰もがティガの勝利を確信する中、大神がハツとした様子で叫んだ。

「駄目だティガ！ デラシウム光流は使つなつ！！」

だがそれはもう遅かつた。

「ダアツ！！」

赤く光るエネルギーボールが、一直線にベムスターに撃ち込まれる。だが次の瞬間、信じられない事が起こった。

「ビィーッ！」

ベムスターが待つてましたと言わんばかりに腹の口を広げた。すると、腹の口がデラシウム光流をまるごと吸い込んだのである。

「う、嘘…………！」

「馬鹿なー！」デラシウム光流を吸收したと言うのか！？

驚愕の表情を浮かべる巴里華撃団。

しかし、ベムスターは更なる反撃に転じた。

「ポキヤーッ！！」

何と、先程吸収したデラシウム光流のエネルギーを、角から打ち出して來たのである。

「ジユワツー？」

不意打ちに近いカウンターに吹き飛ばされるティガ。すると、胸のカラー・タイマーが点滅をはじめた。

大技のデラシウム光流の直後にカウンター攻撃を受けたために、エネルギーが大幅に減少してしまったのだ。

「ビィーツー！」

これを好機と見たか、ベムスターは再び空に舞い上がり、ティガに襲い掛かつて来た。

「ティガがあれ程までに苦戦するとは……。何者なのだ、あの怪獣は？」

これまで負け無しだったティガの苦戦する様子に、グリシーヌがローンを切り捨てながら呟いた。

すると、唯一その怪獣を知る大神が答えた。

「それがベムスターだ。奴は様々な光線のエネルギーを吸収し、自分の中にできるんだ。」

3年前に明治神宮でウルトラマンジャックを撃破した唯一の大怪獣。それがまさかこんな状況で現れるとは。

「大神さん、あそこ！」

エリカが甲板の奥を指差した。

そこには、豪雨に曝されずふ濡れになつた花火の姿があつた。

花火くん！！

た。大神は周囲にボーンがない事を確認すると、光武Fから飛び出し

「……………ハイラック……………。」

「花火くん、目を覚ませ！奴はフイリップさんなんかじゃない！君は騙されているんだ！」

虚ろな表情のまま恋人の名前を咳く花火に、大神は肩を揺すって語りかけた。

「あくまでも邪魔だてする気が、愚かなる男！」

「うわっ！？」

横から突き出されたレイピアを避けたその時、船を激しい震動が襲い、甲板が大きく傾いた。

「大神さん！」

「イチロー！」

バランスを崩して甲板に張り付く形になつた大神。

エリカ達は助けに行こうとするが、傾いた甲板の上では思うように動けない。

すると、ここで花火が叫んだ。

「フィリップ！死なないで、フィリップ！！」

おそらくフィリップが波に呑まれた時の事を思い出したのだろう。花火は泣いていた。

「大丈夫だ、花火くん！俺は絶対に死はない！！」

「え…………？ハツ…………お、大神さん…………！」

大神の叫びが心に届いたのか、花火はハツとした表情で大神を見た。コルボーの幻術が解け、正気に戻つたのだ。

「花火くん…………、気がついたんだね。」

大神が安堵の表情で花火を見た。

一方の花火は、突然変化した周りの状況に戸惑つたが、少なくとも危険な状態である事は分かる。

自分は一体どうしたというのだろうか。

レストランでコルボーに幻術をかけられた時から記憶が飛んでいる。先程まで目の前にいたフィリップはなく、目の前には大神が一年前のフィリップと全く同じ状況に立たされていた。

「花火くん、俺は絶対に死ない…………。だから、君も死ぬ事なんて考えるな！」

大神は甲板にしがみついたまま、花火に語りかけた。

「もしフィリップさんが生きてここにいれば、俺と同じ事を言ったはずだ！」

「フィリップが…………。」

その時、花火は気付いた。

「いつまでも微笑んで。」

フィリップが遺した言葉の意味。

それは天国でフィリップに微笑みかける事ではなく、これから出会うであろう沢山の人に行方不明の愛した微笑みを見せてほしい……。

つまり、生きてほしいと。

「大神さん！」

花火は近くの柱に掴まり、大神に手を伸ばした。  
大神を助け、この状況から生きて脱出するためには。

「花火くん…………！」

差し出された手を掴もうと手を伸ばす大神。  
しかし、それを許さない者がいた。

「おのれ……！ 戯れ事はそこまでだ！！ ベムスターーあの愚かな  
る男を先に始末しろ！」

「ポキヤーッ！」

コルボーの命令を受け、ベムスターは今まで戦っていたティガに背  
を向け、船に向かって来た。

「チャツ！」

船に近付かせまいと、ティガは後ろから掴み掛かった。  
しかし、エネルギーを消耗して弱つた身体ではベムスターの進撃を  
食い止められない。

「ポキヤーッ！」

ベムスターはティガを翼で軽く払いのけ、更に船に近付く。  
すると、ティガは再び額のクリスタルを発光させた。

「ンウウウ……、ハツ！！」

ティガの身体が紫に変わる。

パワータイプからスカイタイプにチェンジしたのだ。

そして、ティガは赤く点滅するカラータイマーに右手を当て、ハン  
ドスラッシュの要領で青白いエネルギーをベムスターの頭上に放つ  
た。

ティガフリーーザー…………凍てつく冷氣を敵の頭上で爆発させ、凍らせてしまうスカイタイプの光線技だ。

「ビィツ！？」

船の眼前に迫っていたベムスターは、完全に凍り付いた。

「ハアアア…………！」

ティガはトドメを刺すべく、両手を左右に水平に伸ばし、頭上でエネルギーを集中させた。

「ジユツ！！」

ベムスターの背中に、必殺のランバルト光弾が発射された。青白い光の矢がベムスターの背中に深々と突き刺さる。

そして、そこから四方に亀裂が入り、ベムスターは粉々に砕け散つた。

「無駄だ！マドモアゼルが死を選ばぬ限り、この悲劇に幕は降りん！」

コルボーの叫びと共に、かつてフィリップを飲み込んだ高波が迫つて来た。

しかし、幻から田を覚ました花火は、コルボーの思い通りにはならなかつた。

「大神さん…………私も…………私も…………生きたい！」

花火が今までにない大声で、そう叫んだ時だつた。

突然花火を目に見える程の靈力が包み、一気に爆発したのだ。

「な、何！？グアアアアア…………！」

その靈力の波動は「コルボー」を吹き飛ばし、オペラ座の壁にたたき付けた。

すると、その拍子に幻が消え、周りは沈み行く船はオペラ座のステージに変化した。

花火の靈力の波動と生きる事への希望が、コルボーの幻を打ち消したのだ。

「（花火くんに、これ程までの靈力があつたなんて…………。）」

やはりあの時の靈測機の反応は故障などではない。

花火は、コルボーの幻を打ち消せる程の靈力を秘めていたのだ。

「おのれ…………、我が最高の舞台を汚しあつて…………！」

「黙れ！乙女の心を弄ぶ不届き者めが！」

憤怒の表情を見せるコルボーに、毅然と言い放つグリシーヌ。大神はそれに続くように花火を庇つた。

「貴様に花火くんは渡さない！花火くんは、俺達が守る！……！」

「お、大神さん…………！」

目の前で大胆な発言をする大神に、思わず頬を赤く染める花火。すると、その隣によく知る人物が姿を見せた。

「大神さん！花火さんの事は僕に任せて！」

「ダイゴー！無事だったのか！」

それは、大神より先にオペラ座に潜入していたダイゴーだった。特にコルボーに襲われた様子もなく、大神達は胸を撫で下ろす。

「よし、ダイゴーは花火くんを連れて、そこにあるダストショートで避難してくれ！」

「分かった。気をつけてね！」

「大神さん、『武運を………！』」

そう言い残してオペラ座を脱出する一人。

それを見届けた後、大神は一刀を構えて叫んだ。

「みんな気をつけろ！蒸氣獣が現れるぞ！」

「愚かなる者共よー我が漆黒の闇に沈むがいい！行け、ローン共よ

！」

コルボーの指令で、ローン達が一斉に襲い掛かつて来た。

「い、ここは……？」

「シャノワール……だよね？」

ダストショートを抜けて出た場所に、ダイゴと花火は仰天した。  
そこは、自分達もよく知っているテアトル・シャノワールだったからだ。

「大丈夫かい？ ここなら、もう安全だよ……。」

「グラン・マ！ ジャあここはシャノワール！？」

「もしかして、あなたが……。」

目の前に広がる机には見た事もない設備が施されているし、真ん中には巴里の地図が映し出され、ちょうどオペラ座の地点が赤く光っていた。

「そう。このシャノワールが、あたし達巴里華撃団の本部なのさ。気付かなかつたらう？」

その言葉に、二人は啞然とするしかなかつた。

「観客が舞台に上がる……………？そのよつた事、断じて許さんぞ！」

観客席に降り立ち、コルボーが舞台の上を睨んだ。

そこには、配下のローン達を全滅させた大神達の姿がある。

「花火の心を弄ぶ不届き者め！その罪、万死に値する！」

斧を突き付け、猛然と言い放つグリシーヌ。

すると、コルボーが言い返す前にロベリアが言い返して來た。

「友情」「はもつといいかりせ、わつせと片付けようぜ？」

「何だと…？もひ一度言つてみろ……」

すかさず食いつくグリシーヌ。

しかし、これが敵に付け入る隙を与えてしまった。

「仲間割れか？…………面白い。この我が演出してやるつ。無知にして無能な観客共の、愚かなる最期を！」

刹那、周りの空間が一瞬大きく歪んだ。

「ん…………？」「これは！？」

後ろを振り返った大神は顔を凍りつかせた。

何故なら、後ろにいたはずの仲間達が一つの間にか、ローンにすりかわっていたからである。

「そ、そんな！いつの間に！？みんな、何処にいるの！？」

辺りを見渡しても、仲間の姿は見えない。

エリカが慌てる中、グリシーヌは斧を手に笑つた。

「ふつ、小賢しい！」この程度の数、すぐに切り伏せてくれる……」

しかし、今度ばかりはそうもいかなかつた。

「チツ、雑魚のくせに何て強さだ！？」

切り掛かってきたポーンの一撃を爪で防ぎ、ロベリアが悪態をついた。

強いのは当たり前だ。

何故な、今ロベリアを攻撃したのは、外ならぬグリシーヌなのだから。

コルボーは大神達に幻術をかけ、仲間をあたかもポーンに見せ掛けたのだ。

「フハハハハ！最高の茶番だ。仲間同士、醜く殺し合つがいい！」

たちまち仲間同士で戦いはじめた巴里華撃団に、コルボーが高笑いを上げた。

本来なら姿がローンとはいえ、動きのクセなどから仲間を判断する事は可能だ。

しかし先程のロベリアとグリシーヌのように、巴里華撃団にはチムワークが低いという致命的な弱点があり、仲間の動きなど思い付きもしないのが現状だった。

しかし、その企みを阻止する者がいた。

「グガアアツ！な、何事だ！？」

突然肩を掠めた何かにコルボーが怯んだ。  
見ると、目の前の床に矢が突き立っている。

「わっ！？…………… そうか、幻だったんだ！」

その拍子に幻術が解け、コクリコが叫んだ。  
周りにいたはずのローン達は、仲間に戻っている。  
一体誰が助けてくれたのか。

疑問に思う大神達だが、グリシースには心当たりがあった。

「！」の暗闇の中で正確に狙うあの腕前……………まさか！…

見ると、テラスの上に光武Fが佇んでいた。  
そしてもう一人……………

「北大路花火、参ります！－」

戦闘服に着替え、弓を構えた花火の姿がそこにあつた。

あれから作戦司令室で大神達のピンチを知った花火は、グラン・マ  
に頼んで予備に置いてあつた光武Fに乗り込み、出撃したのである。

「おお、我が黒衣のマドモアゼルよ……………我のもとに戻るのだ…  
…。」

花火が戻つて来た事に安堵してか、コルボーは再びフイリップに姿を変えて花火の前に現れた。

「さあ、花火。こっちにおいで……。」

「……。」

花火は無言で目の前の恋人を見た。

それが本物でない事は十分承知している。

どんなに愛しいあの声に囁かれても、応える訳にはいかなかつた。

「長い間、一人で淋しかつたろう？僕の側においで……。」

「フイリップ……。」

花火は弓を下ろすと、静かに目を閉じた。  
胸に手を当て、心を落ち着かせる。

「フイリップ……、私に貴方を忘れる事は出来ない……。」

「そうだろう？さあ花火……。」

笑いかけるフイリップ。

すると、花火はしっかりとその顔を見据えて言つた。

「でも、いつまでも貴方の笑顔に縋る訳には行きません。フイリップも、それを望んではいないでしようから。」

「花火？何を言つんだ。僕は君を迎えて来たんだよ！」

「『めんなさい』……、私はまだ、貴方の許へは行けません。」

それは、過去との完全な決別だった。

花火は自ら、コルボーの幻を打ち破つたのだ。

「…………それと、ファイリップに会わせてくれて、ありがとうございます。」

コルボーに一礼を返す花火。

その瞬間、彼女の胸の中の闇が急速に消えていくのを、コルボーは感じ取つた。

「マドモアゼル…………、貴女までも我を拒み、光を見出だすというのか…………？」

コルボーは態度を一変させ、花火にレイピアを突き付けた。

「幕だ！貴様達の死を以つて、幕を降ろしてくれる……！」

「怪人が嫉妬か？見苦しいぞ、マスク・ド・コルボー……！」

「こひどばかりに言い返す大神。

すると、その言葉がコルボーの逆鱗に触れた。

「黙れ！蒸氣獸『セレナード』、夢幻の闇よりいで、我が漆黒の翼となれい！！」

言ひや、コルボーはマントを空に放り投げた。

すると、マントはたちまちに鳥の形をした蒸氣獸へと姿を変えた。

「巴里華撃団！貴様らの朱き血で、このオペラ座を染めてくれるわ  
ー！」

その叫びと共に、今度はコルボーの真後ろに黒い光が集まつた。  
すると、黒い光はたちまちに一匹の怪獣へとその姿を変えた。

「我がしもべ、変形怪獣ガゾート！我と共にあの愚かなる者共を引  
き裂くがいい！」

「グワーッー！」

コルボーの声に応えるように、ガゾートが咆哮を上げる。  
大神はガゾートとセレナードを見据え、指示を出した。

「田標、敵蒸氣獣及び怪獣の撃破！行くぞ！…」

「「了解！」」

「オーナー、敵は新たに敵怪獣を放つて来ました！」

「生体反応がありませえん！怪人が生み出した人工生命体みたいですう！」

「……多分負の感情や心の闇を実体化させたんだろうね。となると、ベムスターもあの怪獣の生み出した幻と見るべきか……。」

メルとシーの報告を元に、グララン・マはモニターに映し出されたガゾートなる怪獣を分析した。

相手は幻でオペラ座を包む程の力を持っている。

特に大神の記憶からベムスターのデータを盗み出してコピーする手際の良さは、敵ながらあっぱれだ。

おそらくコルボーにとつて、闇を形に変える事など造作もないのだろりづ。

瞬時にある怪獣を召喚して見せたのが、何よりの証拠だ。

「まあ、いくら闇を集めようがムッシュと彼の前には無力だよ。」

「彼？誰の事ですか？」

首を傾げるシー。

すると、メルが気付いたように笑った。

「オーナー、その彼が到着したようです。」

見ると、モニターにはガゾートの前に立ちはだかる光の姿があった。

「あー、ウルトラマンティガだ！！」

「（頼んだよ……ダイゴ……。）」

再び現れたティガは、ガゾートの姿を見つけるや掴み掛けた。

「チャツ！」

「ガアアアアアッ！」

激しくぶつかり合うティガとガゾート。

その隣で大神達もまた、コルボーの操るセレナードと戦っていた。

「おのれウルトラマンティガ！貴様も我の舞台を邪魔だてするか！」

怒りを隠さずともせず、セレナードは翼を羽ばたかせて突風を巻き起こす。

「命の瞬きを見せておくれ！ああ、夜ね闇よーレ・デスフィネス！」

身を切り裂く突風が襲い掛かった。

大神達は反撃を試みるも、強い向かい風に押し返されて近付けない。一方でティガもまた、ガゾート相手に苦戦を強いられていた。

「ハツ！」

氣合いと共に正拳突きを繰り出す。  
しかし、その一撃はガゾートの身体を突き抜け、そのままティガの腕を捕らえてしまったのだ。

「ジュワッ！？」

ティガは慌てて引き抜こうとするが、ガゾートの身体は復元されてしまい、中々引き抜けない。

その間にガゾートは、満足に動けないティガに攻撃をはじめた。

「ガアアアアッ！！」

口から黒い光弾を次々と連射する。  
至近距離からの激しい攻撃に、ティガのカラータイマーは程なく点滅をはじめた。

「フハハハハ！ガゾートは闇より生まれし我がしもべ。貴様ごときに倒せはしない！」

勝ち誇ったように「ルボー」が笑う。  
しかし、それが裏目に出てしまった。

「（闇から…………？それなら……………）」

ティガは何かに気付いたように動きを止める。  
そして、胸のカラータイマーを発光させた。  
まばゆい閃光で敵を牽制する、タイマーフラッシュである。

「ガアアツ！？」

突然の光に驚き、ガゾートはティガの腕を離して後ろに下がった。

「ハツ！」

ティガは発光するカラー・タイマーの前に両腕を交差させた。すると、カラー・タイマーに四方八方から光が集まつてくる。タイマー・フラツ・シユ・スペ・シャル……光に弱い相手に限定して、凄まじい光量の光を浴びせるタイマー・フラツ・シユの強化盤だ。

「チャツ！！」

両腕が降ろされ、目が眩む程の光がガゾートに浴びせられた。闇が形を変えたものなら、まとめて光で焼き消す事が出来る。ティガはそう考えたのである。

「ガアアアアア…………！」

光に全身を貫かれ、ガゾートは断末魔の叫び声と共に跡形もなく消滅した。

「ば、馬鹿な…………！！我の操る闇が、そのまがい物の光に負けたというのか…………ー？」

自らが闇から生み出した怪獣が容易く敗れ去り、コルボーは呆然となる。

その隙を、花火は見逃さなかつた。

「今です！北大路花火、一の舞…………、金枝玉葉！！！」

ボウガンから放たれた矢は、寸分の狂いなくセレナードの翼を射抜く。

「なつ…………！」

飛行能力を失い、落下するセレナード。

その下で、大神が一刀を抜いて待ち構えていた。

「狼虎滅却…………、刀光剣影！……」

青白い稻妻が大神の一刃からほどばしり、セレナードの胸を×の字に切り裂いた。

「かりそめの光に負けるとは…………、我が闇も、かりそめに過ぎなかつたというのか…………！」

予想もしなかつた舞台の結末に驚きつつ、コルボーはセレナード諸とも爆発四散した。

「…………申し訳ありません。私のために、皆さんを危険に晒してしまって…………。」

戦いを終え、花火が大神達に頭を下げた。

元々の始まりは、自分がフイリップの過去を引きずっていたから。そう思い、自責の念に駆られたのだろう。

「そんな事はないよ、花火くん。君のおかげで、俺達は勝てたんだ。

「

「胸を張れ、花火。そなたの今の姿に、きっとフイリップも喜んでいるだろ?」

その事を察し、大神もグリシーヌも花火に笑顔で答える。すると、ようやく花火も笑顔を返した。

「は、はい……。」

「よし、隊長。いつもの締めをやらねばな。」

花火の笑顔に頷き、グリシーヌが大神に言った。

「そうだな！おいで、花火くん。」

「え、ええつ…………？」

手招きする大神に、躊躇いながらも近付く花火。  
そして……、

「勝利の…………ポーズ…………」

「決めつ……！」

「チャツ。」

その様子を見届け、ティガは静かに消え去った。

その日の夕方、大神は花火と共にフィリップの眠る墓地に足を運んだ。

「フィリップはいつも優しくて……、私も彼に甘えてばかりでした……。」

正に相思相愛。

フィリップは、花火にとって運命すら感じさせる人だつたろう。大神の隣で、花火はポツリポツリと呟くように言った。

「でも、甘えてばかりではいけないんですね……。」

「ああ。フィリップさんが安心出来るように、強く悲しみを乗り越えるんだ。」

大神が花火の肩に手を置いた。

「君はフィリップさんに心から愛を受けた。今度は君の番なんだ。」

「私の……？」

「そりゃ。君が誰かを愛する番だよ。君は、それが出来る人なんだから……。」

優しく笑う大神。

その笑顔に、花火はフィリップとはまた違う温かさを見た。

「大神さん……。」

花火は、大神の胸に顔を埋めた。

その胸の温もりは、フィリップに抱きしめられた時の思い出を彷彿とさせた。

「今だけ…………泣かせて下さい。…………これで最期にしますから……。」

「ああ、いいよ…………。」

大神は、優しく花火の黒髪を撫でた。

花火の頬を伝う涙が、揺らめく夕陽に照らされて光った。

揺らめく想いを断ち切ろうとする彼女の様子を、見守りながら……。

「ほり、ピエール急いで！」

客で賑わうシャノワールの客席に、ダイゴがやつて來た。

その後ろには、親友のピエールの姿もある。

二人はエリカから花火も舞台に立つと聞いて、シャノワールにやつて來たのだ。

「今宵はプログラムを変更して、新しいメンバーを紹介します！」

「あ、始まるよ！」

「ハハハ、ダイゴ。そう慌てないで。ここからでもよく見えるよ。」司会のメルの声に、客席の視線が一斉にステージに向く。すると、今度はシーが続いた。

「東洋の黒真珠！その名もタタミゼ・ジュンヌ！」

その言葉と共にスポットライトが照らされ、タタミゼ・ジュンヌと花火が姿を現した。

タタミゼ・ジュンヌ…………フランス語で大和撫子という意味だ。日本流の着物を纏い、奥ゆかしさを表現した踊りで客を魅了する花火に、ダイゴやピエールはもちろん、観客達全員が釘付けとなつた。

「へえ……、綺麗だね。」

「花火さん……。」

初めて会つた時は、細い小枝のようにか弱かつた花火。しかし、今の彼女は違う。悲しい過去を断ち切り、明日を見る強さを得た。その姿が、どれだけ美しいか……。

「……私は、もうしばらくみんなと頑張つて行こうと思います。悲しい事や辛い事も、逃げずに受け止めて見ます。」

拍手に包まれる中、花火は心中でフイリップに語りかけた。今までのようになると甘えるのではなく、しっかり自分の決意を以つて。

「だから……、見守つていて下さい。」。フイリップ。

フイリップの愛した微笑みで、沢山の人々に笑顔や喜びを与える花火。

そんな彼女に、フイリップが何処かで笑いかけた気がした。

「……光の巨人。まさか我等に反旗を翻すとは……。」

闇の中に、野太い声が響いた。

「ウルトラマンティガ……。我等に刃向かつた罪、万死と心得い！」

描ひめく想いは（後書き）

『次回予告』

メル、聞いた？オーナーがお休みくれるんだって！

それなら、シャンゼリゼにお買い物に行きましょうか。

あ、大神さん！その人お友達ですか？

次回、サクラ大戦3！

『燃ゆるシャンゼリゼ』

愛の御旗のもとに……

巴里はいいなあ～！

……パン硬いけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3428y/>

---

超古代の星

2011年11月20日02時15分発行